

猛烈なる大風雪

一月二十一日(大風雪)
行程三里廿丁

昨夕は非常な吹雪

南 極 記

が空を仰ぐと雲の色は段々と險惡になり、雪片霏々として降り初めた。天候の劇變著るしき極地の事とて見る。雪は風伯に伴うて吹雪となり、次第に猛烈なる大風雪となつた。全く咫尺をも辨ぜざる光景、連も此中を前進するとは不可能である。そこで已む無く露營と決し、匆慌と雪中に天幕を張つた。

此日、鞍犬は前隊後隊各一頭づゝ、隋氣を生じ、糧を曳かないので、列外に出して、一隊に隨はしめることにした。列外に出された犬は、ヨボヨボして糧隊から兎角後れ勝に隨つて来るやうであつたが、さて休憩して見返ると、犬の姿は見えない。何れも氣遣うて居ると、約一時間後ト、ボ／＼と歩いて來た。夜九時一同就寢した。此日の行程三里二十丁であつた。

露營の第二夜が明けると、二十二日である。午前八時一同起床した。「昨夕は非常な吹雪だつた」と隊長は語る。他の連中はグツスリ寢込んで居たので、夜中の大風雪には夢を破られなかつたのである。武田

出發の躊躇

何時になき大群の元氣
天幕は青色に限る

實地經驗上の活知識

上 陸 本 隊 の 探 檢

部長例により朝の觀測に従事する。何うも吹雪襲來の模様があるのて、出發を躊躇したが、幸に午前十時頃から天候恢復の兆を示して來た。隊長の眼症は今朝は益々快方に向つたので、一同大に元氣を得。

「今日は大に奮發して進行を急がう」と異口同音に勇み立つた。鞍犬も主人等の元氣にかぶれたものか何時になく元氣である。

今日までの經驗によつて雪中露營に用ふる天幕に就いての智識を得た。即ち天幕は色止めしたる青色が最も良い。シャツクルトン氏の探檢隊の用いた天幕は青色ではあつたが、色止めをしてなかつた爲めに天幕内の煖爐の火氣を受けて褪した。すべて天幕の色は褪色すると非常に眼の爲めに不良である。故に天幕は假令全部青色でなくとも上方だけは是非褪色の憂なき青色を用ゐるに限るのである。それから天幕の柱は竹材よりも木材の方が遙に適當して居る。又天幕を出る際は必ず眼鏡を用ゐねばならぬ。是等は全く實地經驗上より得たる活智識である。

扱て愈よ出發したのは、午後一時であつた。處が前夜の吹雪の爲めに滑る箇處頗る多く、加ふるに荷の重量が輓犬の牽引力に對して稍や過重なもので、兎角後隊は前隊に比して後れ勝となる。そこで、二時間許り隊長と三井所部長とは櫓の後押を試みた。斯く二里許を進んで處で、犬も人も疲労を感じたので、臨時休憩をなし、評議の結果前二日間の經驗に鑑み、荷物の大節減を行うことにした。隊長は毛皮の防寒服、武田三井所兩部長並に山邊花守の兩アイヌは互に寝蓑を共同にするに決し、其他の防寒服と、九日間の食糧と其重量約四十貫目許を櫓より卸し、其處の雪中を直ちに貯蔵所となし、目標の爲めに三角形の赤旗を樹てた。

之れて櫓も餘程軽くなつたので、午後五時再び出發した。併し輓犬の疲労は相變らず、元氣頗る沮喪して見えた。進行中不圖氣が着くと磁針が時折變更するので、極上の磁器一切を取除くと、漸つと變化を受けなくなつた。これが若し長時間氣が着かずに進んだら、意外の方

角違ひを演じて居たに相違ない。

午後九時頃南西方に當り、山岳らしき物數點を目撃した。

「ソラ山が見える！」

「イヤ、彼れは山ぢやない、磁氣樓だ！」

と種々の議論が出る。そこで、針路を變へて其方向に進むべく急いだ。が、南極は水氣多き地として、遠近の度頗る不明である。そこで、一先づ露營地を定めることとし、午後十時とある雪上に天幕を張つた。武田部長は山邊花守等に命じて、其山の視察に向はせた。やがて、是等アイヌの報告によると、其地點は雪原ではなくして灣である。山の如き二百尺ばかりの氷堤が其處に聳へて居て、灣内には野氷が張詰め處々に綠色の水も見えるところである。先刻山岳と見たのは、此大氷堤であつたのだ。此大氷堤は宛ら火山噴出の痕の如く見える。此日行程は六里十二町である。

雪原突進の第三夜(夜と云ふも無論當時太陽は没せず、只時間の示す

所により普通夜の時間に當る時を便宜上斯く云ふのみ以下之に同じは過ぎて二十三日の朝となつた。曉來武田部長は、前夜の花守アイヌの報告に基き状況視察の爲めに單身露營地を出發したが果して彼の言の如く、此處に一つの灣が灣入して居て、其岸に大氷堤があつた。此灣は鯨灣の灣口に於て見らるゝ最終點から東南に屈折して、三十里程も入込み居るやう見えた。(此灣の終點が東南に屈折して居る事に就いては、他の方面より見ても充分に證據立てられる。それは最初開南丸が灣口に到着した時は薄氷が灣内に漲り詰めて居たので遙かに遙かなる此灣の終點は屈折して居るものか居ない物か、充分には判らなかつたが、同船がエドワード七世州より歸還した時には、灣の終點が東南に屈折して居るやうに見られた。此際には最早灣内の氷が解けて、青々とした水が漫々と溢へて居たので、水面と氷堤との境等も明白に見られたが、灣の最終點の氷堤は東南に向つて居る事が明白に見られた。尙村松吉野兩隊員はアムンドセン一行の海岸天幕訪問の際同

灣の最終點が東南に屈せる事を確かに目撃した。歸營すると午前八時であつたので部長は日々の例に依り、天測に従事した。天測は毎日午前八時と午後四時との二回に經度を測り、正午に緯度を測ることになつて居る。此時人工地平儀を取扱はふとすると、水銀が全部酸化して居る。寒帯地では却々酸化を防ぐことは困難である。のみならず、豫て脱脂綿で拭いて置いた、其水銀が、デツキ、ウオッチに浸蝕して居るのをも發見したので、部長は其修覆を試みやうとすると、手はセキスタントの凍結せる鐵器に附着して、あわや凍傷しやうとした。此一例に見るも、如何に奇寒の烈しいか、知られる。極地に於ける機械の取扱は、此くの如く甚だ困難である。

午前十一時、露營地を出發し、南進の歩を急いだ。進路は一里二里位に亘る緩漫の紆曲を成し、極軸に向ふに従ひ次第に高き傾斜を呈するが如く感ぜられた。开は何故と云ふに、之を數里前方から見ると、一の南走したる高原を明かに認め、互に之を指さしつゝ、纜を進めたの

案内にも平凡なる
小丘

鞍犬大に疾走に馴
る

南 極 記

てあつたが、さて二三時間の後に至り其指したる位置に到達すると案内にも平凡なる紆曲の小丘に過ぎぬことを發見したからである。又た後隊の櫓後れて其小丘が前後兩隊を隔てて挟んだ時には後隊が前隊の姿を見失ふことは屢次である。兎に角眼界は茫茫として際涯なき處へ雪の反射の爲めに眼眩ゆくして前方を直視することができぬ。それ故に其紆曲傾斜の角度などは眞に想像に苦む譯で、只進行の難易の比較や櫓の緩急から推して之を知るのみである。

鞍犬も今日は餘程曳き馴れて來たと見え頗る調子が良い。此分ならば前途先づ安心してあらう。進行中櫓の上にいる時はシャツ一枚で十分な位の暖味を覺える。併し寸時でも停止すると奇寒は疾忽に肌を襲ふのは勿論である。

午後三時五十二分櫓を停めて晝餐を喫し小憩の上再び出發したのは午後六時であつた。此時雪片霏々として降り來り前隊の先頭犬はともすると道に迷うて一向用を爲さぬ。そこで三井所部長は櫓を下

犬に先んじて道案
内

折々行路を誤る

進むと共に變化す
る丘頂と雲形

上 陸 本 隊 の 探 検

り、犬に先んじて道先案内役となつた。然るに間もなく小飛雪は大吹雪となり、烈風物凄きが中に雪霧四面も掩ひ、全く三問先すら見えなくなり、呼吸も出來ぬ位となつた。三井所衛生部長は左右の手にコンパスを携へつゝ、進路を測つて進むのであるが、折々行路を誤り、後方のコンパスから注意を受けること數次である。

此道先案内は假令晴天の時でも、一木一草なき雪原であるのみならず、一分間前に目標とした紆曲の丘頂や、遙方の雲形などは、進むと共に變化するから甚だ困難である。却々實驗者以外の者では想像も及ばぬ程である。

今日は午後十時まで、強行の筈であつたが、鞍犬へは前日荷物減少の際に少し許り糧食を與へたのみであつたから、流石の犬群も大に疲勞し盡して居るのと、吹雪の何時歇むべしとも見えないのと、午後八時四十五分第四の露營天幕を張ることにした。此日の行程八里三十町天幕内で今日の進行の困難を語りつゝ、一同打揃うて晚餐を喫した

雪原上の味噌汁
一月廿三日(吹雪)
行程八里三十丁

南極探検記

氷骨處々に横はる

が、鯛味噌の温い味噌汁は、雪中露營者に如何ばかりの體温を與へたことであらう、殊に其美味は終生一行の忘るゝ能はざる所、他國探検家の未だ曾て味ふことの出来ぬ、日本探検隊のみへ天與された美味であつたことを特記して置く。

明くれば二十四日午前八時三十五分一同起床した。前日來の吹雪の爲めか、天幕内の敷物に濕氣を生じて其不快涯りない。前後四晝夜の露營生活の経験により、陸軍用の毛皮胴着か、探検用として最も適當品であることを知つた。朝來一天掻き曇つて居るので、天測不可能の爲め、その代りに三井所部長露營地の撮影をなし、而る後人も犬も元氣よく南進の途に就いた。時正に午前十一時三十分である。

一望萬里、眸底に收まる、一白の世界は、實に莊嚴無比の絶景である。併し、纜の進行につれて、氷骨の處々に横はつて居ることを知つた。次第に進むうち、それが段々と多くなる。此氷骨は降りたる積雪が極の猛風に吹寄せられて、出來たもの宛も海豹の横はりたる程の大さである。

纜の顛覆

上陸本隊の探検

氷點下二十二度

る。それが凍結して氷骨となり、纜が其上に乗上げると滑る、滑つて纜が顛覆する、全く纜と氷骨との戦ひである。出發以來顛覆既に四五回に及ぶといふ騒ぎである。斯く纜は氷骨の爲めに劇しき上下動を起すので、遂にコンバスの安全枠が外れて終つた。武田部長は、「大變だ、コンバスが破れては、それこそ盲目者が杖を失つたやうなものだ」と云つて、早速修繕に取掛つた。だが何分氷點下十八度といふ寒氣であるから、纜を停めての修繕は、逆も形容の出來ぬ苦痛である。宛ど其時は午後三時半であつたから、修繕の終ると共に晝餐を喫し、小憩の後、正五時再び出發した。

然るに、午後七時三十分に至り、矢張氷骨の與ふる激烈なる上下動の爲めに、磁針器に故障を生じた。此時の温度は前回よりも降下して氷點下二十二度といふのであるから、少許の油断によりて、武田部長は磁針器修繕中に凍傷を受けた。實に危険なことである。やがて、更に南

一月廿四日(曇)
行程九里半

怪しき今日の天候

南 極 記

進を續けたが餘りの寒さに辟易し、遂に午後九時五十分を以て、第五夜の露營天幕を張ることにした。其前午後九時頃、後列の鞆犬一頭、右足の凍傷に罹り、歩行に堪へ兼ねて打臥し、曳摺られつゝ、悲鳴を揚げるやうになつたので、列外に離して櫛の跡から従はしめた。

此日の行程九里半、空は終日曇り勝てあつたが、吹雪の來襲を受けなかつたのは先づ幸ひであつた。

翌二十五日、白瀬隊長から喚起されて起床したのは午前八時である。毎朝、連日の疲労で、ともすると寝過さうとする、曰く觀測、曰く出發準備、それらの任務を終つたのは午前十一時であつたが、空模様次第に曇色を増して來たので、暫らく進發を躊躇して居るうち正午となつた。

「今日の天候は怪しさうだが、進めるだけ進まう」と云ふので、正午露營地を出發した。處が鞆犬先生は、段々ズルクなつて、人間が前方に居るとか、或は鳥でも居るとか、かてないと、何うも進まない、背後から指揮した

氷骨壁々一步一滑

大吹雪の襲來

上 陸 本 隊 の 探 検

位では歩まなくなつた。そこで隊長や武田部長や三井所部長は、代るく櫛の前方に立つて、道先案内になることにしたが、何分滿地の氷骨は、壘々として、一步に一滑といふ有様滑つては、轉ぶ、仆れる。就中武田部長が最も多く滑轉けるといふのは、背丈の高い爲めだといふ三井所氏の説は、科學的でないが、結局學術部長だけに、重量なる機械を身に帯びて居る爲めであるといふ部長自身の説明の方が合理的である。慙んな騒ぎで、少々疲労したので、小憩したのは午後二時半であつた。

鞆犬も、段々慣れて來たし、それに櫛の前方へ立つて、案内してくれるのもよいが、歩むよりも顛覆の方が多しといふ工合では、却つて櫛の進行の邪魔になるといふ山邊花守兩アイヌの言に、傘屋の丁稚と同様骨折つて怒られた連中、それでは乗らうと云ふので、何れも櫛上の人となり、午後三時出發を始めた。斯くて進むうち、見る／＼氣壓計の針は下降し始め、前方を見直すと、雪は降るのでなく、舞うて居る。之は無論大吹雪襲來の兆候なので、一同警戒怠らず、雪中の強行を續けて居ると、果

して大吹雪!!

ドイッくといふ猛風極地の寂寥々を破つて物凄さと限りなく午後五時頃に至ると益々猛烈を極め疾風さへ其度を加へて全く咫尺を辨ぜずといふ光景。實際極地の大吹雪は内地人の想像だも及ばぬ猛烈無比のものである。

此大吹雪は端なくも一行に大椿事を興へやうとしたといふのは他にもない。前隊後隊の聯絡が絶え様とした事である。ドイッと一時に猛烈に吹雪の來た時呎尺濛々となつたが間もなく前隊の方で見返つて見ると直ぐ數間の背後に在るべき筈の後隊の櫓の影が見えないのである。

「サア大變だ、後の櫓が見えないぞッ、荷物が分乘してあるから、若し此儘で長時間に亘ると双方とも飢死だ」と叫ぶ。

慙ふ騒いで居るうちに、髭は凍り初める。寒暖計は零下二十五度を示し凍々と肌に通る寒威は、五體を凍結して終ひさうである。此時隊

長は、流石多年北方の寒境を探検した経験家だけに、一同が來し方を眺めて立騒いで居る際に素早く三四本の竹杖を雪上に立て、之にカンバスを張り、應急の防寒準備を繕らへ、一同を其中に招いて。

「何うだ、慙ふすれば少しは凌げるだらう」と云ふ。這入つて見ると、ナル程多少は暖かい。隊長の此新案法のお蔭で、一同は幸に凍死の憂目を免かれることが出来た。

暖まつたのはよいが黙つて待受けて居るのも能てないと、呼笛を取出して吹かうとすると、笛が凍つて居るので、口に凍着して、ともすると唇邊に凍傷を受け、全く始末が悪い。氣は揉める、寒さは肌を襲ふ、加るに著るしく空腹を感じて來る。全く八寒地獄と餓鬼道とへ一所に陥つたやうな境遇、流石の花守アイヌも鼻面を皺めて泣出しさうに爲つて居る。

さて待てどもく一向後隊の姿が見えぬ、一同聲を揃へて「オーイッく」と呼ぶのであるが、口を開けると氷の如き寒氣が口中

人も犬も悄然

方向に迷ふ

南 極 記

へ流込んで、咽喉の奥までも知覚を失ひさうに寒い。併し寸秒も油断の出来ぬ大切な場合であるから更に大聲打揃へて。
『オーイッ〜』と叫んだ。斯くて氣を揉むと約三十分間に亘つたが一向應答がない。脚元を見ると靴犬共は吹雪の中に全身を埋め寒さの爲めに嗅覚が鈍つて居るので身動きもせず各々悄然と蹲まつて居る。人も犬も心細さに於ては同一である。さても後隊の櫓は何處の雪中に踏迷うて居るのであらう？
一方後隊の櫓の消息を述べると例の午後五時頃の不意に襲來した猛烈なる大吹雪の際先頭犬は吹雪の寒さの爲めに嗅覚の鈍つた處へ、前隊の櫓跡を重い雪で消されて終つたので、突然方向に迷うて歩を停めた。
山邊アイヌは驚いて三井所部長を呼び、『前隊の櫓跡が消えて大變だツと叫んだ。三井所部長は直ちに櫓を飛下り、毛布をスボリと羽織り、鏡眼を外して、右方十間許り半圓形に探索を試み非常の苦心の末漸

氷骨上一條の痕跡

徐ろに天候の回復を待つ外なし

上 陸 本 隊 の 探 検

くとある氷骨の上に一條の痕跡を留めあるを發見したので、同時に其方向に向つて大聲を揚げ。
『オーイッ〜』と呼んで見た。然るに何の返辭もない。答ふるものは刃の如き寒風の猛雪と戦つて荒ぶる音ばかり。
サア心配になつて來た。若し前隊と接續が出来ぬと大變である。此隊にはコンパスがない、又た天幕の脚もない、只だ糧食と石油とは此方に持つて居るが、それでは何れにしても双方とも大困難である。そこで、三井所部長は、心算かに。
『いよ〜櫓跡が不明となれば徐ろに現場に露營し、一日でも二日でも天候の恢復を待つの外はない』とまで決心したのである。
併し之は神祐とても云ふべきものか三井所部長の心頭に、チラリと一點の光明が閃めいた。神の導きとても云ふべきものであらう。早速部長は歩み出した。足の向くまゝに歩み出した。櫓も部長の先頭に信頼して走り出した。

氷上に印せる凍傷
の血痕

前方幽かに暗影

南

極

記

すると果して、前隊の鞭犬が印した凍傷の血痕やら、糞尿などの痕跡が處々に見える。之には三井所部長は大に意を強ふし、道先案内となつて糧隊を導いた。斯くて三十分間も進んで行くと前方幽かに暗影の一行を認めたので、部長は山邊アイヌと相見て微笑覺えず、萬歳を叫んだ。

そして走りながら。

「オーイッ／＼」と連呼した。

一方前隊の方では、待てど暮せど後隊の姿が見えぬ。隊長も武田部長も殆ど絶望の極に達して、評定區々の處へ、何處からとも知らず幽かに遠方から。

「オーイッ／＼」といふ聲!!。

「ソリヤ来たッ、オーイッ／＼」と、此方は一齊に聲を揃へて答へた。併し生憎の逆風なので、後隊へは其聲が達しないやうだから、立上り伸上つて狂氣の如く打叫んだ。

狂氣の如く絶叫す

漸く再會するを得

上陸本隊の探検

すると程なく一點の黑影が視界に現はれ来り、次第に近づいて来る。双方からは互に呼び交し／＼、漸くこゝに再會することが出来た。あゝ此時の嬉しさ！筆にも言葉にも盡せない。唯だ讀む人の想像に任するの外はない。

兩隊無事に相合すると間もなく、天候險惡の度は層一層に加はつて来た。そこで露營と決し、隊長の例の新案防寒壁の下へ、天幕を張つた。其時の寒さつたらな、手足の指は殆ど切れむばかりであつた。

さて天幕の張られた處で、一同其中にもぐり入り、人間の方は一先づ安全になつたが、鞭犬の消息如何にと、雪上を見互しても、一匹の姿も見えぬ。試みに雪に向つて呼と、雪中の其處、此處から、黒い鼻先をヒョコリ／＼と現はした。一同も之には驚いたが、犬は斯る極寒の地へ来ては全身を雪中に埋めて頭丈出して眠るものと見える。そこで考へた、兎に角極地の探検用としては犬は最も便利である。犬は人間一人の糧食で、一人半の量を曳くと云ふのだから之を馬匹に比すると、其輕便

雪を入れば天幕より三間の退却

塵氣一ツ無き天地

人間は天幕吹飛は

南極記

同日の談ではない。一行の此突進の成功も全く犬のお蔭であるのだ。天幕を張つたのはよいが吹雪の烈しい時には天幕を持つて往かれる。それから用便に立つ者があると天幕を突上げるので、残る者は天幕無しに我慢をせねばならぬのみならず出て用便をして歸ると雪片を附着して来る、そこで。

「若しも雪を入れたら天幕から三間の退却を命ずる」と云ふ規約が成立つた。その結果用便は天幕内の其場で用達しをする事になつた。すると尾籠な話であるが一人が一方の雪上で、チャークと小便をする、他の一人は其雪に隣つた雪を掬つて湯を沸かすといふ始末、一寸聞くと穢いやうであるが併し塵つ氣一つない天地だから先づは清淨極まるものとして置かねばならぬ。

夜の更くると共に吹雪は益々烈しくなり、疾風物凄くともすると天幕を吹き飛ばすので糧食箱を天幕内に入れ、天幕の頂上から繩をかけて、伴の箱に結び付け、更に各自の身體を其箱に結び付けた。人間も天

し豫防具

一月廿五日(大風雪) 行程八里半

雪粉天幕内を襲ふ

上陸本隊の探検

幕吹飛ばし豫防の道具と化しては中々骨が折れる。

此夜武田部長は、コンバスの修繕をなし、他は翌朝突進の準備を整へて、就寝したのは夜の十二時であつた。攝氏零點下二十二度の寒氣は、毛皮の寝嚢を襲うて寝ても當座は非常に寒冷を覺へたが、やがて暖まつて來ると、漸く凌げるやうになつた。

夜半過ぎ眼を覺すと、針の如き最も微細なる雪粉は天幕を通して幕内に入り、各自の寝嚢の上に白く降り積つて居た。四圍皆雪の銀世界中に、一同は此の如き有様で露營第六夜の夢路を辿つたのである。

此日行程八里半!

翌二十六日午前五時、一同眼覺めたが天候依然として險惡吹雪は益々烈しい。依つて何れも起床を躊躇し、寝嚢から顔だけ出して眺めると天幕を通して入り來つた粉雪は寝嚢を白綸子の夜具の如くにして眞白く、囊内から吐く呼吸は顔の邊りの毛皮に凍結して霜の如く、天幕の裾の一大部は、一尺ばかり雪に埋もれ宛ら雪山のやうである。

飲まず食はずの廿六時間

午前十時、氣壓示度十五度、風は南南西で、吹く毎に肌を刺すやうに感ぜられる。

午後二時、氣壓示度十八度、やがて吹雪は漸く衰へたので、起き出たのが夕刻の五時頃であつた。空を見ると太陽の位置が餘程變つて居る。直ちに食事を喫めたが、何分二十六時間に亘つた大吹雪で、其間飲まず食はずであつたので、一同は腹の減つた事夥しい。丁度繪に書いた餓鬼のやうに貪食した。

やがて、一同出發の仕度に取り掛つたが、天幕の内部に焔爐を焚くと、天幕内面に附着した居た雪が融けて、ポトリ／＼と雫して落ちるには少なからず閉口した。

糧食を調べて見ると、ソ、ロ、ハ、缺乏を告げさうなので、協議の末、茲に『今明兩日間出來得る丈進んだ後、引返さう』と云ふことに決し。其豫定で、天候の恢復を待つて進發したのは、午後九時三十分であつた。途上は相變らず、氷骨壘々として雪中に横はり、橇旅行には頗る困難であ

病大隊後に従ひ來る
一月廿六日(吹雪)
行程五里二十二町

島か山か四個の峰頂

る。

かくて、約三十分許り進行して來た時、これまで最も能く働かし、斑犬前右足に凍傷を受け、悲鳴して打臥し、曳摺られゆく故三井所氏診察の末、列外に離してやると、背後より鳴きながら従いて走つて來たが見る。中に十五六町も後れた。實に感然の至りであつた。

「何れ橇跡を見て、次の露營地へ來着するであらうから」と、其儘見棄て、進行した。此日夜半までの行程五里二十二町である。

翌二十七日午前二時半、一先づ休憩して食事を取つた。食事中果して病犬はびつこ曳き／＼到着した。やがて再び出發したのは午前五時半であつた。今晩二時頃から東方に當つて、島か山か、四箇の峰頭を認め、たので、針路を其方に取つて二時間餘も進んだが、少しの變化もない。距離にして十里餘を進んでも、少しの變化を見ない。全く不得要領に終つた。

そこで、之れは多分、屢氣樓であらうと云ふので、其方向に進むことの

所謂幻岳？

一月廿七日(曇)
行程合計二十三里
十四町

喘ぎく前進

南 極 記

徒勞を悟つて午前八時半、一先づ天幕を張つた。輓犬も今日は餘程疲勞して居るので、日中は休憩することとし。各々寝囊に親んだが、夕刻に至つて、曩きの厩氣樓を見ると、何時の間にか位置を更へて居る。之が所謂幻岳と稱せらるゝものであらう。

前夜午前零時以後の行程十二里十四町。

午後六時半再び出發することになつた。又素との正南針路に轉じて進行したが、輓犬の疲勞益々甚しいので、總員交代で、徒歩するに如かずと、雪上をトボくと進つたが、例の氷骨は相變らず一同を苦めた。此時溫度攝氏零下十二度であつた。

總て進行を續けたが、氷骨壘々として櫛の進行を妨ぐることに甚しく、殊に坂路のこととて、兎もすれば顛倒しさうになる。喘ぎに喘いで、前進を強行した末、櫛の進行を止めたのは、翌二十八日の午前零時三十分であつた。昨二十七日午後六時半より同日夜半までの行程十一里夜半より二十八日午前零時半迄の行程壹里である。

突進の最終點

一月廿八日(曇)
南進行程壹里

西經百五十六度三十七分

南緯八十度五分

上 陸 本 隊 の 探 検

此地點が即ち我が突進隊員一行が到達したる、最終の所である。氣温を驗すると正に攝氏零下十九度半、なか／＼の嚴寒であつた。

晩餐の後隊長は寢に就いたが、三井所部長は尚ほ眠らず毛皮の胴着の縫ひを縫ひつゝ、花守、山邊、兩アイヌに犬の世話などに就き、何吳となく話して居た。斯くて三井所部長並に兩アイヌの寢に就いたのは午前二時である。唯、武田部長のみは夜を徹して觀測に従事して居た。

經度は毎日午前八時に測定する筈であるから、武田部長は、時計の午前八時を報ずると共に觀測を遂げた結果、此地點は西經百五十六度三十七分であることを知つた。然し緯度は正午にならなければ分らぬのである。

聽て、一同起床したのは、午前十一時であつた。程なく朝餐の後、時計の正午を指すのを待つて、武田部長は緯度の觀測を遂げた結果、南緯八十度五分なるを知つた。一行は此處まで來つて、此地點を最終點とした。それは此隊の主たる目的なる學理上の觀察を略ぼ爲し得たと考

へたからである。是に於て先づ天幕の傍に穴を堀り携へ來れる芳名簿を入れし銅製の箱を埋め。其傍に一間許りの竹竿を樹て其上に豫て用意の大國旗を翻へし、更らに之に隣つて赤ペンキを塗つたる三角形ブリキ製の回轉旗を樹て、其等の旗の下に突進隊員全部整列した。此時、白瀬隊長は國旗の下に嚴かに一般同情者諸士に感謝する旨の式辭を述べ、謹んで陛下の萬歳を三唱し奉つた。一同は之に和して續いて萬歳を三唱したが、それが終ると、隊長は此露營地を中心として、目の届く限り、渺茫際なき大雪原に「大和雪原」と命名した。時正に午後零時二十分であつた。

其間三井所部長は、此莊嚴なる光景の撮影を爲した。

小憩の御此記念すべき最終點を出發したのは午後二時三十分であつた。途すがら櫓の上から幾度となく記念の最終點を振り向いて見ると、漠々たる此雪原の中央に樹てられたる國旗は、翻翻として極風に翻へり、其眞紅の色は皚々たる千古不滅の氷雪に映發して壯觀無比であつた。

つた。嗚呼大和雪原よ!!!。今より以後千歳萬歳地球の存續せん限り、永遠に我が國の領土として榮えよ。今は無人の陸として知らるゝ此の南極の大陸も、幾千歳の後には必らずや、人烟揚り車馬來往するの街衢と化せん。希くは光榮あれよと、感慨は誠に無量であつた。

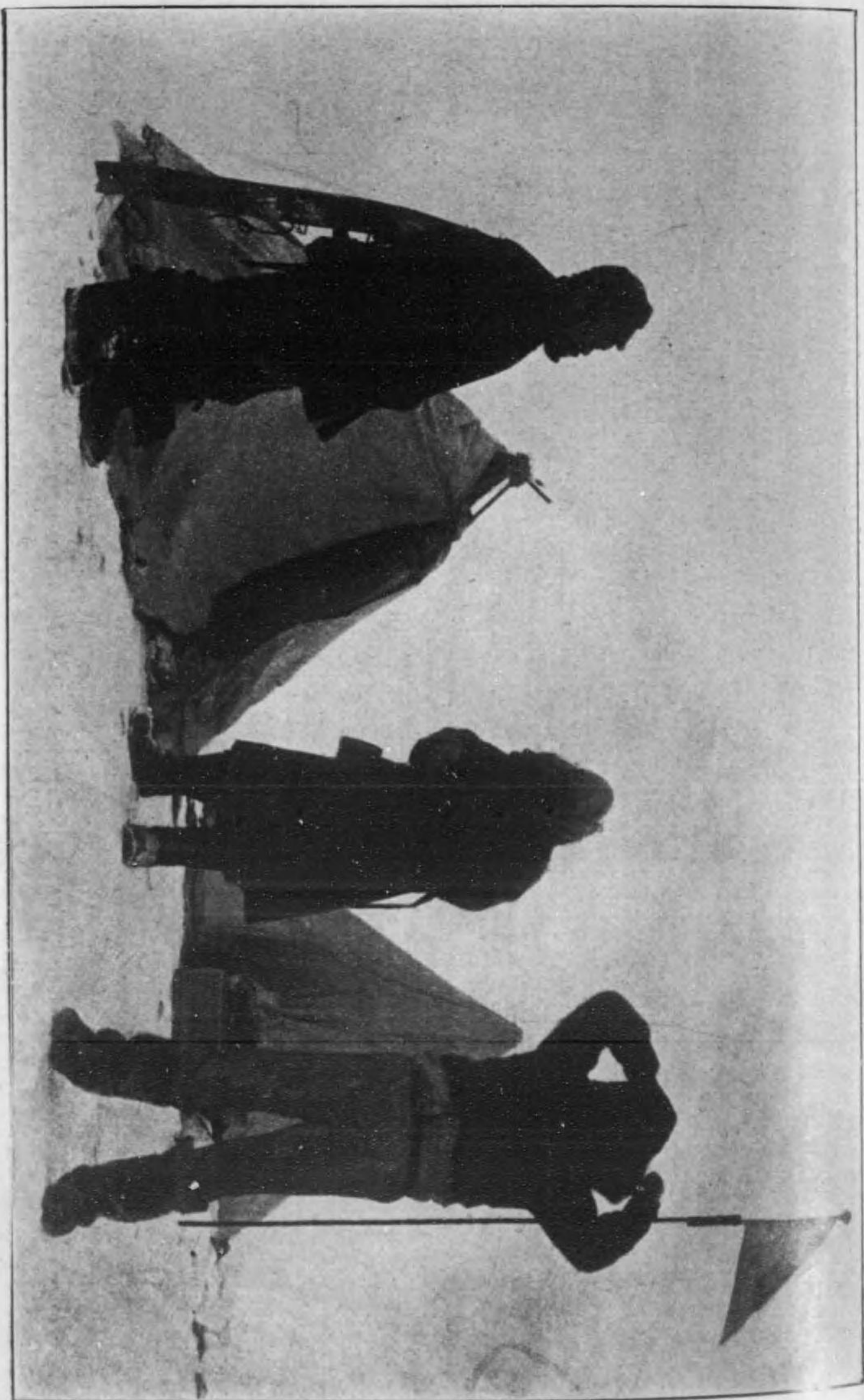
さて、前方の櫓には隊長と武田部長とが搭乗し、花守アイヌ馭者となつて、犬を急ぎ立て歸途に就いたが、進む時に骨の折れたる反對に、歸途は一般の地勢が傾斜して下り坂と爲つてゐるので、犬の歩が非常に早く、午後五時三十分頃には既に前夜の露營地に到達して居た。三井所部長は後方の櫓に乗り、山邊アイヌ馭者となり前隊を追うて歸路を急いで居たが、絶えず背後を振り向つて見ると、懐しき國旗の影は、懸て雪か空か、白雲漠々たる地平線下に没して終つた。最早眼に見ゆる物は雪の野原のみ、耳に聽ゆるものは風の音のみ。悄然として歸路を急いだ。斯くて、午後七時二十分後、勝ちの後隊は前夜の露營地に休憩中の先隊と合したが、今日は是非共次の露營地まで強行を繼續しようと思つた。

一月廿八日(參)
歸程貳拾里七町

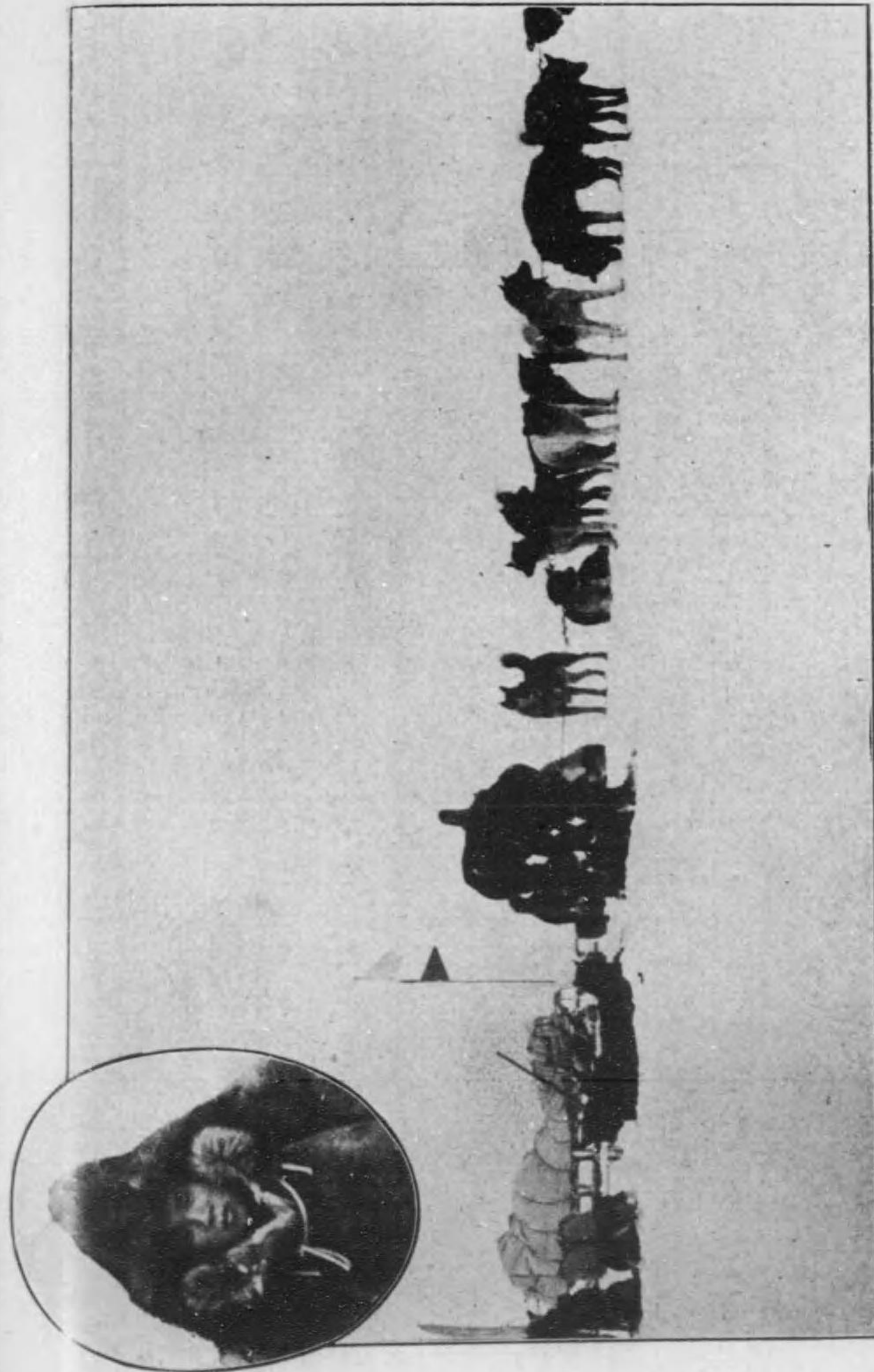
南 極 記

ふのて、間もなく兩橇共進行を始めた。所が雪霧が烈しく程なく之れが吹雪となつて襲來せんず微候を呈したので橇は眞一文字に一生懸命!! 烟の如く吹き送る粉雪を突いて進行した。全速力の結果夜半十二時には貳拾里七町を進んだので天幕を張つて其處に休泊した。翌くれば二十九日である。午前九時一同起床同十一時三十分出發した。徐行の後更らに午後二時三十分から大強行で進んだが第一番に疲れたのは犬である。一度休憩して更に出發と云ふ時になると先頭の犬を始めとして全群容易に立上らない。依て一同掛聲勇ましく、彼等を勵ましたが、中々立上らない。是に於て出發時間は大に延引したが、其後犬の機嫌も少しく回復し、イザ出發と云ふ時になると、四方俄かに暗憺として、密雲低く垂れ、西方より風に伴ふて雪片が頻々と襲ふて來た。其雪を衝いて此邊特有の下り気味なる平原を進行し、午後零時五十分第五露營地を後に見て、小時間進行の後、一ト先づ休憩することゝした。

明治四十五年一月二十八日撮影



探檢本隊の最終出發準備



昭和四十五年一月十八日撮影

糧食を犬に割愛す

道先案内者

上 陸 本 隊 の 探 検

茲に氣の毒なのは、靉犬の糧食缺乏である。犬奉行たる花守山邊兩アイヌは何よりも是を心配し、流石犬奉行だけに密かに自分の糧食たるビスケットを割愛し、彼等が食料の不足を補ふたのであるが、情は却つて仇となり、之れが爲め靉犬は頻りに下痢を催ふした。然し後靉は前靉の犬の下痢の爲めに案外道標目を得たので、此點から言へば都合であり又滑稽であつたと言はねばならぬ。

程なく又前進を繼續し、午後六時十分再び休憩、飯をビスケットに凌ぎつゝ二十分の後進行を始めたが、午後八時より前隊の靉犬は非常に疲労した。そこで山邊花守兩アイヌは糧を下りて前方に進み隊長と三井所部長とは靉の馭者となり、武田部長は折々兩人の交代を勤めつゝ進んだが、其進行中靉犬の吐瀉が甚しいので、一頭又一頭と次第に病犬を列外に離し、糧の後から従はしめねばならなかつた。所が病犬共は後には血を吐き始めたので、其血痕が班々として雪上に印し、誠に憫然に堪へなかつた。午後十時三十分に至り案内者たる花守アイヌも

一月廿九日(曇)
歸程二十四里十一
丁

南極探検

怪鳥と思ひしは放

疲勞したと見えて一語も發せず櫓に腰を掛けた儘如何に勵ましても動かなくなつた。三井所衛生部長は、此體を見るより直に焜爐を櫓から下して、雪上で湯を沸し、それを花守其他に與へ暫らく休憩と決したのは午後十一時三十分であつた。此日の行程、十四里十一丁である。晚餐の後出發したのは翌三十日午前零時三十分である。途中何事もなく割合に早く進行したが露營したのは同四時三十分であつた。斯くて、午後四時迄休憩したが聽て疲勞も幾分休まつたので、正五時露營地を出發した。花守アイヌと三井所部長とは道先案内者である。交代に之を勤めて進行すると午後十時頃に至り右方約二三十間の所に當り霧を通して鷹の如きもの二三を認めた。其物は右方左方に飛んで居るので、一同は倍こそ何者か現はれたり!!! 未だ嘗て人間界に知られざる、怪鳥にてもあらば早速に捕へ呉れんと現場へ馳けつけ見るに、こは如何に、それは新聞紙の風に舞ふて居るのであつた。最初突進隊の一行が途中で棄てし新聞紙は、如何なる風の吹き廻しか飛び來つ

棄されし新聞紙

上陸本隊の探検

灣内より漏るゝ異様の音響

て此處に舞つて居たのである。之はくとはばかり尙も進行を續けて一時間程往くと前面の少し左方に當り一個の氷堤を發見した。そこで一同考ふるに、最早根據地迄一里内外の地點には相違ないが、左りとて外洋に面する氷堤としては、少しく早きに失する感がある。けれども高原性の氷原を滑りつゝ歸つたのだから道は案外に進捗つたには違いない。今は濃霧だから充分の判別も着かぬが、兎も角研究して見やうと、天幕を立て小憩の後氷堤の上に立つて眺むるに、鯨灣の内灣か外灣かは知れないが、兎も角一つの灣があつて、其灣内から物棲き音が聞へて居る。寂々寥々たる此天地も其物棲き音の爲めに寂莫を破られつゝある。耳を傾けて之を聽けば幾多の鯨群が潮を吹揚ぐる音なのだ!!! 萬里人影を絶する、此南極大陸に來つて然も幾分道を失したる危懼心に捕はれつゝ、白濛々たる濃霧の中にあつて、此異様な音響を聽く一行は、唯々悽慘と壯大との感に打たれて居たが、兎も角氷堤に沿ふて進まうと、西方に向ひ約十四町程も進んで見た。所が、少しも得

霧の爲めに雲か對岸か不明

南極地誌

る所がない。霧の幾分晴れた場所より見るに、外灣としては、餘りに波が静かである。内灣としては少しも對岸が見えない。勿論遠距離は霧の爲めに雲か對岸か判然せぬのであるが、兎に角此地點は一行の記憶になき地點たるは疑ひなき所である。一同は大に失望して居ると武田部長は聲を高めて「僕が今少し西方へ往つて見届けて来るから待つて居玉へ」と云つて、ズン／＼西方の方へ進んで往つた。此時又も濃霧が襲來して、五六間先きも見えない程となつたので、根據地の研究は武田部長一人に任せて置き、隊長と三井所氏は、一先づ此處に天幕を張り霧の晴るゝを待つ事とした。そこで前に天幕を建て置きし場所に花守を遣り、山邊アイヌと犬群とを此方へ連れ来るやう命じたが、出發後相當の時間を経ても歸り來らぬので、其方面に向ひ花守「イ!!!」と呼んだが中々やつて來ない。只遠方の霧の中に犬の聲が微に聴へるのみである。そこで、又も絶叫を續けて居たが、すると二十分ばかりの後に漸く到着した。雙方は大に喜んで天幕の前で握手した。此後暫くを

困難なりし濃霧中の搜索
一月三十日(曇)
歸程二十一里十丁

上陸本隊の探検

經ると地獄の底からでも呼んで居るやうな最も微かな呼聲が傳はつて來た。何かと思つて能く聴くと、これは武田部長が濃霧に包まれた一行の所在を發見せん爲めに呼んだ聲なる事が知れた。そこで、オ、イ／＼と答へると、先方でもオ、イ／＼と呼ぶ。漸々其聲が接近すると、竟に霧の中から臙氣なから部長の姿が見えるやうに爲つた。「ヤア／＼大變／＼」と言ひつゝ、天幕に入來りし武田部長の姿を見れば、全身は全然汗に濡れ、頭からは盛に湯氣が立つて居る。其話も途切れ／＼と呼吸が急しい。濃霧中の搜索が如何に困難であつたかは、之に因つても推察せられる。所が結果は依然として居る根據地の所在は少しも判らない。そこで、其儘露營と決したのは翌三十日午前二時十分である。斯て何時晴べしとも見えなかつた濃霧は午前四時頃に至つて、名残なく晴れた。悦んで天幕外に出て見ると、嬉しや前方に氷堤が現はれて居る。是に於て一行が露營した地點は疑ひもなく、鯨灣口に於ける一地點である事が知れた。それと同時に眸を凝すと遙

遙かの方に根據地
を發見す

生涯忘れ得ざる喜
悦

に西方に一個の黒點が見える。望遠鏡を取出して、之を眺めるに、何うも己等が根據地に建てし小屋らしいのである。是に於て武田三井所の兩人は花守アイヌを先導として、急ぎ其方向へ探究に往つた所果して然り!!! 果して然り!!! 己等が前夜來尋ねに尋ねた小屋なのである。萬歳!!! 萬歳!!! と聲を揚げつゝ、三井所氏は歸つて此事を隊長に報告すると、今や眼病に悩まされて居た隊長も喜び勇んでニコニコ顔山邊アイヌをして直に天幕の取片附を爲さしめ、ヘコタレたれども歸途を急ぐ。鞭犬に鞭を加へて、其方向に向つて鞭を馳せた。隊長と山邊は前楯に、三井所氏は後楯に乗りつゝ、進んで往くと、臆て午前五時五十分根據地の前へ來た。留守を預り居たる村松書記は、之を認めて迎へて呉れた。吉野隊員も雪下駄を穿きつゝ、槍槍走り出て、迎へて呉れた。噫、此時の喜び!!! 生涯忘るゝを得ざる喜びであつたとは、一同の語る所である。

鞭犬に馳走

撮影した。歡喜の情に充ちて、手を携へて躍らんばかりである。けれども、此時まで忘れて居た事がある。それは何ぞと云へば犬の事である。今までは嗜しい餘りに話のみして、夢中に爲つて居たが、此旅行で非常に骨折つた鞭犬の事は全然忘れて居た。そこで山邊花守に命じて残存せる二十六頭の鞭犬に馳走さす事とした。幸に残し置きたる鯨があつたので、それを與へる事とした。所が犬も久しぶりの御馳走に尾を振り、鼻をクンクン言はせて喜んで居た。

所て、人間の方は何うかと云ふと、村松吉野の兩人が何呉れとなく世話を焼いて呉れ、温情實に掬するばかりである。先づ一行の爲めに温い柔かな雑炊を煮て呉れた。其美味さは又特別である。八百膳植半の料理も物かはである。

久しく此様な物に有りつかなかつた一同は腹も張り裂けんばかり詰込んだが、借其後は如何と云へば、睡くなつた事である。晝夜の別なく雪や氷と奮戦すること十二晝夜であつた一同は、今や食事を終ると

夢現て箸を執る

一月三十一日(濃霧) 歸程三里三十丁

根據地殘留部員の生活

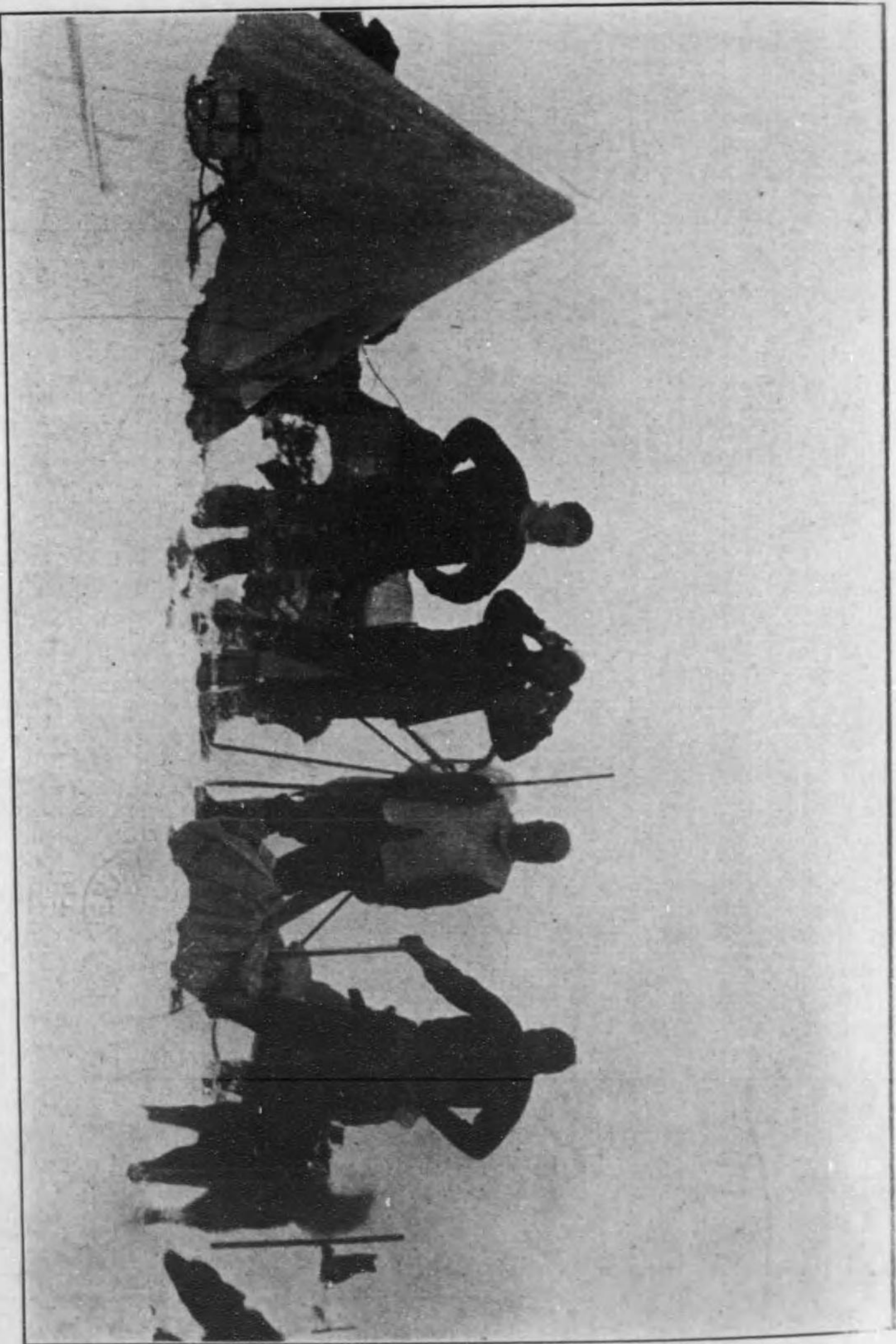
南 極 記

共に其疲勞が一時に發し「何れ話は後刻として少しく睡らして呉れ給へ」として小屋内へ横になつた。吉野、村松の兩人は寢囊の世話までして呉れる。隊長を始め一同グツスリと寝込んで終つた。其後折々食事の時に起されて夢現て箸を執り、食つては寝ね、寝ねては食ひ、又起されては箸を執ると云ふ風に、何時迄寝られるか寝飽くまで寝續けやうと、遂に五人は一日半の睡眠を繼續した。然し未だ一行の疲勞は止まなかつた。五人の睡眠中、吉野、村松、兩隊員は相變らず、八時間交代で觀測を勤めて居る。然して交代で非番になつた方が湯を沸かしたり、食事の仕度などもするのである。

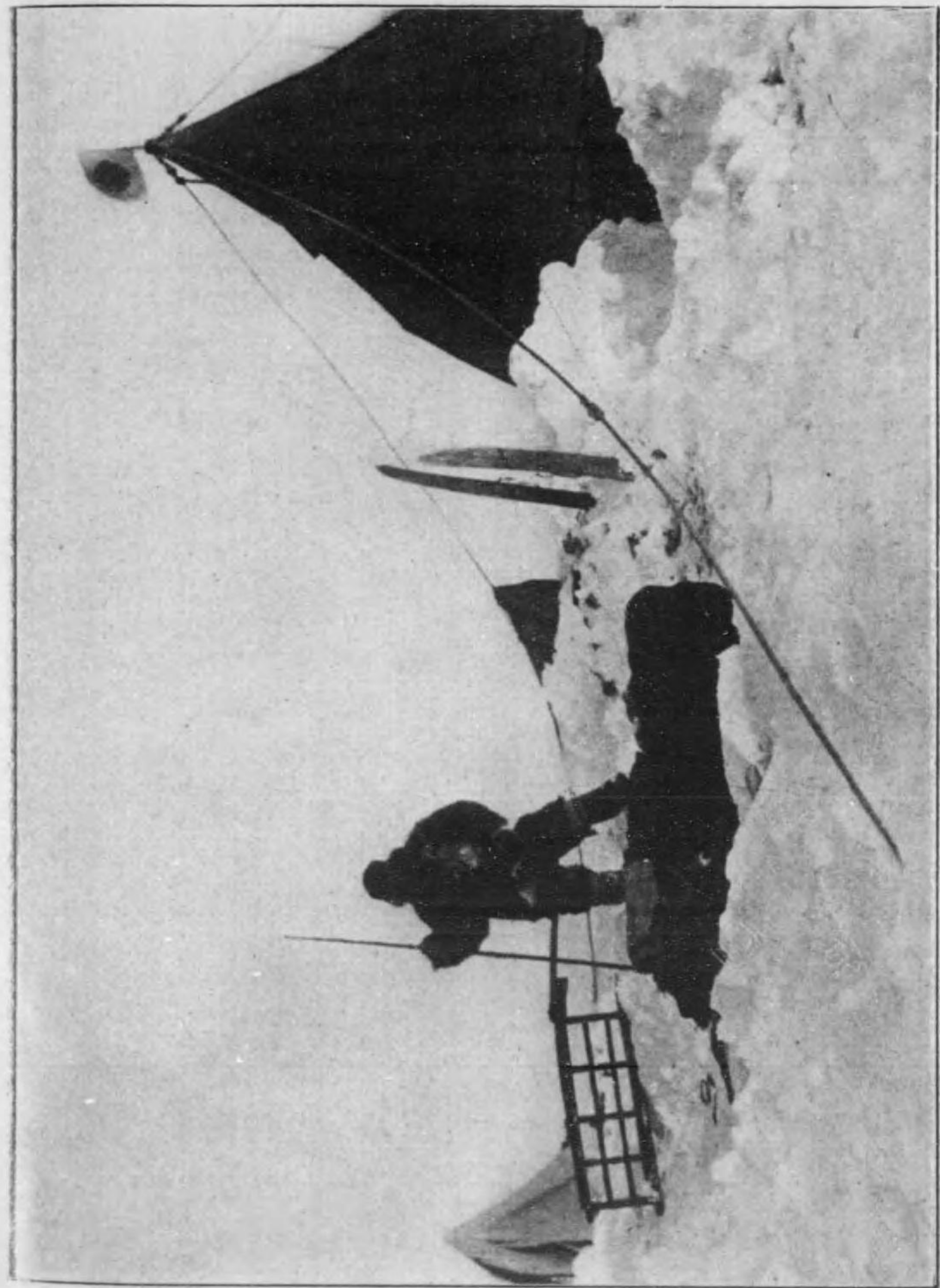
突進隊員が根據地へ歸來して、グツスリと寝て居る隙を利用して、少しく爰に根據地に留まり居たる、測量部員の生活を述べて見やう。

曩に一行の出發したる日、即ち一月二十日の午後、村松、吉野の二測量部員は無限の感慨に打たれつゝ、寂とした天幕内に休憩して居たが、吉野隊員は尙ほ眼が悪く、今日は特に甚しいので、凍つた眼薬を解かして

明治四十五年一月三十一日撮影



花守犬掛白瀬隊長の根拠地掛武田衛部長



明治四十五年二月三日撮影

形ばかりの中食

開南丸は如何

フラム號は如何

上陸本隊の探検

點眼の後、寢囊に這入つて寢て終つた。後に残つたのは、村松隊員のみである。獨り鐘詰を温め、ビスケットを噛みつき、兎も角形ばかりの中食を済まし。それから氣象觀測用の箱を建てる事に取掛つた。高さが七尺もあるので、土臺は是非共埋めなくてはならぬ。そこで、スコップを以て雪堀を始めた。傍らを見れば、之も取殘されたる犬一頭、自分の體温の爲めに少しく窪みし雪の中に、頻りに負傷したる足を嘗めて、悄然として居る。

村松隊員は柱を建て、桁を入れて、釘を打つ段と爲つたが、其釘が見附からない。百方搜したが、見つからない。多分運搬の際、氷堤上に置かれたに相違ないと、其方に足を運んだ所、其序に何となく開南丸の消息が知りたくなつた。同船は最早出帆したに相違ないと、思つて居たが、そう思つても、若しやと考へるのは人情である。て、眸を凝らしめて眺めた所、それらしい物は少しも見えない。多分昨夕か今朝頃、目的地に向けて出帆したのに相違ない。フラム號は如何と見渡すに、同船

雪鳥の空中に鳴く
を聞く

鐘詰箱の釘應用頓
智

も居ないやうである。灣内の野氷が風の爲めに殆んど流れ去つたので、多分奥の方へ這入つて碇泊したのであらう。此時凝と海面を見て居ると、所々に水柱が立つて、それから懐しい響きが聴える。何てあるかと注視すると、驚くべし之は幾十となき鯨群が彼方にも此方にも居て、波を蹴立て、其背より潮を吐いて居るのであつた。鯨灣の名は誠に偶然でない事が知られる。此時又空中で雪鳥の鳴く聲を聴いた。其聲は丁度蟬の兒の鳴くやうな聲で、それが斷續しては聴えるのみである。斯る閑寂な地で、斯る異禽の聲を聴くと、寂さは益々増して来る。其時又も釘の事を思ひ出した。そこで心當りの場所を捜した所、又少しも見當らない、非常に困つて居たが、フト薪として用ゐると毀した鐘詰の箱の事に心附き、根據地に歸つて其釘を抜き始めた。すると漸く釘も出来、氣象觀測の箱も建てられた。箱の内には最低寒暖計、普通寒暖計が置かれ、屋根にはロビンソン風力計が据ゑられた。

豫定は今日一日を餘すのみ

斯くて此日は臥床に入つた。翌日は一月廿一日である。午前七時頃、村松吉野の兩人は、一齊に眼を覺した。前夜の爐火は早や消え果て、火鉢は元のブリキ罐となり、其寒さは一方でない。殊に吐く息は眞白く、液體は直ぐ凍ると云ふ風であるから、兩人の五體以外の物に熱氣のあらう筈がない。觸るゝ所皆氷で、其冷さは格別である。二人の會話は「何うも寒いね」から始まつて、話は動もすると、突進隊一行の噂となる。豫定は今日一日で、天幕内外の整頓を済さうと云ふのであるから、早く火を燃き炭を起し、朝飯を終り、八時半より防寒の仕度に身を固め、兩人各々分擔の作業に就いた。金城鐵壁と頼む天幕も時々吹く風に、パタリ／＼と叩かれるので、南極特有の猛烈なる朝風が何時お見舞に來るも知れずと、先づ天幕の支柱とも云ふべき十八本の小綱を引締め、それから周囲五尺高の所に標目旗の棒を結合させた。それより天幕一パイの竹の輪を作つて、内側より取付け、緩みのなき迄張合せて、要所要所に同じく竹の筋違ひを入れ、頗る丈夫に出来上らせた。

勿論地下は一樣に、四尺程の深さに掘下げてあるが、これて天幕内は先づ五坪ばかりの住居となつたのである。入口から左手に寢室書齋、食堂勝手兼帯の室と云ふ順序にそれ／＼整頓する事と爲つた。其三方は胸高に蓆の圍を作つた。仕切の方は菰を吊して出入口となせる外竹骨に麻布を張つて戸の代用とした。寢床の上は、六尺の高さへ麻布を用ゐて吊天井を造つた。先づ和洋折衷最新式の建築と謂ふべきである。

奥の一坪餘の所には、何人が運び來りけん幸にも一枚の藁蒲團が轉がつて居たので、其中の藁を取り出して、地上に蒔き散した。其上に筵二枚を敷いて寢囊二個を並べて見ると立派な床が出來上つた。尙傍らに衣類箱二個を並べて見ると、それで新式輕便の卓子も出來上つた。これて寢室及書齋の體裁は先づ備はつたと謂ふべきだ。入口の一坪には鐘詰、ビスケット、炭、米袋、味噌、其他の雜品を積み重ね、中央には例のブリキ箱の火鉢が置いてある。これにて兩人が畢生の

霰の天幕に當りて
碎くる音

フラム號何時しか
姿を消す

一月二十一日(曇
後雪)

智慧を絞り、有らん限りの材料を利用して造り上げた苦心の氷上小屋は、出來上つた譯である。

此日は朝から曇であつたが午後四時頃より降雪霏々として襲ひ來り。聽て八時に至つて霰となつた。それが天幕に當つて碎くる音は、芭蕉葉に雨の訪ふよりも、凄ごく轉々極地風物の荒涼たるに驚いたが、聽て程なく雪も晴れて、日現はれ、續いて南風吹起り、稍々好天氣の徴を示した。去れど之も瞬間又々一天暗黒の雲に鎖され、風は颯々として吹起つた。灣内に見えたフラム號も、此雲に恐れをなしてか、何時の間

にやら沖に出動して、程なく姿を消したのである。此空模様は聽て雪を降らしたので、天幕外の物品取込は明日の事となし、二人は一切の作業を中止して、晚餐を喫し、例の火鉢を取圍んで雑談に耽つた。昨日送り出した突進隊の安否などを氣遣ひながら、愉快に寢囊に潜り込んだのは午後十時である。前日の作業で大體の取片付を終つたので、

雪野の旭光鮮やかに
なり

一月廿二日(晴後
曇)

南極探検の日記

愈々本職の氣象觀測を始めた。其觀測の條項は、天候氣溫風位風力晴曇等であるが、之は二時間毎に測量することに極め、兩隊員は八時間交代とし、先づ午前八時より午後四時までの當直は村松隊員より始めることにした。今日は月曜日であるから、天幕内に据ゑある、日記寒暖計同湿度計晴雨計等の用紙を受換へ、又經緯儀の螺旋巻をなした。
白皚々たる雪野には、旭光鮮やかに風も収まり、四邊寂寥として南極としては甚だ閑かなる天候である。昨日の南風に灣内一面の野氷も大部分は流失し盡し、フラム號の橋は氷堤近く見えた。午後に至り雪曇りの氣味を呈し、北西の和風は西に轉じ更に又南東に轉じ程なく又北方に轉じた。
其翌二十三日午前四時より濃霧深く、全く咫尺を辨せざるに至り、氣温は氷點下十度に下降し、天幕の張綱は杉の葉の如き垂氷一面に附着したが、午前八時より霧晴れ凍れる雲も漸く動き始むると共に薄き日光も時々漏れ射した。露營以來時間の早きことは實に驚くばかりで、

一月廿三日(曇後
晴)

タウヅクカモメ天
幕を見舞ふ

上陸本隊の探検

八時間の當直も八時間の休憩も空々裡に去來する如く感ずる。遠く世塵を離れたる深山幽谷の仙者も斯くやと思はるゝ程である。晴天なれば、沿岸探検を行はんものと豫期せしも、晴雨計の徵候面白からざるに躊躇し居るうち、果して午後二時より雪模様となり、雪片霏々として降り、やがて吹雪にも變化せんずる状態を呈した。兩員は今雪中行軍中なる突進隊の勞苦も左こそと推しつゝ、當直交代の時間を利用して各々睡眠に就いて居た。
二十四日は前日と同じく曇つて居て、氣温も氷點下十度より十一度に上下して居た。然るに午前十時頃より晴天となり、空に一點の雲もなく晴れ渡つた。元來今は永日の時期なれば、交代に喫する食事も常に晝餐の如き心地がせられ兎もすれば晝夜の界を忘れて時日を誤まらうとすることが屢々である。此日の暮方に至り南極鷹が珍らしくも此天幕を見舞ふて來た。村松隊員は手早く村田銃を持出し、實弾一發美事射止めたが、南極に始終住み慣れた黒鷹も、今日の寒氣の爲めに

一月廿四日(曇後晴)

零下二十三度

記 極 南

腹部の毛は硬く氷結して居た。突進隊出發の際負傷の爲め留守居を仰付けた黒犬は此時まで天幕外に繫てあつたが、今日は如何にも寒さうなもので此日から天幕内に同居せしむることゝした。犬を天幕に入れてから、食事時間後は吉野隊員の睡眠中であるので、相手なきまゝ、村松隊員はコト／＼と時を刻む時計の音の高さを聴くつ出帆の際有志者から贈られた雑書を繕いて居たが不思議や此時天幕の外に微かに人の話聲らしいのを聞いた。此無人の極地に人聲のするは、不思議の事よと四邊を見廻し、尙も耳を澄して居ると、又もや人の話聲!!さては、フラム號の船員でも無聊の餘り、來訪したのであらうと天幕の外に出やうとすると、何のことだ馬鹿々々しい。先程の黒犬が炭俵の側で頻りに咽喉を鳴して居たのであつた。村松隊員は獨り苦笑したが、一時は飛出して見やうとまで思つたのである。二十五日午前二時氣温は零下二十三度に達し、猛烈なる寒氣である。吉野隊員は此の日沿岸視察に出掛けて往つたが、程なく天幕に歸り來

大吹雪の防禦に忙殺さる

一月廿五日(晴後吹雪)

檢 探 の 隊 本 陸 上

たつた。午後六時晴雨計七百四十九示度に下り湿度計百以上に昇つて居る。猛烈なる北風吹雪を催し、天地は暗晦凄愴なる光景を呈したが、此際北方に入口を設けある此天幕は少なからず風雪の襲撃を受けた。是に於て種々防禦の策を講じたが、此日は中々の大雪で降雪は天幕外に小山を築き、天幕内も隙間よりの粉雪の爲めに白色と化した。果ては寢室迄も雪中に埋もれんとしたので、二人は大騒ぎで活動した。外套を擴げるやら、風呂敷を張るやら漸くにして事無きを得た。聽て防禦法も終へて觀測の爲めに出やうとすると、人口外の積雪は堆く行路を妨げて居る。スコップを以て掻き退け、漸くにして幕外に出た。幕外に出て見れば、吹く風も餘り強くは感じないが天幕は廣原に於ける唯一の障害物なので、盛んに吹付けられるのである。此日一日は吹雪に鎖されたが、二十六日朝になると一天カラリと晴れ渡り、稀なる好晴である。けれども寒冷なる南風は肌を刺し、氣温は氷點下十六度以下つて居る。フト海岸を見るに、昨日迄は灣口一體に青波より外眼に

夜の無き世界

一月廿六日(好晴)

南極探検記

入らなかつたが今朝は小島の如き氷山が二三個屹然として沖に流れて居る。多分昨日の大荒れの爲めに海岸の氷が壊れて流れ出てたのであらう。

今日は二十四時間一片の雲だに起らない。太陽は常に嚇々として輝いて居る。観測には此上もない天気である。先づ大體の目測では今日此頃の太陽は正午より午後二時に北方四十五度許を昇り、それから西を過ぎて南に至り、午前一時より同二時の間は最も低く凡十五度許り下り、又東に向つて環状運動をなすので恰も此天幕の十二通りの縫目を二十四時間に一週する都合である。必竟縫目の間一間の巾を二時間を費して運動する譯なのだから、此天體時計さへ見て居れば夜の無い此南方の世界(但し冬は殆ど夜ばかり)に居ても、午前午後を間違ふやうな事はないのである。

翌二十七日は天候依然として快晴である。豫てより宿望の灣内探検を試みると、兩人打連れて天幕を出た。各自の肩には散弾を装填した

遠雷の如きは氷堤
脱落の音響

アムンドセン一行
の遺せし足跡が

上陸本隊の探検

銃が懸つて居る。先海に沿ふて西南方に歩みを進んだ。旭日は青空に懸つて満目の風光皆白く、時々何處かの氷堤の脱落する音であらう、遠雷の如く懐く響いて来る。又強き南風が常に雪野を荒れ狂ふものと見え種々な模様は雪上に印してある。恰も洪水に押流されし砂地を水の去つた後眺むるやうな感がある。二人は過日一行の登攀したる地點を眺めつゝ三哩程も進みしに臙氣ながら橈の跡板カンジキの跡、犬の足跡等が己等の進路を横切りて海岸よりS字形に走るを見た。孰れアムンドセン大佐一行の何者か遺した跡に相違ない。二人は己等の天幕を見返り、總て日章旗を視圖外に遺して、灣内へ突出する氷堤上へと出た。灣内の氷堤は龜裂が多いので、其縁に迄は進めないが、目測に依ると高さは確かに百五十尺以上である。對岸一體の氷堤は之よりも餘程低く、北より南に走つて居り、兩岸の距離は漸く五哩位のものである。今や灣内の野氷流失し盡して碧波動き、兩人の立てる直ぐ左方の灣口から十哩を隔て、其正面に立つ氷堤の東端は低く

南 極 記

陥没して海水も餘程深く侵入して居る。灣内水面の形は丁度長靴のやうに見える。

數日前吉野隊員は此氷堤まで來り、沿岸を視察して歸りしが其際長靴形の灣の踵に當れる地點に、一大氷山の存在せし事を語つて居た。然るに今來つて之を見れば既に跡方も無く消え失せて居る。思ふに變化多き南極氷海の事として、沖に向つて流れ出てたのに相違ない。

試に雙眼鏡を取つて眺むると、其氷山ありしと云へる地點の後方に空高く黒き物が見える。或は是れ諾威探検隊の旗にてはなきや、二人の好奇心は大に動いた。若し然りとすれば是非共之を視察せんければならぬと、足は直に之に向つた。往々氷上を注視するに五寸乃至一尺位の龜裂は幾條となく前程を遮り、然も雪が之を掩ふて居るのて危険言ふばかりなしである。携ふる所の竹杖を以て安全なるや否やを確かめつゝ進む光景は宛然按摩の橋渡りである。注視するに此龜裂の大動脈とも云ふべきものは大なる環圓を爲して、東方より來り而

上 陸 本 隊 の 探 検

して南西に奔るものゝ如くである。其衝路に當つた雪は異様に隆起し又は缺落ちて裂目を生じて居る。兩人は此動脈の中心に向つて進むのだから其危険は言ふばかりもないが、進むに隨つて雪野は次第に高まり漸く安全の地點へ出た。斯くて氷堤を右に沿ひて曲り、灣口を正面に見た地點まで往くと、今まで見えざりしフラム號は遙か沖より灣内に向つて進行して來る。是れ必竟風も和いだので灣内で氷山に衝突する惧れもないから入來つて碇泊するものに相違なしと考へた。斯くて又前進を續けて居ると、一度見失つた彼の黒き物は確に翻々たる旗である事が知れた。それと同時に後方に更に一個の黒い物のある事も知れた。是に於て兩人は愈々アムンドセン一行の露營地なるに相違なしと、勇を鼓して突進すると、懸て、諾威の國旗が立ち天幕の建てられてある地點まで着いた。其天幕は樺色の襪せたキャラコ地の如き麻布製の天幕で、中央に柱一本を立て、細き多數の控綱を以て龜甲形に張られてある。入口は矢張り北向きて袋式に造られ、頗る携帶に

便なものである。我が根據地を距ると七哩なる此地點に同一研究に從事する人間が住んで居ると思へば誠に心強い感がある。

英語を以て「今日はく」とやるが、誰も出て来ない。能く／＼注視するに何うも一人も居ないらしい。多分海岸へても用があつて住つたに相違ない。此様子で見ると、之は諾威隊の根據地ではない。只見張所位に過ぎぬものだ。此處より見るに海は靴の踵と見し處を頂點として更に三角形の如く東西に擴がり、今日も尙ほ氷解けずして一望漠々只氷堤の聳ゆるを見て海かと思ふ位である。尙ほ思ふに、此氷の解けずして東に入込みし地點は或は前見し龜裂と連絡し、今兩人の立てる地點の如きは日ならずして漸次缺けて流出し、灣内は頭なき瓢の形を爲さずやと推察せられた。

斯くて尙ほ此地點にあつて眺望を撞まにして居ると、三十分ばかりの後此灣内に向つて諾威探検船は突進して来た。それと共に、此海の東岸に沿ふて来る人のあるのを見た。是に於て此天幕は陸上隊と船

との連絡を取る爲めの物である事が推察せられた。待つ間程なく一個の壯漢が現はれた。ジャケットを以て身を固め頭には防寒頭巾を冠り雪眼鏡を懸けた探検家らしい男である。諾威式の六尺もあらうと云ふ細長き板カンジキにて雪上を滑走しつゝ、目前に現はれた。知らぬ外國の人ながら斯る無人の境に於て面會するは、雙方共無限の感あり、熱情籠れる握手を交換して後彼は船中に於て白瀬隊長の肖像を見たりし事など喜ばしげに語り、尙ほ昨年冬營中には寒暖計非常に降り、犬も爲めに凍死して甚しき危険に陥りたりし事、己れは他の一人と共に目下此天幕の留守居を爲し居るが、先日來二個月に八百哩を踏破して此地に歸り來りし事及此カンジキを以てすれば、一日に四十哩乃至五十哩の旅行は爲し得べき事など語つた。村松吉野の二人は尙ほも語り續けんとしたが、折しも附近に來るフラム號と信號交換の用事ありとの事に、再會を期して立別れた。歸路に雪とも思はるゝ程白き雪鳥及海燕等を獵り緩慢なる波のウネリの如き高低ある雪野を辿り

層雲棚曳く水平線

南極

無事我が根據地へと歸つて來た。
 翌二十八日は引續いて晴天で、氣温も十度乃至十一度を示し見渡す空は拭ふが如く、唯北西水平線とも思ふ邊り墨を流したる如き低き層雲の棚曳くのが見ゆるのみである。
 其黒雲の東方面の氷堤は以前より一行に危険を豫測せしめた脆きものであつたが今朝見れば最早諸所脱落して、新らしき斷壁が一層目立つて見えた。午後四時から暗雲空を蔽ふて雪催ひとなり、氣温八度許り上昇したが、これも暫時にして濃霧となり、やがて又晴れた。
 二十九日午前八時、自記器械の用紙取換をした時、其示す所に依ると前週最低温度は二十五日午前二時の氷點下二十三度である。湿度は二十五日の午後六時より二十六日の午前十時の間に涉る百以上又同氣壓は二十七日の正子の七五八籽を最低として居る。風位は重に南風にて二十五日の一六九六〇を最強風力とする。先づ概して平穩の天候である。さて今日は朝から曇天で氣温高く風無く、午前十時頃よ

宛然一條の瀑布を遠望するの觀あり

一月廿九日(曇)

上陸本隊の探検

り濃霧を生じた。間もなく晴れて北方に卷雲が現れたが、其雲より洩る日光が海を照す爲め、海上一面金色を呈し、驚くばかりの近距離に見えた。尙又水平線には、南極特有の暗黒なる卷層雲長く棚曳きて、其頂きと思ふ所は、矢張光線を受けて白く見える。言はゞ一條の瀑布を遠望すると云ふ状態であつたが、それが程なく消えると、今度は白鉛色の雪曇となつた。極地天候の變化は實に此の如くである。此日午前四時頃寒暖計は氷點下三度まで昇つた。
 翌三十日氣温は依然として温かく、根據地に留守役の身に取つては何よりの幸福である。然し何分にも變化激しき極地の空とて、或は此反動は慘憺たる荒れの天候を生ずるにあらざると危ぶましむる。突進隊も出發以來大分に時を要したが、目度目的を達して歸つて呉れば善いかと、兩人は祈つて居る。午前十時頃より空は一様に灰色を帯びた雲に蔽はれ、午後に入り寒暖計が稍や下ると濃々たる霧、此白大陸を包み、四顧暗憺、風力計も一時停止した。翌三十一日氣温は氷點下

風力計停止、四顧

暗闇たり
一月三十日(曇)

南 極 記

十度を示し空は相變らず薄暗く風は珍らしく東南方より吹き來り、天幕の旭旗を弄んで居る。午前四時の交代時刻に觀測所より天幕内に入り來つた村松隊員は頻りに味噌汁の料理中、天幕外に人の來つた氣色がした。近來黒(犬の名)も餘程快い方で頻りに天幕内に入し得るのである。最初は犬であらうと思つて居たが雪を踏む音が犬よりも高く勇ましいので、何うも今度は人らしい、それにしても吉野隊員の足音にしては早過ぎると思つたので試みに「吉野君!!!」と云つて天幕の外を見ると、彼方からまだ容易に歸るまいと思つた花守アイヌが黒い顔の真中に兩眼を光らかして「ホー!」とアイヌ流の挨拶をしてやつて來た。全く夢では無いかと思つたが、そうでもない。

すると其處へ吉野隊員も飛んで來た、二人揃つて花守を捉へ一行の消息如何にと聽いて居ると程なく、黒ジャケットの武田部長が兩手にコンバスを抱へた儘雪を踏鳴らかして急ぎ駆け來た。白瀬隊長三井所衛生部長も喜ばしげに楡に乗つてやつて來た。かくて突進隊

突進隊員の歸着

一月三十一日(霧)

上 陸 本 隊 の 探 検

犬群吹雪中に熟睡

の五人と殘留隊の二人とは、茲に十有二日目に無事根據地に於て顔を合はする事と爲つた。其悦びは到底筆紙の盡すべき所でない。

午後より北風烈しく、一天擾曇り程なく吹雪と變じて來た。突進隊一行は長き疲勞に二三談話の後、忽ち夢路の人と爲つた。

二月一日、隊長以下突進隊一同の高き躰の間に村松吉野兩隊員は相變らず交代に觀測をなし、又小屋内の世話に従事した。午後六時頃より雪片霏々として降り、南風吹荒むと共に、猛烈なる吹雪となり、凄愴なる光景を呈した。然し風位が悪くないので、天幕内は左程にない、只出入口を雪で鎖された丈であるが、天幕の外は非常なる光景である。二列に繋かれたる犬群は、雪中に深く身を没し、體を縮めて吹雪の中に熟睡して居る。其狀は白銀世界の黒一點、僅に毛の一部分を外に現はして居るのみである。餘程の疲勞と見えて、打つも蹴ると平氣にて殆ど死せるが如き深き睡眠に耽つて居る。僅に一頭の頭を擡げしを見れば、頭より背部に至るまで宛然銀の鎧を着けたやうである。

今後の方略に就き
協議す

コールマン島に向
ふに決す
二月一日(吹雪)

南 極 記

寒國の犬でなければ斯の如き寒氣に堪え得ないであらうと感心した。午後八時頃より空幾分晴れ、雲間より太陽を見ると同時に、日暈が現はれた。吹雪は尙ほ時々來つたが、風位が西に轉ずると同時にハタと止んだ。此日の晚餐は隊長初め、總員七名、久方振りにて食卓を圍んだ。此夜一同は今後の行動に就いて協議した結果、先づ天候の定まると共に第二根據地を去つて、アムンドセン大佐の根據地を訪問し、鯨灣沿岸の探検等を試むる事となつた。又一方には我開南丸の着船も、今數日の内と見て、それ迄には是非共全部設計し、然る後能ふ丈迅速に乗船を了し、豫定の如く、コールマン島に向はんと決した。

曇れる空も漸く二日午前八時頃より晴れ渡り、天候全く恢復したらしいので、天候甚しく變らぬ内にと、第二露營地より三哩許り先きに殘留せる突進隊の荷物の收容の爲めに、櫓二臺を仕立てた。其同勢は四人である。前櫓には武田部長と花守アイヌと乗りて、十三頭の犬に曳かせ、後櫓には村松吉野兩人乗り、犬十五頭をして曳かせ、午後三時二十

「トウ」の懸聲

上 陸 本 隊 の 探 検

五分に出發した。方向は武田氏の示す所に随つて、南少東に取り、「トウ」トウ「カイ」の懸聲勇ましく馳せて往く。所が前櫓の犬は後櫓のよりも強しと見えて、稍々ともすれば距離を生ずる。村松吉野兩人は憤激に堪へず、頻に勵まし責き立つれど、犬には格別の効もない。

此時二羽の南極鷹あり、後方より飛び來つて後櫓の上を過ぎたが、犬群は之を見て追往かんと、思ひしか疾風の如くに駆け出した。櫓上の二人は振落されんばかりである。けれども頗る得意である。根據地の留守居のみした、勞も今一時に償はれたやうな顔して乗つて往く。

前程は只茫々たる雪野である。けれども處々に高低もある。恰も海上の濤畔の如き状の高低がある。犬は此間を馳せて往く。一時間ばかりの後、砂丘に似たる雪の吹き寄せを右方三哩ばかりの地點に見た。又同方面の地平線上に氷堤の聳え立つのを見た。此氷堤は鯨灣と連続し居る物に違いない。

根據地向ふ嬉さに犬群疾風の如く走る

侮り難き犬の速力

微かに汽笛を聞く

南極探検

犬は頻りに突進する。總て午後八時三十分首尾能く十七哩の道を走つて荷物の残留しある地點に着いた。或は屢々此邊の氷野を掠むる吹雪の爲めに埋没せらるゝ事なきやと心配したが荷物は何等の異變なく立て置きし赤旗さへ依然として翻つて居た。けれども外面は總て厚い氷に纏はれて居た。

荷物は全部で十二個である。之を二臺の橇に載せて走るに其重量は總計四十貫來りし時よりも重量多きに係らず犬は根據地向ふ嬉さに疾風の如くに駆け出した。總て寒氣は氷點下十五度に下降し雪を捲く雄風颯々として吹起りしに拘はらず犬は驀直に馳せて午後十一時五十分根據地へは歸還した。行程は往返三十四哩一時間の速力四哩餘である。鞍犬の速力は實に侮るべからざるものである。

吉野、村松等の不在中、氣象の觀測は三井所部長其任に當つた。すると微かに汽笛の音を聴いたので、若しや開南丸が目的を達し、エドワード七世州の方から歸着したのではあるまいかと、山邊アイヌを連れて視察

二月三日(曇後晴)

天幕入口の風雪防禦工事

開南丸見ゆ

上陸本隊の探検

に往つたか、何うも其姿は見えなかつた。若しや氷堤の蔭に碇泊して居るのではないかと眺めたが、船らしい影は更に視界に入らぬ。併し尙ほ一哩許り奥に進んだが結局要領を得ずして引返した。途中犬の鳴聲を聞き、其方を見ると今しも荷物收容の橇隊は、將に根據地に達せんとする時であつた。

此時太陽は漸く南西の空に低く懸り、氣温も大に下降した。其夜は開南丸の姿は見えず、汽笛のみ聞へると云ふ事が話題となり。今は一刻も早く乗船せんと思ふ故今日の汽笛も我母船にてあれかしと心々に祈らぬは無かつた。

翌三日午前二時半より南々東の吹雪盛んに來襲した。天幕入口は風雪防禦工事の爲めに吉野隊員と三井所部長と力を併せ、必死と爲つて働いた。やがてそれも一時にて收まり、午前七時には一天曇りながら雪を見なかつた。朝食の最中花守アイヌは慌たゞしく天幕に入來り「船が見えた開南丸らしい!!!」との御注進である。倍は昨日の汽笛も

小春日和
根據地引揚の準備
二月三日(吹雪)

空耳ではなかつたかと、早々双眼鏡を取り出して見た。遙か沖や空なる彼方に南風に船旗を軽く翻へし、海上に浮んだる姿は疑もなく懐しき我開南丸で恰も氷堤より十哩許りの沖合に浮んで居る。そこで兎に角海陸相互の連絡を附けるに如かずと、一同は氷堤に赴いた。然し風波荒き爲めか、船は一向灣内に入來らず見渡すと船は非常に傾斜動揺して居る様子、何分相互の距離が遠いので、定規信號もならず、唯徒らに外套を振るやら、二三の發砲をして相圖をするやら思ひ思ひの信號を試みた。所が船では汽笛一聲微かに此方に應えた斯くて氷堤上に待つ事一時間に及んだが容易に船の入來る様子もないので一ト先づ根據地に歸る事にした。途中雪鳥南極鷹を狩り、二三羽の戦利品を獲つゝ天幕に歸つたのは、午前十一時であつた。折しも、空晴れ渡り風止み、小春日和とも云ふべき日光と氣温となつたので濡れ物を乾すやら、其他各自部署を定めて根據地引揚の準備を整へた。午後十一時頃船は氷堤に沿いつゝ灣内に突入した。そ

乗船地點の偵察

荷物運搬の機幾度か氷上を往復す

引揚の終了
海上一面の濃霧

こて四日午前一時武田部長、村松隊員、山邊、花守兩アイヌの四人は、權に乗り船とも連絡を取り、乗船地點の搜索に従事した。權隊が乗船箇所の仕度を終へた結果、何分にも一刻も早く乗船せなければならぬ寧ろ瞬時を争ふ此地の状態であるから迅速に乗移らねばならぬと一同荷造りに着手した。全く火事場騒ぎである。斯くて準備を終ると共に、權は幾度か氷上を往還しつゝある隙に、或は荷物を運ぶ者寫眞を撮る者など各々必死となつて活動した。又船の方よりは土屋運轉士の外渡邊、柴田、西川の三船員を應援隊として上陸助勢せしめたので爰に上下相和し、荷物運搬の道付けを終つた。斯くて午前六時二十分に入船を初め八時三十分を以て全部の收容を終つた。引揚を了すると共に一面の濃霧海上に立籠め咫尺迷濛たる光景と爲つたのである。

エドワード七世洲
に向ふ
一月十九日(晴)帆走
直航距離六海里
一月二十日(晴)帆
走直航距離三十四
海里
一月二十一日(吹
雪)汽走帆走直航
距離三十七海里
一月二十二日(雪
後晴)帆走汽走直
航距離二十二海里

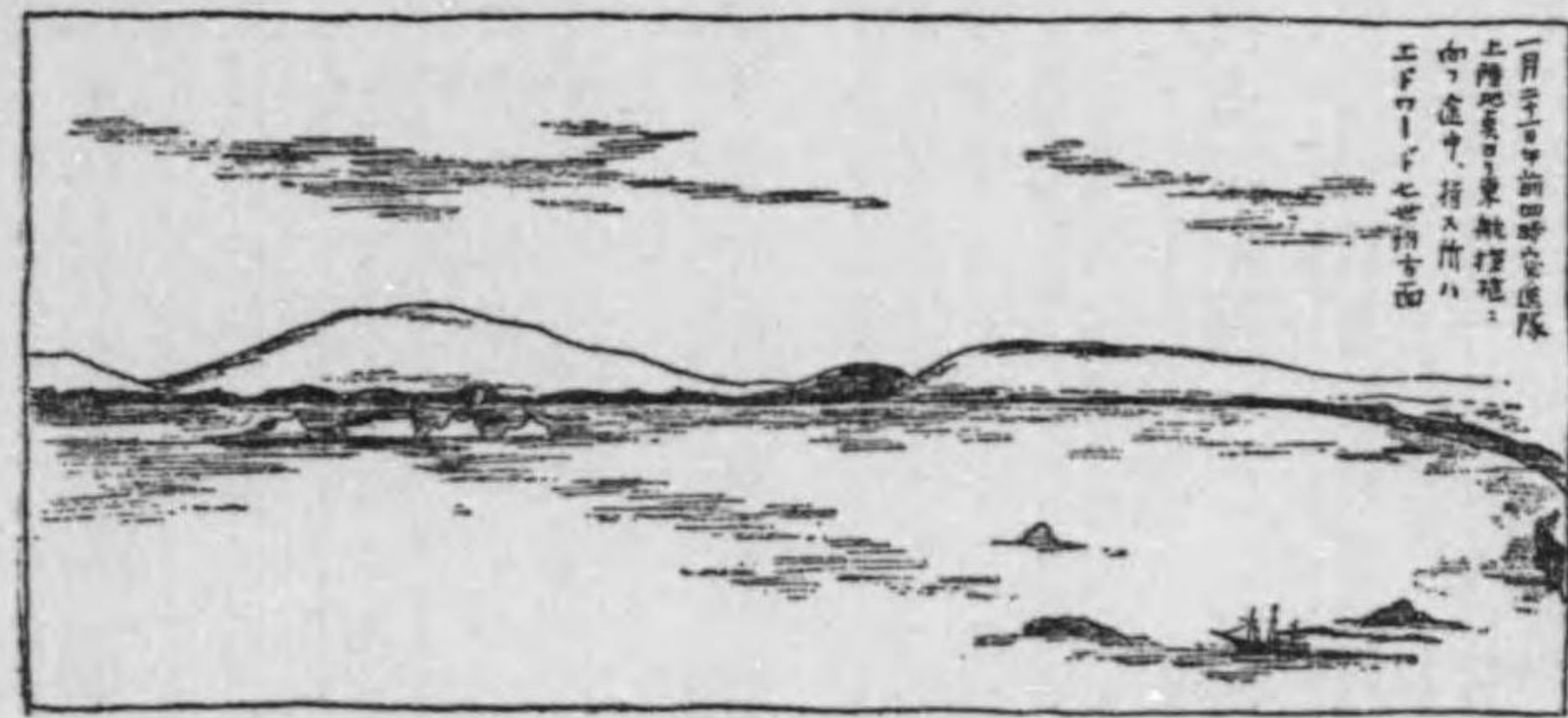
エドワード七世洲の探検

第四章 エドワード七世洲の探検

一月十九日陸上隊員七名を鯨灣上の根據地に殘して、午後五時三十分開南丸はキング、エドワード七世洲に向げ出帆した。氷堤を右舷一哩半乃至三哩の距離に見つゝ進行したが、天氣が靜穩なので、海上は何事もないのである。其翌廿日も、廿一日も頗る靜穩な天候なので、安全なる航海を續けて往く。然るに午後八時頃に至り、猛烈なる吹雪の來襲を受けた。甲板は見る／＼中に積雪に埋められた。此雪は翌二十日の曉に至つて、稍々稀薄となつた。午前四時より汽帆兩走とした。同七時半頃に至つて、前日來の天候の爲め、少しく吹流されて居た航路から船首を轉じて舊針路に復した。

明れば、一月二十三日である。午前七時、目的地たる、エドワード七世洲の陸岸を遙に望見した。此時右舷の方を眺めると、長さ二十哩幅三

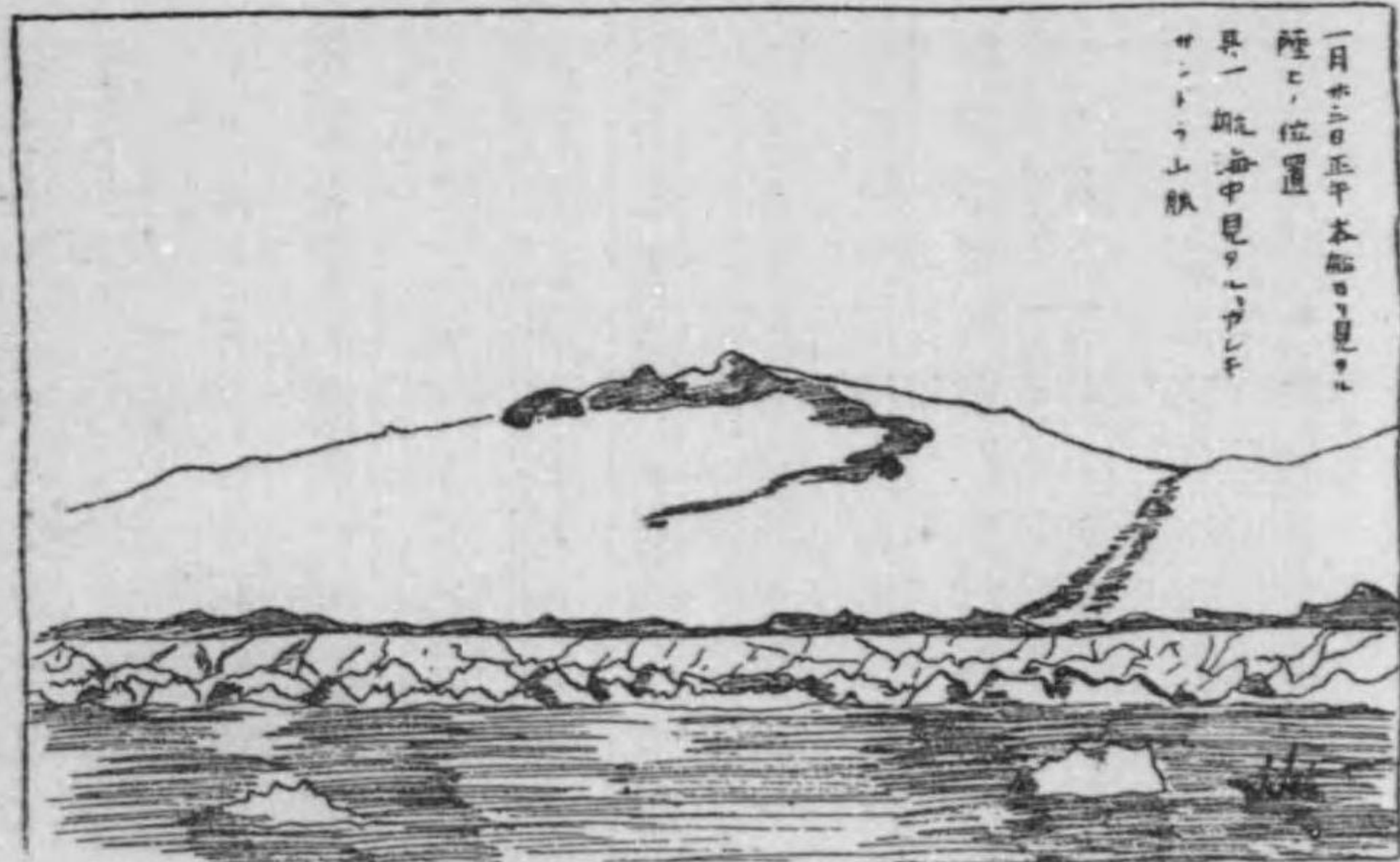
南極探検記



一月二十日、本隊は陸岸一帯の尖氷を探検し、南緯七十六度五十六分、西経百五十五度五十分なるピスコイ灣の野氷上に碇を卸した。前面にはアレキサンドラ山脈が神々しく聳へて居る。萬古の氷界史を語らんとするもの、如く聳へて居る。打見たる所此山の根基は一ツであるが其峯は三ツに分れて居る。根基の一ツであることは例へば富士山と寶永山との關係のやうなものだが特に中央の峯が大きく其西方の峯は之に次ぎ中央の峯の東方に聳ゆる物は又之に次ぐ。以上

埋に亘り、陸岸一帯鋭く尖つた氷が林を爲して生じて居るのを見た。遠方から之を望めば宛然百方の白衣兵が呼吸を凝らして潜んで居るやうに思はれる。船は此處を過ぎて、注意深く沿岸に近づき、午後四時、南緯七十六度五十六分、西経百五十五度五十分なるピスコイ灣の野氷上に碇を卸した。前面にはアレキサンドラ山脈が神々しく聳へて居る。萬古の氷界史を語らんとするもの、如く聳へて居る。打見たる所此山の根基は一ツであるが其峯は三ツに分れて居る。根基の一ツであることは例へば富士山と寶永山との關係のやうなものだが特に中央の峯が大きく其西方の峯は之に次ぎ中央の峯の東方に聳ゆる物は又之に次ぐ。以上

エドワード七世の探検



一月二十日、本隊は山腹の黒點を探検し、南緯七十六度五十六分、西経百五十五度五十分なるピスコイ灣の野氷上に碇を卸した。前面にはアレキサンドラ山脈が神々しく聳へて居る。萬古の氷界史を語らんとするもの、如く聳へて居る。打見たる所此山の根基は一ツであるが其峯は三ツに分れて居る。根基の一ツであることは例へば富士山と寶永山との關係のやうなものだが特に中央の峯が大きく其西方の峯は之に次ぎ中央の峯の東方に聳ゆる物は又之に次ぐ。以上

三個の峯の山腹八合目邊には何の峯にも黒いものが見える。之は山皮の露出に相違ない。其中最も西端にある峯は、船の位置に最も近いので、其黒點を研究するがため、隊員船員の中より多數の者を上陸せしむる事と爲つた。其隊は二個に分れ、一隊は土屋運轉士之を率ゐ、島渡邊鬼太郎、多田柴田の四人が従ふことゝなつた。他の一隊は西川渡邊近三郎、兩隊員及田泉寫真技師の三人を以て組織することゝなつた。先づ二隊共開南丸の繫留しある前面の大野氷を通過して氷堤に上らねばならぬが、此氷堤に上るには、眞直に南に向つて往くのと、西方

を迂回して行くのとの二方面がある。土屋島等の一行は真直に南を指して往く事と爲つた。長い間待ちに待つた沿岸支隊の任務を果すは此時にあるので勢ひ籠つた眼に前方を見るに、此處の野氷は船の繫留地より氷堤まで、南北に互りて幅二哩半ばかりもあり、長さは氷堤と相並んで、東方及西方共氷堤の屈折する處まで續いて居るが、此野氷の中央に高さ二百尺長さ五十間位の氷山が三個程も屹然として青空に聳へて居る。水晶の如き其英姿を仰ぎつゝ進んで往くと約二十町ばかりにして、長き水溜に遭つた。此水溜は幅二十間位長さ二哩位で、東西に亘つて長いものであつたが、河の如く其處に横はつて居るので、越ゆる事が出来ず、少しく東方を迂回して氷堤の下に達した。が、悲しい哉、此處の氷堤は絶壁の如く險しい。其高さは二百尺もあつて、到底登ることが出来ないので、止むを得ず歸路に就いた。歸途試に前の水溜に到り、其水を掬つて嘗めて見た所幾分鹽氣はあるが餘り辛いものではなかつた。

他の一隊たる、西川渡邊の一行は如何と云ふに、手槍を曳きつゝ、田泉技師と共に、西南を指して氷堤に向つて往つたが、往くこと二哩許りて、フト大きな鳥の足跡らしいものを發見した。大に勇み、如何なるものが此地に住むか、若し前世の巨動物にても住まば、最も面白しなど語り合ひつゝ、其跡を辿つて往くと、懸て東西南南の三方高さ氷壁に圍まれ、北の一方のみ開き居る地點に達した。試に其中を窺ふに、驚くべし。此處には、美しき大きなペンギン鳥が居た。頸に黄色の輪を掛け、其丈け四尺五寸程もある美しき帝王ペンギン鳥が居た。然も其の數は一羽ならず二羽ならず、六羽程も居たので、三人は大に喜んだ。今や毛の替る時期だから、北だけ開いて居る此暖かい場所へ来て温まつて居るものであらうと想像しつゝ、三人は之に近寄り往くに、人間の顔を見し事なき彼等は、友達にても來りしものと思ひてか、少しも驚ひた風もない。て試に一ツ、拳骨をち見舞申して見た處、愚物の彼等は、人間の殿つたものとは少しも思はず、隣りのペンギン鳥がつゝいたものと

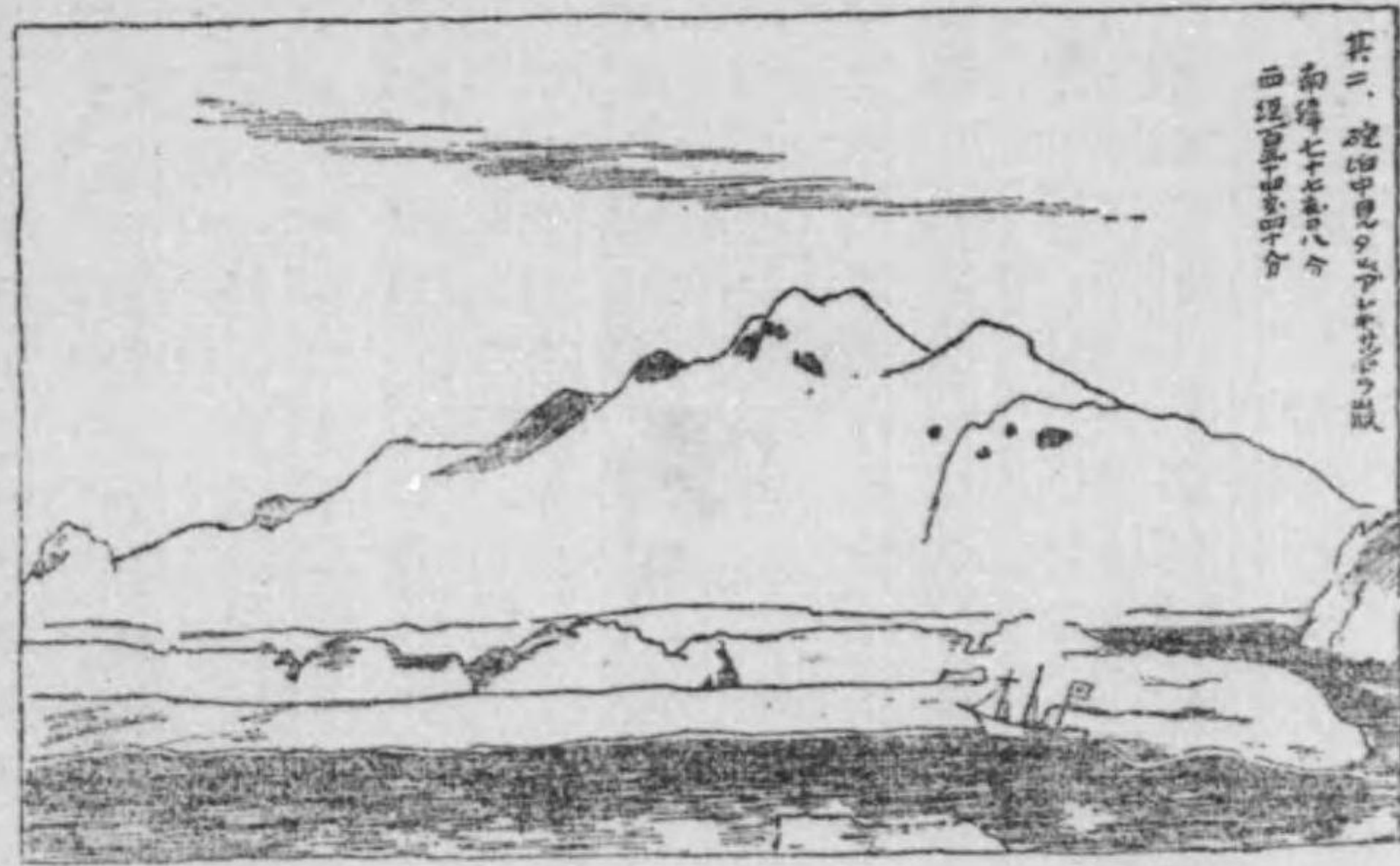
天工の偉大
氷河に遺ふ

南 極 記

心得て其細長い嘴を以て直ぐ隣なるペンギン鳥をついた。すると隣に居たペンギン鳥は又其隣のペンギン鳥をついたので、到头最終の六羽目まで悉くつかれて終つたのである。三人は大笑して倦之を何しやうかと相談した。此儘置けば他へ逃げて行く惧もない故今は捕へずに措き、歸途挽犬の代りに櫓を曳かせて歸らうなど戯れつゝ此地點を去つた。斯くて尙も進んで往くと其處に大氷堤が聳へて居る。高さは約二百尺。偉觀實に形容の辭なき程である。仰視して、晴天々天工の偉大なるを感嘆し、通路もがたと索ひるに、この氷堤に約三十度位傾斜し居る點がある。其處には無論水は少しも流れて居ないが、極地氷河の實質を備へた氷河がある。底部に滑かな氷の凹凸があつて、明確に氷河たるを證明して居る。其兩岸には又大なる氷柱が垂れて居る。光彩實に眼を奪ふばかりである。此氷河を左方に見つゝ、傾斜せる氷堤を攀ぶること、一時間許りにして、漸く氷堤上に達した。すると、此處には前方一面肉眼の達し得る限り幾多の龜裂が縦横

龜裂縦横に横はる

エドワード七世の探検



其二、渡川邊の氷河の氷堤を攀ぶる時、西川渡邊の氷河

に走つて居た。其状態を譬ふれば龜甲の劈痕とも云ふべく、龜裂なる文字が最も適當して居た。て此龜裂の幅は何程ぞと云ふに一尺より三尺、四尺五尺に及び中には三間五間の幅の物もある。試に縁に接して覗くに幾十百尺とも知れざる深さで、青い物懐い光を發して輝いて居る。一度之に陥れば永劫浮む瀬の無いのは判りきつて居る。龜裂の研究には此上ない場所であるが去りとて危険は之より甚だしいものがないので、田泉技師は前進を躊躇した。西川渡邊兩隊員も此儘前進するは不可能と考へた。然し

手槍を棄つ

腰と腰とを繋ぐ一
條の繩

南 極 記

ながら此處まで来て、目的を達せず歸るは遺憾だから、此地點て三人合議の上、田泉技師は此處から歸り、西川渡邊兩隊員は荷と爲るべき手槍を棄て、一旦氷堤を下りて後、更に進路を索める事とした。其携帯品は、ピスケット二食分牛肉一罐、ミルク一罐で、それに鑽石用の金槌一挺、寫眞機一臺、木標一本、防寒衣二着である。

一旦氷堤を下りし、兩人の左方には高さ百五十尺位の氷堤が聳えて居る。其氷堤は頗る急峻で、殆ど七十度の角度を爲して、斬然として居るから、之を登るのは容易な業でない。けれども、勇氣凛々たる兩人、何條之等の困難に屈すべき、連絡を失はぬやう、雙方の腰を一條の繩を以て繋ぎつゝ、鐵カンジキ固く踏締めて、エツサとばかり登り始めた。足元如何にと眺むれば、直徑五寸四方もあらんと思はるゝ、幾多圓形の氷が魚鱗の如く重なり合つて、堤側に生じて居る。それを踏めば、カランカランと異様の音して、恰も音楽を奏する如く、碎け散るが、兩人は斯る音をも聽いては居られず、尖端を有する杖と鐵カンジキとを唯一の伴

神秘の寶庫を藏するアレキサンドラ山脈

疲るれば雪原上に
仰臥

エドワード七世の探検

侶として一心不亂、專念一意、機を繰る如く、縦横に傳ひ。二時間の後、漸く氷堤上に達した。

辛ふじて攀ち登つた兩人は、甚しく疲勞を覺えたので、一ト先づ堤上に腰を据え、十分ばかり休憩した。見れば前面にはアレキサンドラ山脈が、巖然として聳へて居る。千古未だ曾て此方面より人類の登りし事なき、此山は何萬年の間、待ちたりしか、人待顔に巖然として聳えて居るので、可し!!我等日東男子、此方面より先登して、神秘の寶庫を人間界に開き、呉れんと、二人は、キツト見渡した。極地とは言ひながら、太陽は煌々として照りつけ、それが雪に反射して來るので、中々に暑い、兩人は背部に荷物を負ひつゝ、汗を流して進んで往つたが、其進路には處々に寛かなる窪地のある、爪先登りの氷原が、白く横つて居る。て疲るれば雪上に大の字形に仰臥して休憩しつゝ、只管進行を續けたが、二十三日の夜半十二時になると、天候が俄に一變して、非常の寒氣を加へて來た。暫らくすると、それが大なる吹雪と爲つてやつて來た。斯る氷原に霏

冥朦一間先も見えず

南

新築ミルクセーキの御馳走

記

極

々として降る雪は、最も征客をして寂寥を覺えしむるものである。人は悄然として進んで往つたが、すると雪は益々烈しくなり、冥朦として一間先も見えぬ程となつた。斯る際に進めば方向を誤り、又は龜裂に陥る恐れもあるの、兩人は進行を中止し、外套を被つて暫らく雪中に蹲居つて居た。すると大に空腹を感じて來たので、大切に携さへ來れるミルク一罐を出し、其場で啜ることゝした。けれども其儘では冷たくて仕方がないので、時に取つての機轉で氷原に深さ一尺ばかりの穴を掘りミルクに雪を混じた罐を上部に置き下へは古綿にアルコールを含ませ、それに火を點じたのを置き暖める事にした。ジハリと暖めた所が火氣の微弱な爲めか、容易に暖らなかつたが、然し丁度ミルクセーキのやうなものが出來上つたので之は大層な御馳走と大に喜んで之を味ふ事とした。約一時間ばかりの後、吹雪も歇み元氣も回復したので、又々前進を續くる事とした。所が前方に見ゆる山峯は進めば進む丈峯も進むかと思はるゝ程遠いのである。容易に達し得な

爪先上り終る

半天より落下する大雪崩

探の州世七ドワドエ

危く一命を拾ふ

かつたが、竟に氷原を進むこと十哩、廿四日午前六時に至つて、辛ふじて爪先上りの地域を終り、急峻に聳る地點の下まで到着したのである。二十三日の午後四時半、開南丸の繫留地を出發してより數ふれば、正に十四時間を費した譯なのだ。急峻に聳ゆる地點の下まで到着せし兩人は、漸くにして、此處まで來り得たので、暫らく休憩すべしとて、氷上に腰を下ろし、少しく雑談に耽つて居たが、此時突然背後の方に當り、非常なる物凄しい音がしたので、思はず之を振り返ると、今しも千丈の白絹を干したる如き大雪崩が猛烈なる勢を以て半天から落下するのである。之はとばかり驚いて、兩人は後方に飛去ると、其途端ドドドド!!!とばかり、天地も張裂けん程の音響を立て、百間ばかりの間大雪崩が落下した。雪煙は爲に朦々として立上る。暫くは前方白き雪煙に鎖れて何物も見ない程であつた。兩人は危く一命を取らるゝ所であつたが、幸にして免れたので、頭上遙に望んで見ると、山の上部には、己等が目指して來た黒色の巖石が露

地獄の道とは斯る
處か

記念の木標と撮影

南 極 記

出して居る。周囲が白いので、それが明白に見られる。今は猶豫すべ
きてないと直に前進を開始したが、非常に急峻の坂なので容易に其處
に達することが出来ない。喘ぎ／＼往くと、數刻の後、一大龜裂に遭遇
した。其龜裂は幅二間許、長さは山腹一帯に亘りて、其端を見る能はざ
る程長いものである。試に縁に手を掛け下を覗けば、龜裂の深さは五
十尺ばかり、底には青色の物、棲き光が漂つて居て、腥風地を捲いて襲ひ
來るの感がある。地獄の道とは斯る處を云ふならんと、坐ろに悽愴の
感に打たれて居ると、折から吹き來る一嵐煙の如き雪粉を我に浴せて
後の谿へと吹去つた。此様な龜裂に遭つては、如何なる勇士も到底前
進が出来ないので、記念の爲め、此地點に木標を樹て、上方約七十尺位の
處に露出せる岩石も、一望の裡に收めて撮影した。
此露出せる岩石は、花崗岩より成りて、上層は薄墨色を呈し、又赤土の
如き個所もあつた。記念の木標には、左の如き文字が書いてある。

エ ド ワ 一 七 世 州 の 探 檢

大日本南極探檢隊沿岸隊上陸記念標
右横面 隊員

池田政吉、西川源藏、渡邊近三郎、多田惠一、田泉保直、
左横面 船員

野村直吉、土屋友治、酒井兵太郎、高川才次郎、安田伊三郎、渡邊鬼太郎、
釜田儀作、柴田兼次郎、福島吉治、三宅幸彦。

清水光太郎、藤平量平、杉崎六五郎、濱崎三男作。

裏には明治四十五年一月廿四日建之と書いてある。

西川隊員は此地點にて、渡邊隊員と別れ、更に右方に向つて進んで往
つた。其登つたのは、此山の背部八合目とも云ふべき場所である。此
地點より眺むると、今日まで人間世界に知られざりし、此山脈の背後の
光景が幾分見られる。此處まで來た甲斐もあり、喜悅の情は限りない
ので、試みに眼を放つて展望すると、上部で別れて居る此アレキサンド
ラ山脈の三個の峯の中、比較的大なる中央の峯の山脚が南々西に向つ

て、六哩許走つて盡きて居る。其他は此地點から眺めた所では、大概氷
 原で、一望只是れ多くの起伏なき氷野を見るが如くである。其状は恰
 も佛典中の瓊瑤の世界を見るやうなもので、殆ど一片の塵だにない。
 西川隊員は此光景に見惚れて、獨り茫然と立つて居たが、最早此處まで
 來た土産もあるのて、下り來りて渡邊隊員を呼び、歸途に就いた。する
 と憐むべし、西川は一ツの龜裂に陥つた。雪が積つて普通の表面の如
 くなつて居たので、何の氣なしに踏むと、其幅貳尺位の龜裂に陥つたの
 である。けれど幅が狭いので、背に負ふて居た外套が龜裂の縁に懸
 り、漸くにして陥没だけは免れて居る。所が前面は雪が高く積りて搔
 いても、滑り、後方は幾何丈とも知れざる崖で、危険此上なく、底は例
 の底無し穴の龜裂なので、如何ともすることが出來ず、穴の中で手足を
 突張り眼をパチツカせながら應イ／＼と叫ぶと、其中に渡邊が飛び
 來つて助けて呉れた。て更に左方に向ひ素と來し道を尋ねて歸路に
 就いたが、此失敗より一層警戒を嚴にして歩を進むる事と爲つた。聽



ア レ キ サ フ マ 山 脈 全 景

此山脉を往かば南極の中心に達せん

エドワード第七世の探検

て大雪崩ありし場所より一哩ばかりも歩みしと思ふ頃氷原の一段隆起して最も遠距離の展望に便利なる地点があつた。其地点に達せし際、渡邊隊員はアレキサンドラ山の背後を望みて前に西川隊員が認めたる南々西に走れる六哩ばかりの山脚の外更に同山より南々東に向ひ雪を戴ける二十哩以上の山脈高さ約千尺位走り其端が灰色せる雲に入れるを見た。此時同隊員は若し此山脈を傳ふて往かば南極の中心に達する事も難からざるべしと語つた。此際眼を轉じて同山の表面たる北側を望みしに東方の海岸に島の如き形の物あり、電光の如くピカリ／＼と光つて居るのを見た。其光線が山腹の氷に反射して四方を射る光景は誠に偉大壯嚴の極であつたが後に至つて之は此近海の氷島である事が知れた。兩人は此の如き壯嚴なる光景を目撃しつゝ、疲れたる足を引きづり／＼下り來るに何れに往きしや懐かしき開南丸の姿が見えない。何うした事ぞと尋ぬるに何うも野氷上の氷山の蔭になつて見えないものらしい。けれども同船のあるべき位地よ

雪を喰ひて咽喉を痛む

り少しく東方に當り恰好なる入江を見たので、此入江より登らば却つて近かりしなるべしなど語り合ひつゝ、歸路を急いだ。此時二人共唇を傷め咽喉を荒して頗る困難した。之は水の代りに雪を口にした爲である。元來雪はアンモニアを多量に含んで居るから決して登山者の口にすべきものではないが、飲料水の無き爲め止むを得ず之を食ひ斯る困難に遭遇したのである。

之より前船の繫留地では西川渡邊の兩人が午後十二時に至るも歸船せぬので之を搜索の爲め池田多田の兩人が出發する事と爲つた。先づ道を西南に取り、足跡を辿りつゝ、進行したが、すると田泉技師が先方より一人歸り來るに遭つた。同人が言ふには二人は既に前進して追付けないから駄目である。けれども、大きいペンギン鳥が數羽彼方の氷の蔭に居ると云ふた。そこで、其方面に急いだ處果して、首の黄色い丈の四尺五寸もあるうと思ふ、立派なペンギン鳥が六羽程遊んで居た。そこで之を生擒しやうとしたが、生擒するも生魚の食料が

無くては駄目ゆゑ一層殺して持つて往かうと考へ、携へたる竹棒を以てペンギン鳥に打つて掛つた。ペンギン鳥は不意を喰つて吃驚仰天周章狼狽して逃げ出したが、さはさせせじとお面お胴と打伏せたので、流石のペンギンも閉口頓首、半死半生の體となつたのである。そこで、兩人は西川一行の棄置さし櫓を近傍より持來り、之れにペンギン鳥を積載して歸ろうとしたが、其目方最も重く、到底兩人の力では動かぬので、其儘措き、二人走りて、船の繫留地に歸り、船員一同の助勢を請ふた。すると船よりは、酒井柴田高川藤平杉崎等一騎當千の武者揃ひにて「コリヤ面白し」と宙を飛んで駆けつたのである。

駆付け見れば、果してペンギン鳥の大きな奴が六羽とも半死半生にされて、櫓に積まれて居たので、先づ安心と獲物は其儘にして氷堤上に上り、四方の光景を眺めた者もあつた。處が突然高川船員は氷堤上の龜裂に陥つた。陥つて頭丈出して叫んで居る。一同は驚ひて駆付け之を助けたが、其騒ぎは實に一通りて無かつた。是に於て益々

二人は生死不明と判断

一月廿三日(晴)
汽走帆走直航距離
百十五海里

捜索隊の出發

南 極 記

案じられるのは西川渡邊の身の上である。到底生死不明と判断するの外はない。けれども之が爲めには、一大捜索隊を組織せんければならぬので、兎も角一旦船まで歸ることゝした。勿論ペンギン鳥は持つて歸ることゝする。けれども、手櫂に積んで歸つては面白くない。一つ珍案を行つて見やうと云ふ事に爲つて、兩翼の下に綱を付け引張りながら歸る事とした。其無恰好な姿で氷上を滑りながら歩いて來る光景は實に奇觀であつた。

斯くて評議の結果、愈々捜索隊は組織せられた。其人名は、島義武、渡邊、鬼太郎、柴田兼次郎、多田恵一の四人である。廿四日午前八時三十分、愈々出發することゝなつた。光づ行衛不明なる兩人の雪上に印した足痕を辿りつゝ進んで往つたが、なか／＼彼等に邂逅はない。懸て氷堤を登り、更に氷原を指して進んで往つたが、途中より吹雪の爲めに西川等の足跡が消えて居る。如何に尋ねても少しも知れない。之には殆ど困却したが、尙も屈せず進んで往くに、只眼に映ずるは、漠々たる氷

五歩に一休十歩に一憩

エドワード七世の探検

原のみ何等の消息も知れないので、止むなく船に引返した。其歸還したのは午後の十一時だから、捜索の爲めに費したる時間は殆ど十五時間である。

一方行衛不明の當人たる西川渡邊は如何と云ふに、東方に光る物を見てより以來、五歩に一休十歩に一憩、辛ふじて疲労したる身體を運びつゝ、あつたが遙か後方より、オーイ／＼と呼ぶ聲がするので、備は己等の歸船が遅ひので、迎ひに来て呉れたのかと見渡すと、遙か彼方の氷原上に、四個の黑影が點々として數へられる。て、テッキリそれに相違なしと此方の兩人も能ふ限り大聲にて答へたが、聽へないのか、何の返事もない。注視すると、其中に四個の黑影は窪地の方へ没して終つたので、多分安心して歸船せしならんと考へながら、此方でも歸船を急ぐ。すると、進路に當つて多くの足跡を發見した。是に於て此足痕こそ、彼の四人の者が印せしに相違なしと、それを便りに以前の氷堤を下り、それより櫂を置きし處に到りしに、不思議や櫂は無い。之も多分彼の四

空腹を満たす冷饅
飽

船長涙を流して喜

南 極 記

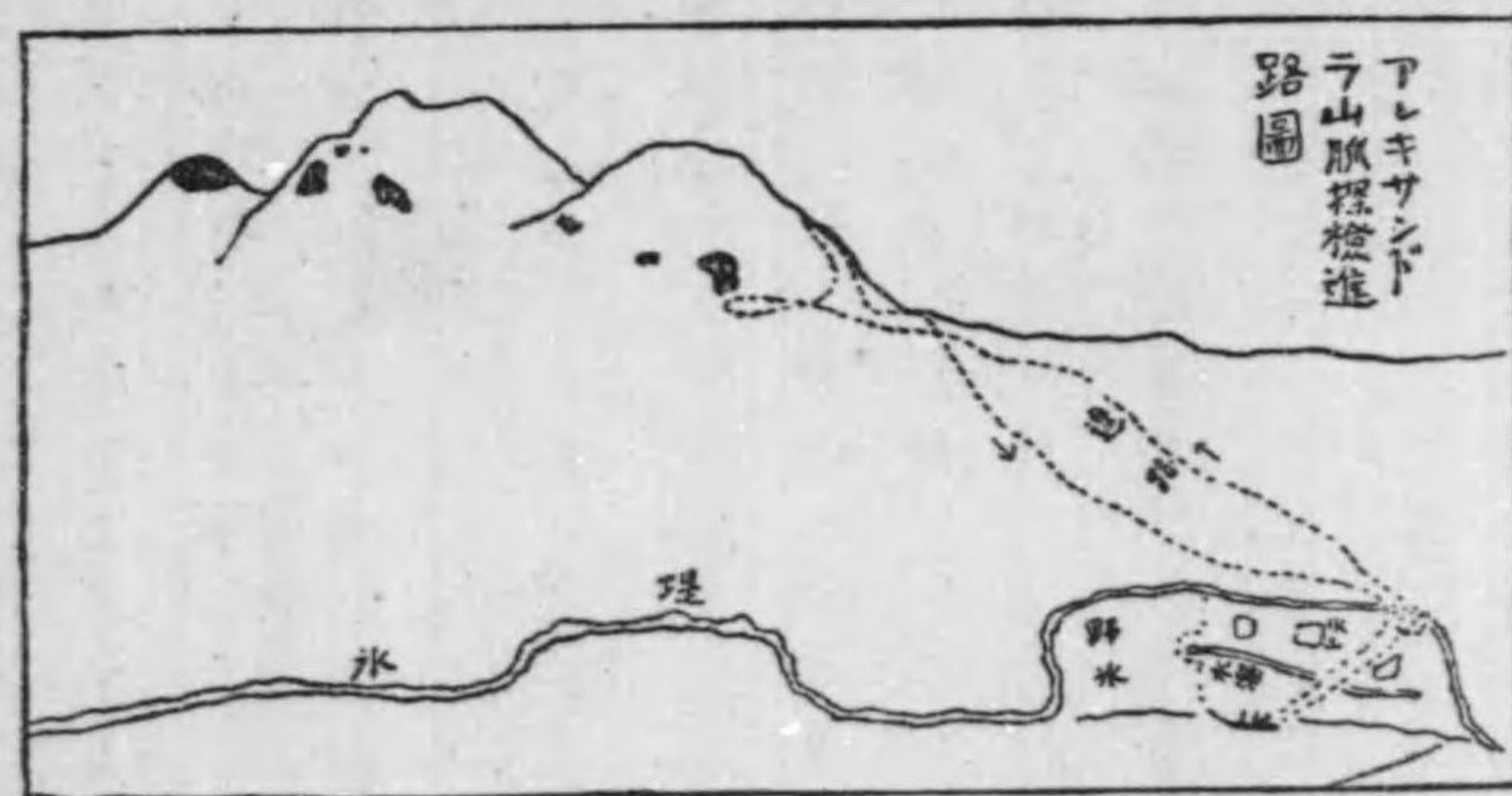
人が持ち去つたものであらうと考へつゝ、尙も下つて曩にペンギン鳥の居た處に到ると、此處にも鳥は一羽も見えぬ。そして多勢にて雪を踏み躪りし如き跡が印されて居る。ては之も彼の四人の仕業に相違なく、ペンギン鳥も捕へ去つたに相違なしと断定した。之より兩人は益々道を急ぎ、船を去ること約一哩位の點に至つた所濱崎福島の二船員が、此二人を迎へに來たのに出會した。濱崎等は、兩人の空腹を察し、温饅の冷えたのを持參したのである。一晝夜半の間少量のビスケットと雪の外口にしなかつた、兩人は、非常なる珍味として、此贈品を味はつた。斯くて幾分か勇氣を恢復し、出迎人の肩に扶けられつゝ、歸船したのは、廿四日午後十時三十分である。

船よりは行衛不明であつた兩人が、歸船したので、其喜びは非常である。萬歳の聲は寂莫たる天地に響いて、繫留地の氷原を撼すばかりだ。船長は喜ばしさに、涙さへ流して無事を祝して居た。

西川渡邊兩隊員が、此探檢に於ける行程は日本里程約拾五里之に要

上陸不可能の地

エドワード七世の探檢



せし時間は丁度三十時間であつた。

元來、此エドワード七世州は、西曆千九百二年二月英人スコットが第一探檢の際發見したもので、英國皇帝陛下の御名を取つて之に冠したものである。然るに、此附近の氷堤が非常に高くして、登攀に便ならず加ふるに海水が氷結し始めたので、海上より陸地上の山脈を眺めた丈て之に命名し、上陸せずして歸り去つたのである。爾來此地は上陸不可能と目されて居たが、我が沿岸隊が此地へ來た時には、氷堤下の海水が離散せず、野氷を形成して居たので、直に船を横付けにする事が出来、遂に古より以來何人も上陸し得ざりし、此方面より、上陸

南極の諸現象を
集めし博覧會の如き
場所

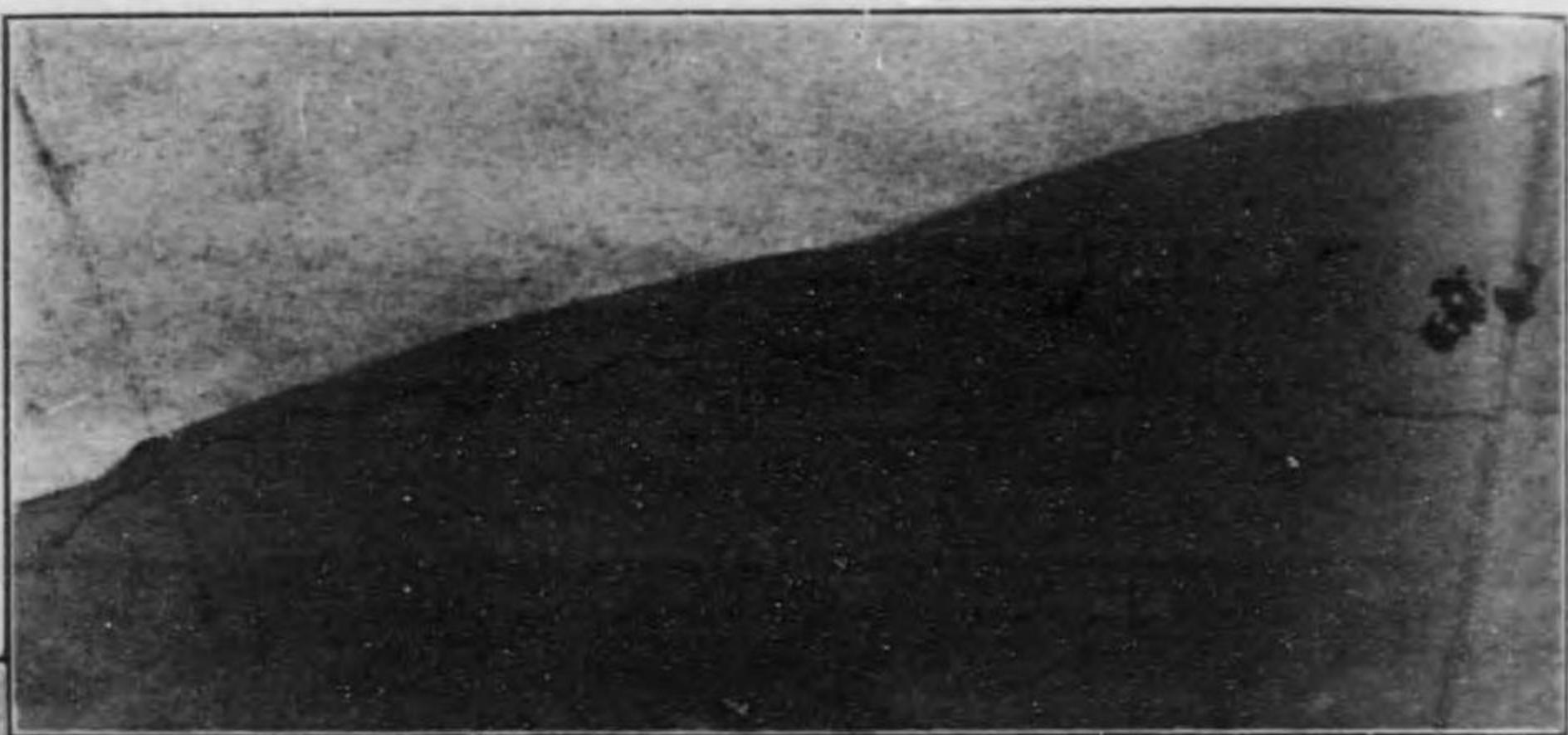
野氷上の氷山

大龜裂を有せる山
脈

南 極 記

探検を行ひ得たのである。

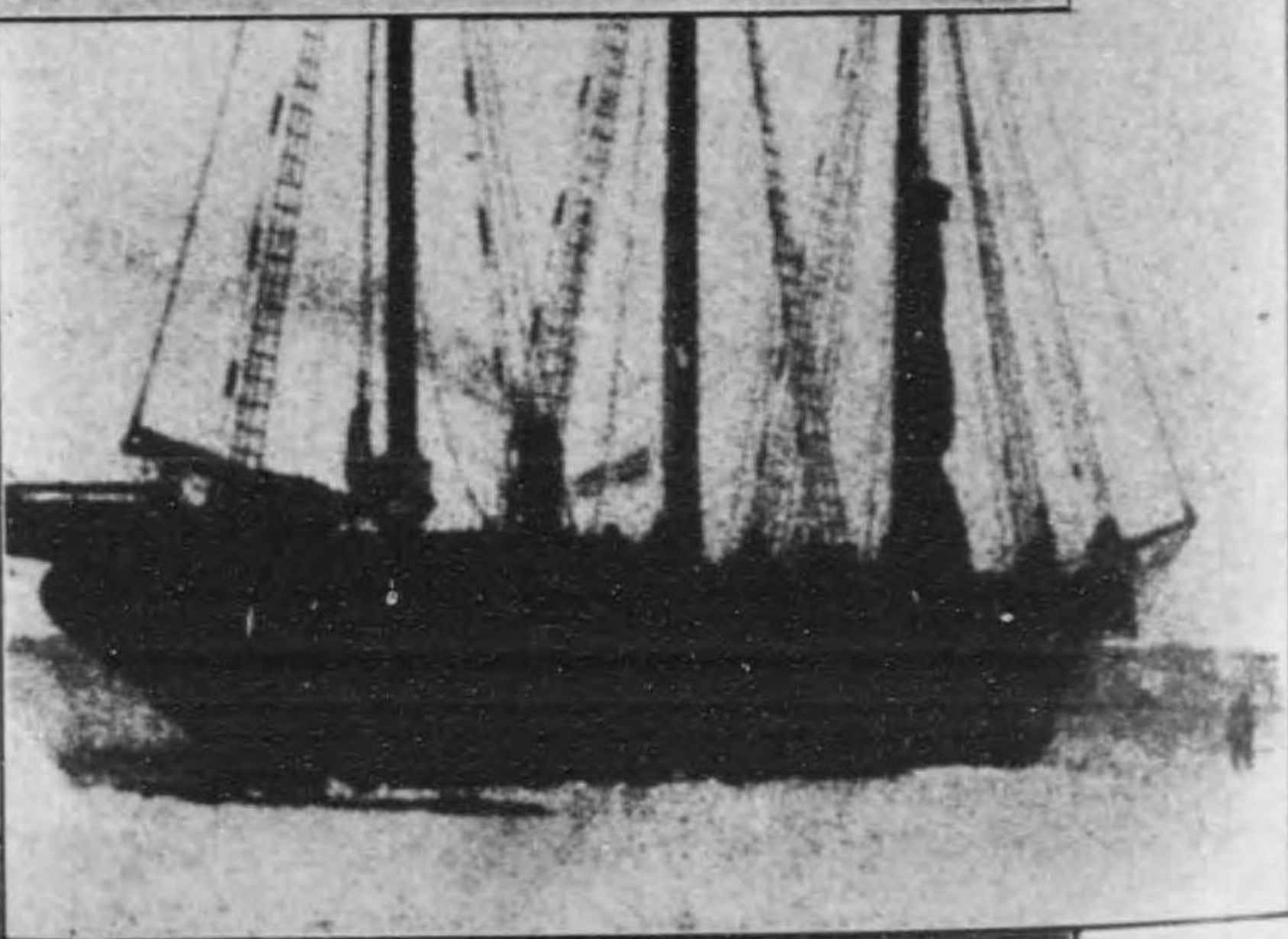
此エドワード七世州の探検に於て、特に喜ぶべきは、此地域が最も多
く極地の現象に富んで居り、殆ど氷界に於ける各種の標本を集めし南
極博覧會の觀のあつたことである。先づ沿岸には廣く野氷が張詰め
居るに、其野氷上に氷山が突元として聳へて居る。海上に流るゝ氷山
は珍しからざるも、原野の如く張詰め居る野氷上に氷山を見るは、
最も珍とすべきが上に、此野氷に接して、絶大なる氷堤があつて、人の眼
を驚かし。其れを登れば、氷界に於ける最も注意すべき現象の一なる
龜裂が縦横に横はつて居る。氷堤の側面には氷河があつて、學者の研
究に便なるが上に、其近傍に鱗形の氷之は、多分氷堤が龜裂の爲めに顛
覆し、其下部の水中に没し居りし部分が現れ、斯の如く鱗形となりて澎
漲し居るものと推定す、及大なる氷柱があつて、極地に於ける氷の結晶
を知る事が出来る。其外起伏せる爪先登りの氷原があり。大龜裂を
有せる山脈があり。其山脈の上部に地質を知るの便ある黒色の山骨



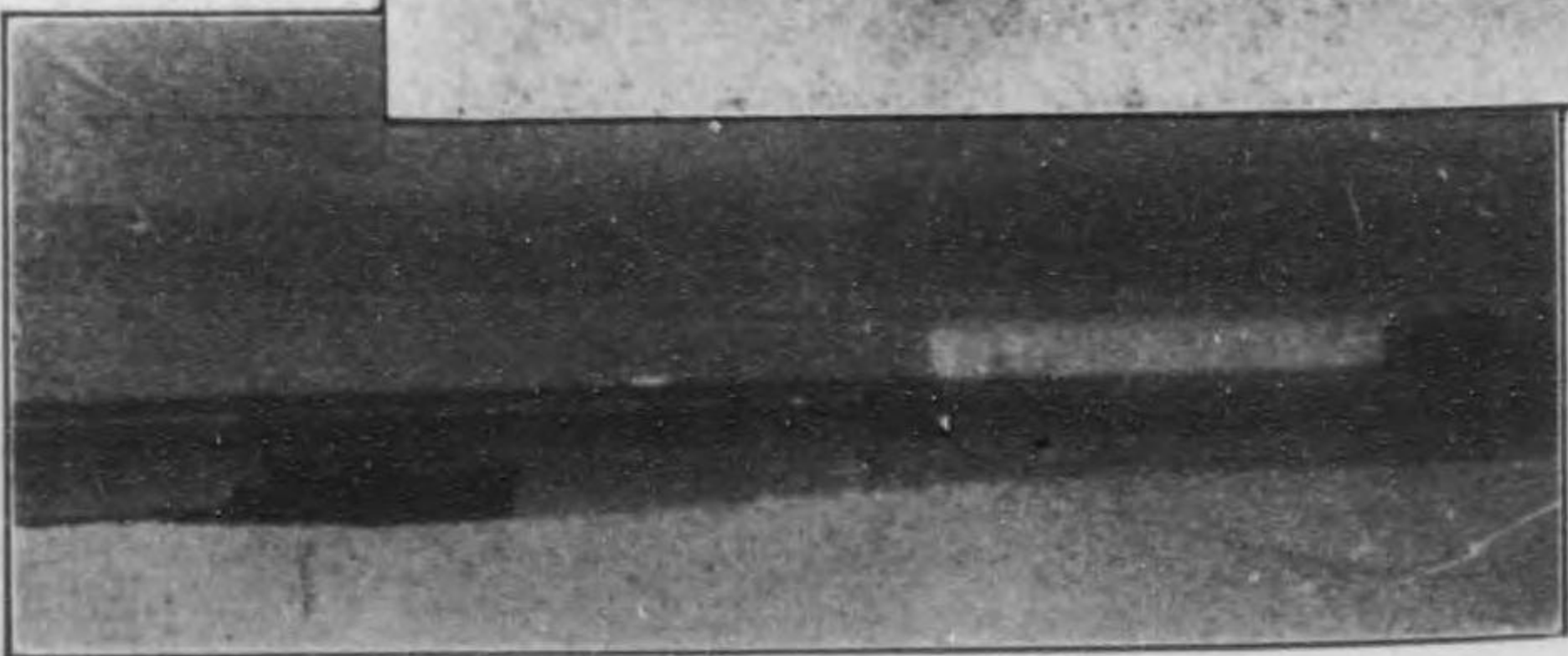
アレキサンドラ山の龜裂、
横線は龜裂、黒斑は露出
の岩石



エドワード氷堤
上の龜裂、横線
を見よ



エドワード回航當時の開南丸



開南丸の探検せし洞
にて見たる氷山、

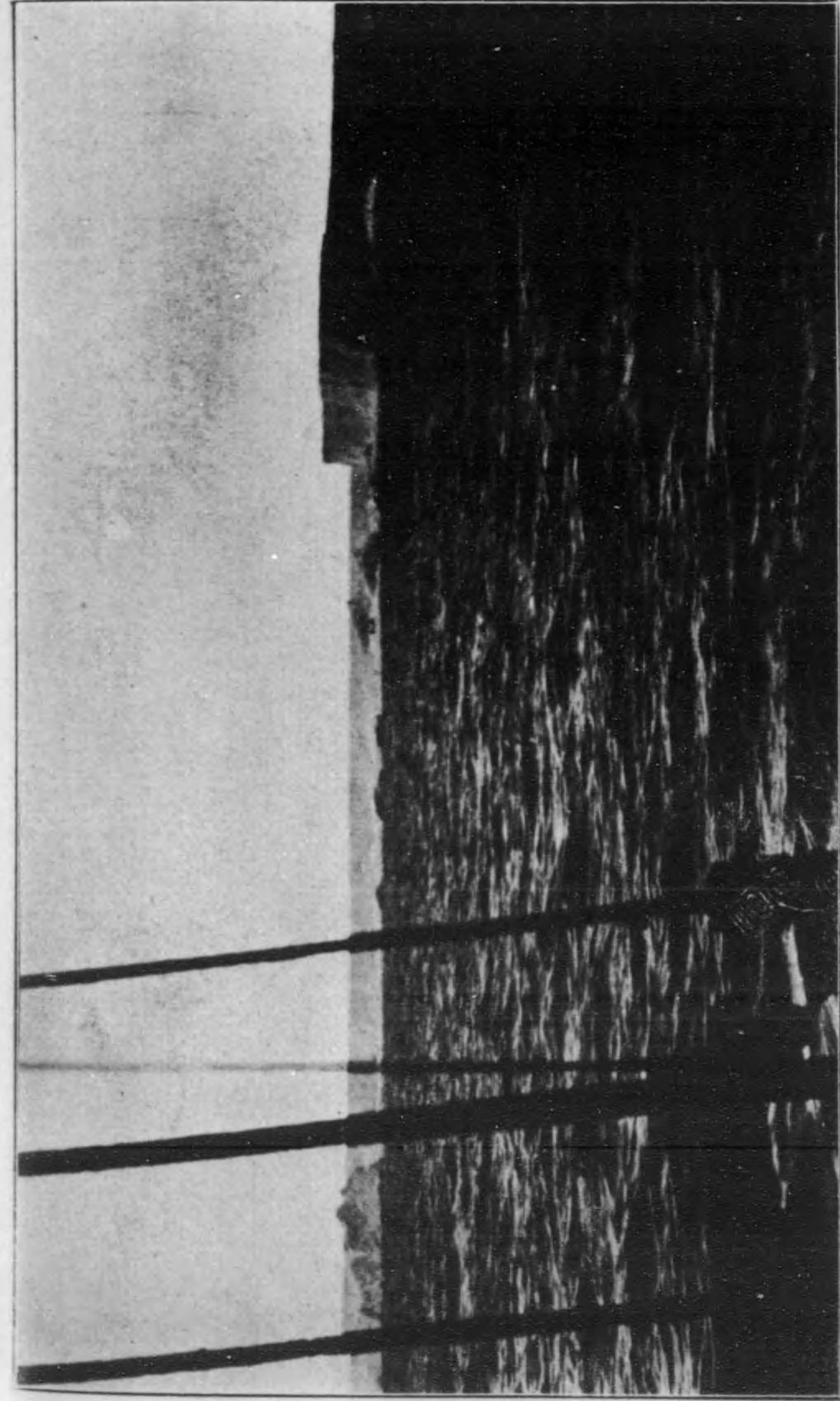
(影撮日四廿月一年五十四治明業四上以)景諸州世七ドワードエ

海底の地質

エドワード七世州の探検

の露出があり。歸路に於て眺めし氷島があり。而して又野氷の中央には細長き形を爲せる水溜あり。繫留地に接近せる西方の沿岸には上部の尖り居る氷の林あり。最も各種の現象に富んで居る。幸にして斯る場所に上陸し得たのは、我が探検隊の一大幸福であつたと謂はねばならぬ。

繫留地に在つてアレキサンドラ山脈の高さを測るに其最高の峯は海抜壹千六百尺あつた。又此灣の深さを測るに百四十尋あり、海底の地質を調べしに細かき灰色の粘土なる事を知つた。



明治四十五年一月十六日撮影

エドワード七世州より歸還の途に就きし後に見たる氷塊境及氷山

第二次計畫探檢隊員姓名

上陸隊員

船員

南	極	記
隊長	白瀬 盛	船長
第一學術部長	武田輝太郎	一等運轉士
第二學術部長支隊長	池田政吉	機關長
衛生部長兼寫真班長	三井所清造	事務長
被服係	吉野義忠	二等運轉士
糧食係	西川源藏	木工
隊長秘書	村松進	水夫長
學術部其他助手	多田惠一	機關士
炊事專務	渡邊近三郎	運轉士見習
活動寫真技師	田泉保直	油差
輓犬係	山邊安之助	水夫
同上	花守信吉	同火夫
		野村直吉
		土屋友治
		清水光太郎
		島義武
		酒井兵太郎
		安田伊三郎
		高川才次郎
		藤平量平
		三宅幸彦
		渡邊鬼太郎
		釜田儀作
		杉崎六五郎
		柴田兼次郎
		福島吉治
		濱崎三男作

第五章 開南丸の東方沿岸探檢

四六時中太陽頭上を廻る
前人未航の海

開南丸の東方沿岸探檢

一月二十四日午後十二時開南丸は繫留地點を出發した。午後十二時と云へば本邦に於ては夜半であるが此地に於ける二月二十四日の午後十二時は夜の景色らしい物は微塵も無い。午前とか午後とかの區別は僅に時計と太陽の位置とに依つて知るのみである。此時分南極は太陽が何時も斜に頭上を廻つて居り、少しも地平線下に入る事は無かつた。只太陽最低の時を以て其地に於ける夜半(正子)十二時とする。最も高く上つた時を以て正午とするのみである。斯くて開南丸は、同地を出帆して東方に向つたが其目的とする所は、同方面に前人未航の海があり、海上常に游泳に満ちて居ると云ふ説があるのて、之を確かめん爲めに航海するのである。此方面にはスコットも嘗て進んだ事があるが其航路は非常にエドワード州の沿岸に接近して氷島の内側

一月廿四日(雪後晴)
エドワード七世州
碓泊

氷島に遭ふ

南極記

の方を進んだので、竟に氷に閉ぢられて、進行不可能と爲り引返したの
である。開南丸は此の如き運命に陥らざるやう、スコットの航路より
少しく北を東に向ひ、氷島の外を通過して航海せんとしたのである。
二十五日午前零時三十分船は多数の氷山に遭つた。同八時又も一個
の大氷山に遭つたが、天気は幸に快晴である。同十一時四十五分左舷
に轉じた。午後八時右舷に當りて數個の氷島を見た。此氷島は周圍
八哩より二十哩位のものだが、形は隋圓形で上部は扁平である。其水
面上に表はれて居る高さは、普通の氷堤と同じく百五十尺乃至二百尺
位のものである。殆ど島と思はるゝ程大きく定着して動かない氷と
考へらるゝので、氷島と呼んで居る。同十時頃少しく雪降りしも暫ら
くにして歇んだ。スコットの探検記には、此邊に於ける陸の存在に就
き、下の如き記事がある。「熱心に陸はなきやと凝視し結果高き雪の坂
を有する少しく起伏状ある線を見た。然れども只薄暗き白き空を見
るのみにて、岩石の露出等は認めず、尙ほ此の如く見ゆる山脈すら太陽

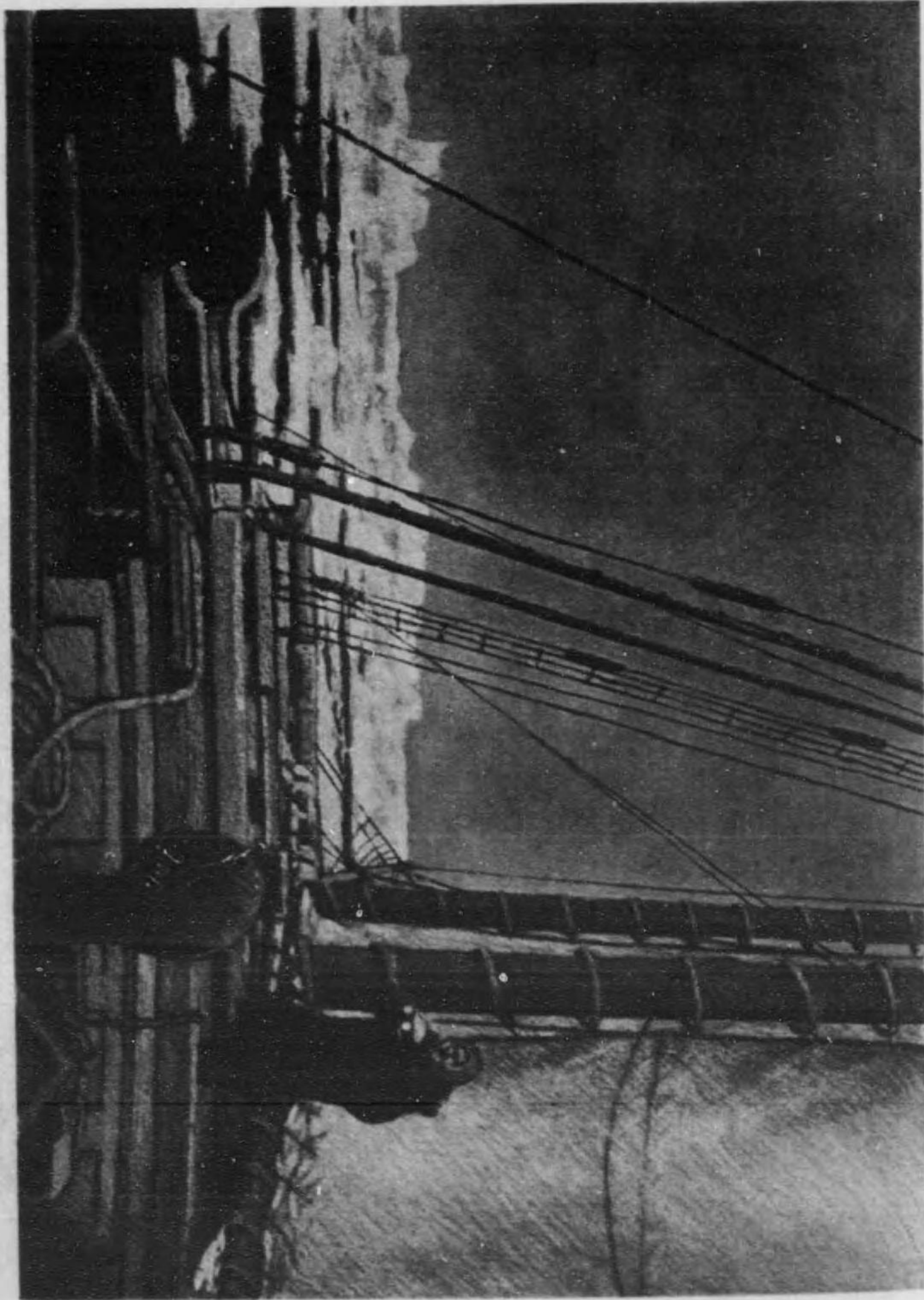
流水海を歴して來
る
一月廿五日(快晴)
帆走汽走直航距離
廿八海里

開南丸の東方沿岸探検

が南に低くなる際には消失した」と書いてあるが、開南丸の船員等は
アレキサンドラ山脈が一行の記念標を建てし地點より東方に向ひ約
三十餘哩の間連互して氷堤に至つて盡くるを見し外、同山脈が更に東
方に延長して居るのは認めなかつた。只山脈の見えずなりし後も尙
暫くの間氷堤だけは東に向つて走るのを見た。之は開南丸の航路が
スコットの航路に比して北方を通過した爲でもあらうが、同船員等は
此以外には何物も認め得なかつたのである。十二時半頃高さ百五十
尺周圍一哩位の氷山に遭つた。直徑五六間乃至十間位の流水にも多
く遭つた。其流水は頗る猛烈に海を歴して來るので、之には少なから
ず困難した。
是等の流水氷山等を警戒しつゝ、氷島を右舷七哩に見て尙も航海を
續けて往くと、廿六日午前三時三十分前面一帯は流水及積氷之は幾多
の氷が密集して積み重なり殆ど堤防の如くになり居るを云ふ、然れど
も沿岸に聳ゆる百尺乃至百五十尺の高さの氷堤とは異なるを以て茲に

開南丸の達せし最
終點
既往のレコードを
破る

は單に積氷と云ふと爲つた。て之を避けつゝ汽帆兩走を以て氷海を縫つて往つたが午前四時に至つて雪がチラチラ降出した。波は積氷の多い爲め比較的静かである。同八時に至つて右舷一帯積氷のみと爲つた。それを避けつゝ尙も勇氣を鼓して進むに正午に至りて右舷一帯又もや積氷を認むるのみならず大氷山も其間に少くないので、船は非常の困難に陥つた。試に橋頭の見張臺より東方一帯を見渡すに前方約貳十海里は眼裏に映じ來るも只是れ氷山流氷の密集にて一望際なく白皚々たる光景である。殆ど進行不可能である上開南丸がシドニーより積來りし石炭及水は最早残り少なく爲りて五十五噸の石炭は十六噸に四十五噸の飲料水は十五噸にも減じて來たので止むなく船首を返す事にした。此地點は西經百五十一度廿分南緯七十六度六分である。スコットが先年進みたる西經百五十二度に比すれば丁度四十分丈多く東方に進み更に橋頭より東方二十海里を展望し得たのである。此點より見れば儘に既往に於ける記録を破つて居るの



む望を海水の方東に遙は向てし達に分十二度一十五百經西長船村野

一月廿六日(雪後)
曇)汽走帆走直航
距離四十海里

船の周囲は流氷又
氷山

開南丸の東方沿岸探検

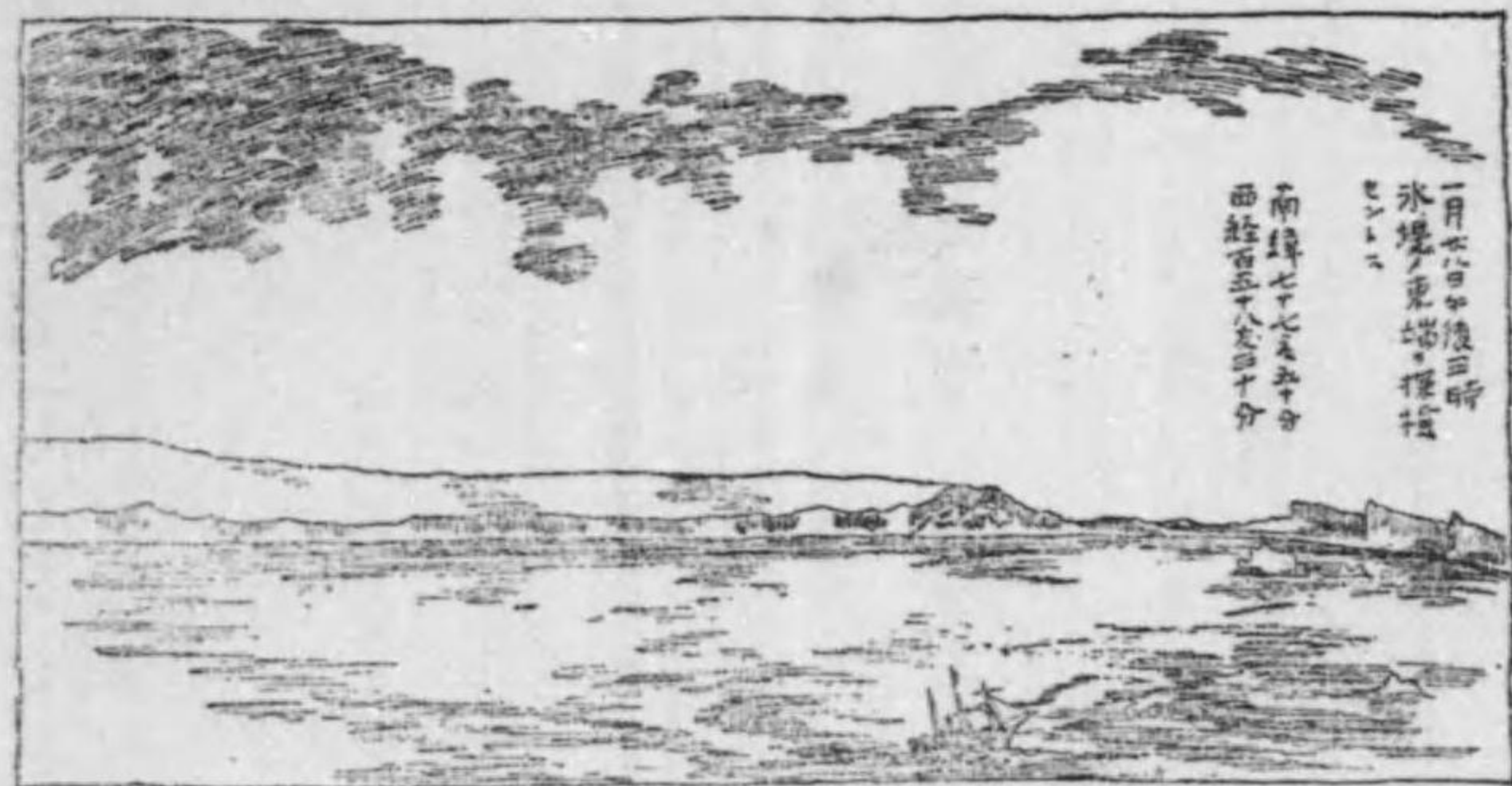
てある。
開南丸は是より陸上本隊根據地たる鯨灣に向はねばならぬが其途中に於て西經百五十八度四十分南緯七十七度五十分の附近に帝王ベングイン鳥の群集し居る小灣あるを聞いて居たので其灣に立寄ること決定した。斯くて方向を其方面に取り航海すると右舷は一帶の流氷にて其物懐さは言はん方なし左舷には遙に氷山流氷等が見える。之を眺めつゝ西方に向ひて航海すると廿七日の午前四時に至つて左舷遙にエドワード七世州のアレキサンドラ山脈を望んだ。此山脈こそ我等が苦戦奮闘の跡なので一同相顧て感慨無量であつた。同日の正午に至るも右舷は尙一帶の積氷であつた。午後四時には流氷氷山等が最早ボツリ／＼と來るのみと爲つた。同日夜半十二時に至りて船の周囲は流氷及氷山に依つて取圍まれた。けれども汽帆兩走を以て之を脱出した。元來エドワード七世州の海は日本沿岸隊の上陸點を中心として十哩ばかりの間海水が藍色を爲して居る外皆薄

茶褐色の海と氷

一月廿七日(一晴)
一曇)汽帆兩走直
航距離八十二海里

一月二十八日(吹
雪)汽走後漂斷直
航距離六十三海里

南 極 記



一月廿七日午後三時
氷塊の漂流
南緯七十五度五分
西経百五十八度五分

茶褐色を帯びて居る。之が影響を受け
てか流水中にも往々茶褐色の物が見える。
此日流水上に幾多のペンギン鳥が快
げに眠り、其中一頭が立つて見張をして居
るのを見た。廿八日午前一時三十分船首
を東南東に向けた。又も時々多くの氷山
流水等に遭遇したが、午後二時に至つて、目
的地に於ける氷塊の東端に近き地點に到
つた。所が又も時々吹雪があつて、風波も
渺なくないので、漂断を續けて居ると、應て
廿九日午前五時天候快晴となつたので、船
首を灣内に向け、午後二時目的地點に到達
した。最初此地點を探検せんとせし目的
は無論多數のペンギン鳥を捕ふるに

縁の多く出入し居
る灣

石塊探集

開南丸の東方沿岸探検



一月廿八日午前
氷塊の探集

あつたが来て見れば少しも鳥類は居ない。
只灣形が種々に出入して、其縁に氷堤が高
く聳え、頗る美觀を呈して居るだけである。
試に灣内を視るに、灣内には今や三個の氷
山と無数の流氷とが浮いて居る。其浮い
て居る流氷上に少しく點々たる黒色の物
が見えるので、何物ならんと、研究に出掛け
る事にした。其指揮役は土屋運轉士であ
る。釜田渡邊の兩水夫に短艇を漕がしめ
て接近して往くと、高さ三十間周囲四丁ば
かりの巍然たる氷山の傍らに、長さ三間幅
二間位の流氷がある。其流氷上に黒色の
土に混じて石塊が多く附着して居る。て
之を取りて短艇中に收めた所重量は孰れ

一個の氷山大音響
と共に天を指して
上る

南 極 記

も六百多位あり、其数は十個以上もあつた。尙左方大氷堤の下を眺むるに黒色の物が見えたので、それを研究せんと進んで行くと、之も流氷に黒き泥の附着せるものであつた。けれども未知の海へ来て氷堤に接近しては、危険であるので、其物の何かを確かめた後、少しく本船の方へ漕ぎ始めた。すると其一瞬天地も砕けよとばかり一大音響がした。驚いて振り返ると、タツタ今自分等が石塊を取つた流氷の傍らにありし一個の氷山が此大音響と共に、突然海中より天を指して浮き上りつゝあるのだ。浮き上りつゝ水中より大小幾百の氷塊を空中に向つて飛散しつゝあるのである。近傍に在るものは、人も船も氷も石も木葉微塵に砕けよとばかり飛散せしめつゝあるのである。只氷塊を飛散せしむるばかりでなく、猛烈無雙龍巻の如き勢を以て、海水を空中に吹上げつゝあるのである。氷山の頂にあつた白雪を雲かとばかり海中に吹き落しつゝあるのである。見る間二分間に三十間ばかりの氷山は、其姿を三倍以上も水上に現はして百間許りの氷の姿!!! 悠然とし

塵霧に於ける現象
と思はれず

一月廿九日(快晴)
汽走帆走直航距離
八海里

大隈灣

開南丸の東方沿岸探検



て青空に聳えたのである。其壯!!! 其悽!!! 誠に塵霧に於ける現象とは想像されない程であつた。熟視すれば氷山は高さが増したと共に、其體は著るしく右方に傾いて來た。殆ど六十度の角度位に傾いて來た。

本船では此光景を見て、三人は必ず殺されて終つたに相違ないと思つて居たが幸にして歸り來つたので、大喜びであつた。互に今日の無事を祝し、且未曾有なる奇現象を評論し合つた。

端艇の指揮役であつた土屋運轉士は此灣に向つて大隈灣と命名した。此日は天候の都合で近傍の海上を漂蕩して居た。翌三十日午前十時又々端艇を下ろして、前日實見せ

し氷上の黒い物を取りに往つた。其人名は酒井西川、渡邊鬼太郎、柴田等である。斯くて又も流水に近づいて調べて見ると、昨日見たる黒き泥は、氷と泥との凝結したもので、中に小砂利を含んで居る事を發見した。其傍らに昨日多くの石を取りし流水が、昨日とは異りたる面を現はして居たが、其面に大なる石を含んで居たので採收した。此石は目方が三十貫程もあり、素敵に大きいものであつた。此邊には何故流水に石が附着し居るぞと云ふに、之は海底に氷結して居た氷が、或作用に因り海底を離るゝ時、それと共に巖石、土砂等を衝へ来るものと思はれる。若し遠くより來れりとなれば、石は銳角でなく、土砂は洗ひ去られて居る筈だが、それが細粉状を爲し、石が銳角を爲して居る點から見れば、此地點のものが或る作用により流水に附着したものと考へられる。此珍らしき標本を得たので喜んで、本船に歸らうとする、其途端端艇の傍らへ一頭の大鯨が現はれた。ニュットば

かり黒色の背を表はして、尙ほも潮でも吹き出しそらなので驚いて眺めて居ると、臆て悠然として、其拾間ばかりの雄姿を海中に没して終つた。上を眺むれば數百尺の氷堤聳え、下を望めば氷海横行の極鯨潜む。其中間に一葉の小舟を浮べて活動する危さは、殆ど風前の燈の如きものであつたが、無事本船に歸る事が出来た。本船では此灣口を測量し見たるに、口徑東西參哩半、南北約貳哩程もあつた。それより又深さを測量し見るに、百三十尋あり、底は皆硬い石であることが知られた。此灣内の海水は開南丸の到着當時より茶褐色を帯びて居たが、何の原因に基くかは不明である。海上には小さき海老が居たので之を採取した。一月三十日午後一時十五分此灣を出て、鯨灣に向つた。午後四時若干の降雪があつた。左舷約一海里半乃至三海里に氷堤を望みつゝ進んだ。此日巨大なる氷堤の海中に落下するを見た。氷堤の方に當り突然大砲の如き大音響を聞いたので、何事ならんと眺めると、非常なる

一月三十日(曇後晴)汽走帆走直航
距離六海里

一月三十一日(霧又晴)汽走帆走直航
航距離四十三海里

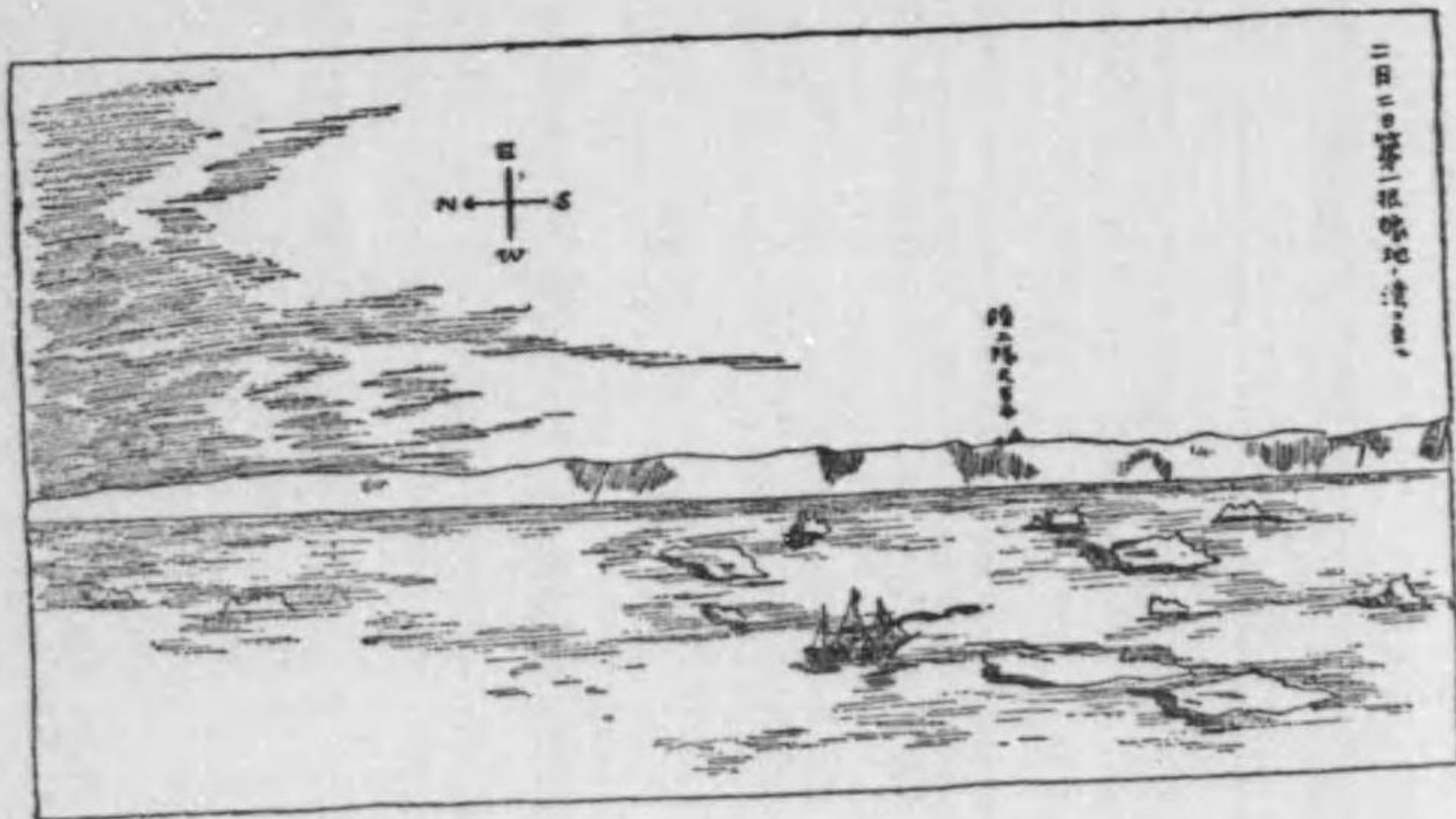
二月一日(曇又雪)汽帆兩走直航距離
十三海里

南極記

水烟が立て、其後から長さ五十間もあらんと思はるゝ大きな氷山が浮いて来た。之は氷堤が缺けて落たのである。何の氷堤にも大抵上部には龜裂があるが此龜裂が初めは一才位の幅なのが晩方には五寸と爲り翌朝は一間と爲ると云ふ風に増加して、竟に長距離の間が缺けて落ち、それが氷山と爲つて流れ出すのである。其光景は實に懐しいものである。三十一日午前二時頃より濃霧襲來し時々晴れて又霧となつたが正午に至つて全く晴れた。午後零時三十分嘗て一度上陸せんとせし事ある開南灣の灣口を距る二海里半の地點を通過した。灣は元の如く存在して居たが、一行が上陸の時踏破せし野氷は悉く流れ去つて居た。彼の海豹と戦ひたりし所なぞば、無論影も形も無くなつて居た。只切斷したるが如き氷堤が斬然として高く峙てるのみであつた。此時風位悪しく、船は徒に開南灣と鯨灣との中間の洋上を漂ふのみであつたが、二月一日も同様の天候で殊に降雪さへあり、咫尺を辨ぜざる事も少なくなかつたので、前

再び鯨灣に入る

開南丸の東方沿岸探検



日と相似たる位地を一進一退して居た。二月二日も或は風浪高く、或は吹雪あり容易に灣内へ入り得なかつたが、午後十時愈々鯨灣内に突入した。然るに灣内の光景は前に己等が此灣を抜錨せし後著るしく變化した。抜錨の當時は灣内全部野氷を以て張詰められて居たが、今歸つて見ると、流石に廣き灣内の野氷も概ね海上遙に流れ出て、船も深く入り込み得るやうに爲つて居た。抜錨の當時灣内に碇泊して居たフラム號も、何時の間にか何處へか往つて終い今は其影さへ見られないのである。灣口の光景が斯く變つては、根據地の位地が判定さ

諾威か日本か

二月二日(曇又吹雪)汽帆走直航距離三十七海里

今にも海中の藻屑とならん

南極記

れないので、船員は午後十一時橋上の見張臺に上つて見た處左舷氷堤上に、ポットした黒い物を見た。之は天幕には相違無いが、それが諾威のか、日本のか、少しも判らないのである。けれども、大體日本の物に相違なかるべしとの推定を附けたので、其方面に進み、氷堤に接近し。汽笛を鳴らしたが、答ふるものは、氷原に吹荒む風の音のみであつた。三日午前一時船は灣内適當の地に到りて陸上隊と聯絡を取る爲め端艇を卸す事と爲つた。之に乗込みしは、西川多田渡邊近三郎の三隊員釜田渡邊鬼太郎の二船員である。彌が上に荒れ狂ふ海上も何のものかはと一上一下しつゝ進んで往つたが端艇の危険は此上もない。今にも海中の藻屑とならんと思はれる位であつたが漸くにして少しく傾斜する場所を發見したので、漕手をして、其處に艇を繋がしめ、隊員船員、打揃つて氷堤を攀登らうとした。西川隊員は第一に氷上に躍り上つた。續て多田隊員が船を出てんとする途端西川隊員の立てる足元の氷は急に裂け初め、異様の音響を發して二坪程の氷塊となり渡邊

海中に落ち込む

極海の鬼たるを免る

開南丸の東方沿岸探検

諸共海中に落ち込んだ。其氷は憐むべし、フカリ〜と流出したので一同之には驚いた。其際西川隊員は兩足海中に没し、兩手のみ氷塊に取り付きつゝ、助けて呉れつゝとの聲も出し得ず、只管藻掻いて居たのである。が、渡邊隊員は之を見るより、急ぎ同隊員の頭を押へた。それが爲め頭は全く雪中に没したが、時しもあれ氷の裂けし反動にて、五六間後方には押遣られた端艇は、此處へ漕ぎ來り急ぎ兩名を收容したので、同隊員等も漸く極海の鬼となるを免がれた。此時全員は氷の裂壊が何時如何なる範圍まで、危険を及ぼさずとも知れないので、警戒の結果、短艇の準備を完全にし、いざと言はば、危急を救ふべき充分の手筈を整へた。鬼角する中、一大吹雪は突如として襲ひ來つた。天地は爲めに冥濛として前方僅に十五六間しか見えない。是では假令上陸が出来るも、到底根據地までは進む事が出来ぬ。それ故寧ろ雪の晴るゝを待つて、作業するに如かずと云ふ者もあつたが、西川隊員はそれを肯んじない。吹雪何かあらん、折角此處まで來りながら、目的の根據地に達しないと云

影の如き五個の黒

南極

手眞似の挨拶

ふ法あらんや。尙も前進を續けやうと主張したので、一同も之に従ひ前進を續けて居た。然るに吹雪は益々烈しくなり、最早一步も進むことが出来なく爲つたので流石の勇士も竟に進行を思ひ止まり、一旦本船にまて引返す事とした。すると天候險惡の爲め本船は一旦灣外に出る事と爲つた。

午前十一時頃幾分天候も回復したので、遙か氷堤の上を眺むると、五個の黒影が蟲の如く氷堤上に見えて居る。船員は之を見て、是は畢竟探検本隊員の根據地に歸還し居るに相違無しとて大に喜んだ。其理由は根據地に留り居たるは、僅に二名なるに今此黒影は五個あるからである。午後一時半天候は殆ど回復したので、船は氷堤近く進んで往つた。此時陸上にも開南丸の姿を認めしと覺しく、前の黒影は氷堤の端に歩み寄り、出來得る丈船に接近せんと試みつつある。暫くにして氷堤上と本船の橋上との手眞似の挨拶が始まつた。全然菟蕪屋の六兵衛問答のやうな態であつたが、それでも意志は通じたと見え、本船

一幅南極の好畫圖

開南丸の東方沿岸探檢

は間もなく灣内深く入込んで往く。すると陸上でも之に後れじとても思つたか多數の犬に糧を曳かせ、本船と並行して氷堤上を疾走しつゝある。正に是れ一幅南極の好畫圖とて評すべきであらう。其光景は實に見事なものであつた。午後八時に至り一隻の短艇を卸して土屋運轉士之に乗じ、隊員三名船員貳名と共に今朝登攀を試みし地點に向つた。一方は短艇上他方は氷堤上にて談話を爲し、双方の無事を語り合つた上、海陸兩者の聯絡を附けた。其地點は氷堤の高さ約五十尺であつたが、それより繩梯子を以て、人間と荷物とを卸さんことを約束した。氷堤の上では、山邊花守の兩アイヌが氷を掻いて荷物を卸す場所を作つて居る。本船では更に傳馬船一隻短艇一隻を卸して、氷堤の下へ到らしめたが、風と潮との加減で、灣の奥より續々氷塊が流れ來り、到底小船を繋ぎ得なかつた。て少しく沖へ傳馬船を遣り荷物を積まうとしたが、此處の氷堤は前のよりも高い。六十尺も綱を下さねばならぬのである。けれども荷物は、大抵此場所から卸した。荷物ばかり

六十尺の絶壁より
身を躍らして降る

突進隊一行無事開
南丸に乗船す

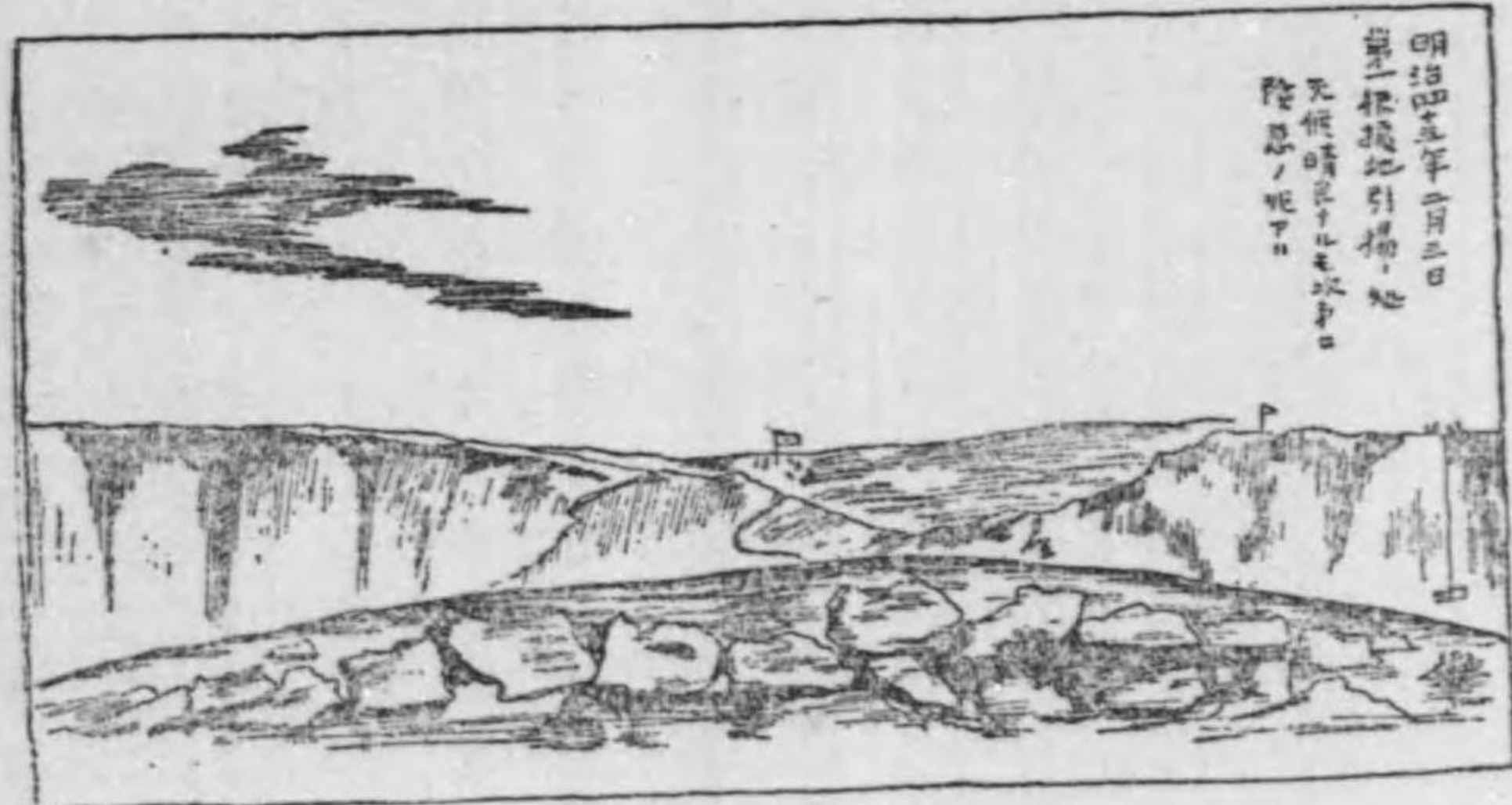
南 極 記

てなく人間も一人此場所から降りた。それは船員柴田である。柴田は何!!日本男児が此位の處を降り得ない事があるものかと己れの身體に麻繩を確と結び附け、此銀壁の如き大氷堤を降りんと企てたのである。氷堤上には船員波邊鬼太郎、木工安田伊三郎の兩人が氷上に除雪鍬を立て麻繩の端をそれに巻いて持つて居る。柴田は我が勇敢なる氷堤降りの光景を見よとばかり、六十尺の絶壁より身を躍らしスルリくと下に降る。其勇敢さは人か鬼か日本男児にあらざれば爲し能はざる所である。總て無事降り終るや堤上と堤下とは期せずして萬歳の聲が湧いた。

他の一方では出来る丈奥へ短艇を遣つた。すると氷堤の壊れて斜に爲つて居る場所があつたので其處より陸上本隊員を乗船せしめた。大體此の如き有様で船員隊員共殆ど晝夜兼行の姿で此引揚事業には働いたが其間には屢々肌を栗を生ずるやうな危険を冒した事もある。或る時の如きは數十尺の氷堤が傘の如く海上に覆ひ懸り今にも壞崩

犬に端艇を曳かし
む

開南丸の東方沿岸探検



明治四十五年二月三日
第一探検隊引揚地
天候晴れ
陰影ノモト

れんとする大危険の場所を急ぎ小船に乗つて通過した事などがある。此様な困難に遇ひつゝ、二月三日の午後八時から四日の午後十時までに諸般の物を運び終つたが、天幕と氣象觀測臺とは記念の爲めに陸上に遺して措いた。處が天候が漸々悪くなり始めた。流水が續々流込んで来た。人に乗せた場所荷物を載せた場所も所嫌はず氷が張詰めるに至つた。其變化の迅い事は實に驚くばかりである。て止むを得ず六頭の犬に端艇を曳かせて新に張詰めたる氷上を走らせ、而る後急ぎ小船へ飛乗つたのである。此時に當つて南方の風は強く雲を捲いて起り殊に盛ん

二月三日(吹雪)汽
走直航距離五海里

に雪さへ加はつたので其物懐さは一方でなかつた。
船中では遙に此光景を見て急ぎ端艇を扶けしめ、幸ふじて本船に入
らしめた。斯くて雪は益々烈くなりて咫尺を辨ぜず、風は頗る強くし
て颼々として吹き荒むので、竟に灣内に留まる事が出来ず、急速此地を
出帆した。今や人間の生命の危い場合であるので、甘頭の犬は可憐に
堪へぬけれども、止むを得ず此處に措いて立去つた。

二月四日(晴後吹
雪)直航距離十五
海里
コールマン島に向
ふ
甲板上の祝杯

二月五日(曇)帆走
汽走直航距離七十
七海里
二月六日(雪)帆走
汽走直航距離三十
四海里
二月七日(曇後晴)

第六章 南水洋の再航

危機一髪漸くにして逃れ出てし開南丸は、二月四日午前十一時出帆
後絶えず吹雪と流水とに襲はれつゝ進んで往つたが、明くれば五日、船
は今しも目指すコールマン島方面に向つて、氷海を駛走して居る。之
れは同島に立寄りて、ペンガイーン鳥及礦物を採取せん爲めである。
船中にては兎も角今回の成功を祝さん心にて、甲板上に於て祝杯を舉
げた。先づ兩陛下の萬歳を唱へた上、探検隊の萬歳を唱へた。其聲は
海波に響いて氷海の鯨鯨を驚かしめたが、前日來の疲労の爲め折角の
馳走も味ふ者なく、ソコ／＼にして各々寢室に急いだ。
翌六日。午後四時頃より降雪頻に至りて咫尺を辨ぜず、甲板上に寸
餘も積んだ。海上にはチラホラと流水も漂ふて居た。
翌七日も。翌々八日も。氷山海上に漂ひ點々として碧波と水晶と

帆走汽走直航距離
四十五海里

太陽始めて水平線
下に没せんとす

二月八日(晴後曇)
帆走汽走直航距離
七十海里

二月九日(雪後霰)
帆走汽走直航距離
七十五海里
二月十日(曇)帆走
汽走直航距離二十

五海里
吹雪の爲め船を寄
するは危険なり

二月十一日(吹雪)
汽走帆走直航距離
七十八海里
二月十二日(暴風)
帆走汽走直航距離
四十海里

二月十三日(暴風
雪)帆走汽走直航
距離六十四海里
幹部會議

航 再 の 洋 氷 南



流氷ある上、風は烈しく吹雪は起り、船を寄する事は頗る危険であるので遙か沖の方へと出た。
翌十二日は、風益々烈しく、波愈々荒く、船の傾斜は二十五度乃至三十度を示して居る。是れ船足の浮ける爲め、傾斜が特に甚しいのである。此暴風怒濤は翌十三日に續き、更に猛烈なる吹雪を伴うて盛んに襲來したが、十四日に至つて探検行動の將來に就いて幹部會議が開かれた。隊長、船長、始め隊中の重なる者皆列席の上、學術室に於て會議が開かれた。議題の主なるものは、十一日來の東南風の爲め、船は今や南緯七十一度附近

記 極 南

相映發する状は、實に又なき美觀であつた。
八日船内眞時十一時三十分太陽の高度は零度五十九分四十秒であつた。其方位は羅盤方位西東である。最低高度は二月九日午前零時二十分にして、其高度は殆ど水平に近き零度四十分であつた。此第二次航海で、太陽の水平線下に没せざるを發見したのは、明治四十四年十二月二十七日の夜半であつたが、それより南に進むに随つて、太陽の最低高度も次第に高く、南緯七十八度三十一分なる鯨灣附近に於ては、其最低高度は十二度以上で、殆ど晝夜の區別も判らない程であつたのだ。然るに今や歸途此地點まで來ると、太陽が正に水平線下に没せんとするに至り、一晝夜中に夜と云ふ物も少しづつ生ぜんとするに至つたのである。
九日朝來雪降り來り、又霞の甲板を打つ音を聞いた。十一日午後十一時半頃、コールマン島の影が船の行手に現はれた。隊員船員は是非とも船を適當の個所へ寄せたいと思つたが、此附近一帶には非常なる

此處歸航と決す
二月十四日(曇)帆
走汽走直航距離
八十三海里

磁極附近通過
二月十五日(曇)帆
走汽走直航距離四
十五海里

南極記

まで漂流せしめられて居るが、此處二三日天候回復を待つて豫定の如く再び南緯七十三度まで引返し、コルマン島に上陸すべきや否やと云ふ事にあつた。所が今や石炭及水等が非常に缺乏し居る上、烈風濃霧も頻に來るので船が意外の危険に遭遇せずとも限らずと云ふ者あり。或は隊員船員共に頗る疲勞し中には神經衰弱に罹り居る者もある故に此儘歸途に就くは止むを得ざる事なりと云ふ者もあつた。結局遂に評議は此儘歸航と云ふ事に決し、船長は直に帆走を開始して進路を北北西に取り再び襲來せる吹雪の中を進航した。此邊は羅針が微動して少なからず横に向ひ往航の際非常に困却した場所である。磁極は南緯七十二度餘の地點にあるので開南丸がコルマン島に達する二三晝夜前より磁針は絶えず微動して兩側へ二十度位づゝも往き完全なる針路を取るに尠なからず困難した場所である。今や歸途に際しても磁針の微動は同様だが、船の操縦者は餘程極地の航海に慣れた爲め不安の念が少ないのである。

二月十六日(曇)帆
走汽走直航距離三
十八海里

二月十七日(曇)帆
走汽走直航距離百
海里

二月十八日(曇)帆
走直航距離七十八
海里

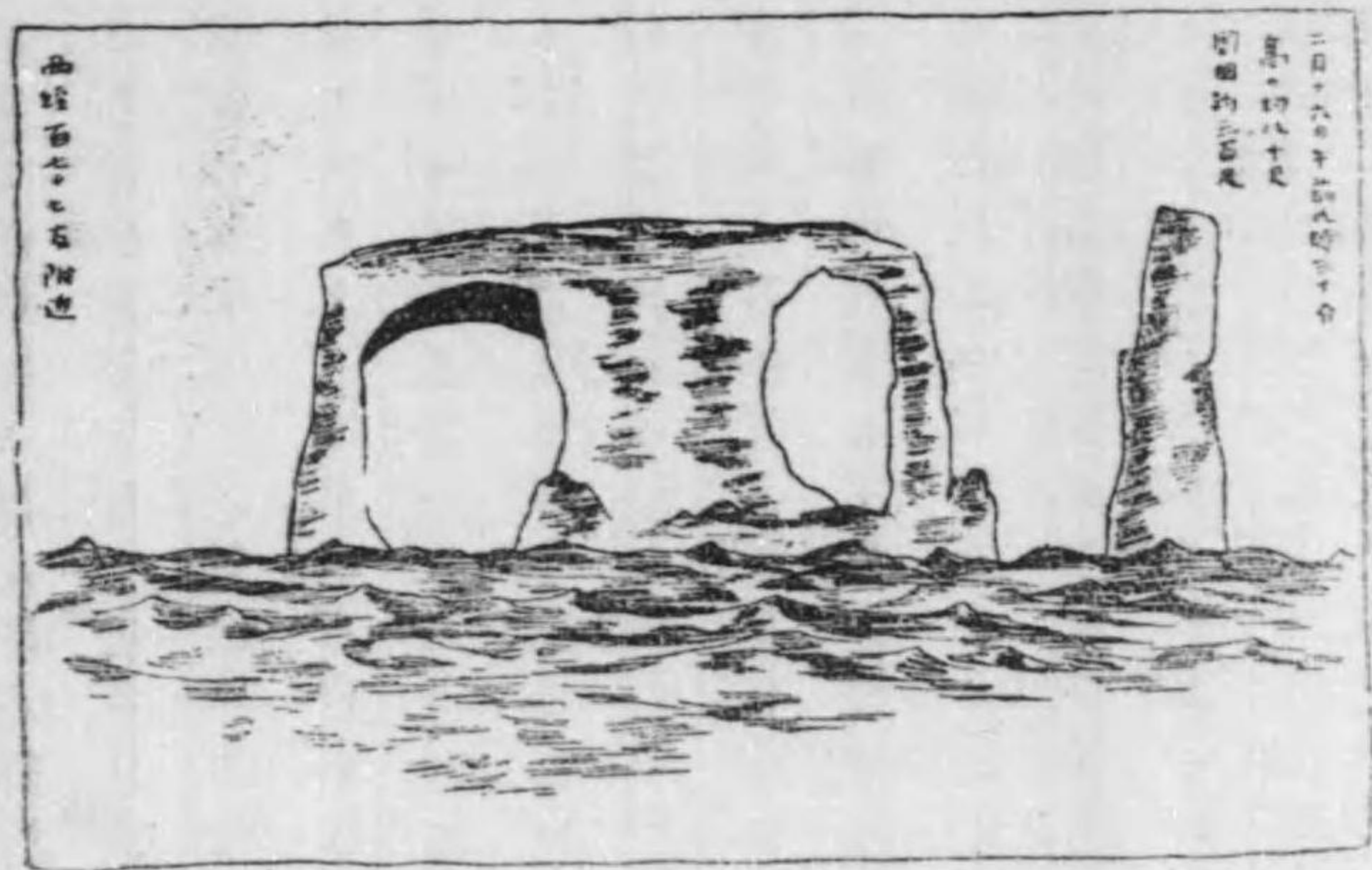
二月十九日(曇)帆
走直航距離四十五
海里

二月二十日(曇)帆
走直航距離七十六
海里

二月二十一日(雨)
帆走直航距離七十
六海里

二月二十二日(曇)
帆走直航距離百二
十海里

南氷洋の再航



二月十六日。午前九時。左舷半哩の邊に高さ五十呎周圍二百間餘の盤狀氷山を見たが、更に同十一時三十分に至り、右舷四十間許りの海上に高さ十五呎周圍五十間餘の異形の氷山を發見した。今後暫くは尙多くの氷山に遭遇する事であらう。

二月十九日。午後十二時近き頃、日暈が現はれた。一同甲板の上に立つて是を眺めたが頗る美觀を呈した。

二月二十二日に至り、氣温著しく昂騰し、外氣既に三四度に昇つた。

翌二十三日。午後三時頃、非常に大なる一羽の帝王ペンギン鳥何

二月二十三日(曇)
帆走直航距離三十
五海里

二月二十四日(曇)
帆走直航距離二十
海里

二月二十五日(風
雨)帆走直航距離
五十八海里

怒濤幾度か甲板を
洗ふ

二月二十六日(曇)
帆走直航距離三十
八海里

寒暖潮の相合する
處

二月二十七日(暴
風)帆走直航距離
八十八海里

南 極 記

れより迷ひ來りけん頗る疲勞したる様子にて船側に來り頻りに甲板
上に飛上らうとして居る。清水機關長最初之を發見し、ヤイ／＼と叫
ぶ所に續いて杉崎釜田兩水夫來合せ力を協せて投網を被せた。する
とペングイーンの首だけへは掛つたが餘り舷側に近い爲め遂に甘々
と逃げられて終つたのは残念であつた。
二月二十五日。氣壓は急に斜角を爲して降つた。波強く微雨更に
降り來り何となく暴風の徴を呈した。と思ふと間もなく北西の暴風
は午後に至つて正西に轉じ、傾斜三十度。怒濤幾度となく甲板を洗ひ、
船は爲めに少しく東方に流されたが、辛ふして此急激なる天候の怒り
を避けて、幸ひに遅々たる速度ながらも進航を續けた。翌廿六日に至
りても怒濤は尙止まず、氣壓計益々下降し、總員は頗る不愉快なる状態
にあつた。今や航路は新西蘭の東部、寒暖潮の相合する處として有名
なる荒海に入つて居る。頃日來荒れ續きの爲めに船は全く有名なる
荒海に飛込んだのである。

二月二十八日(暴
風)帆走直航距離
七十六海里

二月二十九日(曇)
帆走直航距離八十
二海里

三月一日(曇後晴)
帆走直航距離三十
五海里

三月二日(曇)帆走
直航距離五十五海
里

三月三日(曇)帆走
直航距離八十三海
里

初めて星光を見文
明界に入る

三月四日(曇)帆走
直航距離百二十七
海里

三月五日(曇)帆走
直航距離六十四海
里

三月六日(曇)帆走
直航距離三十四海
里

三月七日(曇後晴)

南 水 洋 の 再 航

越えて二十八日に至るも暴風激浪は尙止まず。前日の西及び北西
の風の爲めに船は少なからず流されて居る。船員は晝夜是等の風浪
と闘つて居る。此暴風怒濤は三月一日午後に至つて漸く収り、二日は
頗る平穩なる海上となつた。
然るに其翌三日午前西方より驟雨來り、一天暗雲に閉され四顧暗
なりしも、やがて雨歇み星光燦として輝き、始めて文明界に入りし心地
がした。怒濤は遠慮なく空を拍つて白龍の縦横に驅馳する如く、空と
海と相映發する壯觀は誠に壯絶凄絶であつた。
今や船は南緯五十七度附近の海上に入つて居る。今五六日の後に
は第一寄航地と目指す新西蘭に到着する豫定である。
三月四日、又もや激烈なる風波の爲めに、船は大傾斜を爲したが、翌五
日に至るも同様風波荒らく、六日又同様翌七日午後に至つて漸く風浪
が収まつた。
翌八日は終日平和の天候であつたが、其翌九日に至り又もや暴風襲

帆走直航距離四十
 五海里
 三月八日(曇)帆走
 直航距離三十三海
 里
 三月九日(曇)帆走
 汽走直航距離三十
 二海里
 三月十日(曇)帆走
 直航距離四十一海
 里
 三月十一日(曇)帆
 走直航距離二十八
 海里
 三月十二日(曇)帆
 走直航距離百十海
 里
 三月十三日(曇)帆
 走直航距離二十海
 里
 三月十四日(曇)帆
 走直航距離七十海
 里
 三月十五日(曇)帆
 走直航距離九十海
 里
 三月十六日(曇)帆

南極航記

來し、然かも風位頻りに變更し。船は爲めに或は南航し、或は西航し、若
 くは西北航すると云ふ風に頗る航海難を感じたが、これも十日朝に至
 つて和いだのである。
 十九日。朝來船員隊員一同は或は髪を刈り或は入浴を爲し。或は
 衣服を着更へ、其他行李などの整理を爲し頻りに立働いて居る。是は
 船が追々と新西蘭に近付いた爲めである。極地無人の郷に長らく生
 活して、身體の裝飾を閑却した連中が此日の晝飯の食卓に就いたのを
 見ると全く別人種になつた様な心地がした。
 翌二十日。午前十時。待ちに待つたる新西蘭南島の影を左上舷遙
 かに認めた。全員急に多忙を極めた。
 翌二十一日。午前。左舷五海里許りの處に、四分の一以上雪を戴だ
 くルイカー山脈を認めた。十二時頃海豚群は船側に來襲し、甲板は銃
 を持つ射手の群に滿された。其結果一頭を銃殺したので直に鉤を懸
 し綱にて引上げ、豫て腕に覺えのある山邊花守兩アイヌに執刀を托し、

走直航距離百十海
 里
 三月十七日(晴)帆
 走直航距離百四海
 里
 三月十八日(晴)帆
 走直航距離五十五
 海里
 三月十九日(晴)帆
 走直航距離百海里
 入港に就ての仕度
 三月二十日(曇)帆
 走直航距離七十九
 海里
 新西蘭を認む
 三月二十一日(晴)
 帆走直航距離七十
 四海里
 海豚群船側に來襲
 三月二十二日(晴)
 帆走直航距離五十
 一海里半
 ウェリントン港に
 投錨

南氷洋の再航

肉を取り皮は鹽漬とした。高川水夫の料理で肉を味噌料理として、味
 つたが久しく生肉に饑えたる一行は、此海豚の肉に舌鼓を打ち南極海
 豹の肉よりも更に美味なりと評し合つた。此海豚は長さ五尺に餘り
 皮の色も頗る美麗であつた。
 船は今日カイコーラ沿岸に沿ふて進航を續けて居る。
 翌二十二日。午前五時。右前方に北島のシーバリサーを認め、
 昨夜より北西の風にて進航を妨げられて居た船も、今夕中には灣内に
 入らんとして居る。
 翌二十三日。午前三時半。開南丸は長途の航海を終へ、久しぶりに
 てウェリントン港に錨を卸した。全員は最も多忙を極めた。
 朝來南東の疾風は細雨を伴ひて波が高い。午前九時水先案内船來
 り、檢疫所まで導かれて進む。十一時四十分檢疫を了し、檢疫官の好意
 により、尙棧橋五丁近くまで進む事を許された。其到着した時は丁度
 午後一時五分であつた。

三月二十三日(晴)
後(曇)
三月二十四日(曇)
後(晴)
三月二十五日(晴)
後(曇)
三月二十六日(雨)
三月二十七日(晴)
三月二十八日(曇)

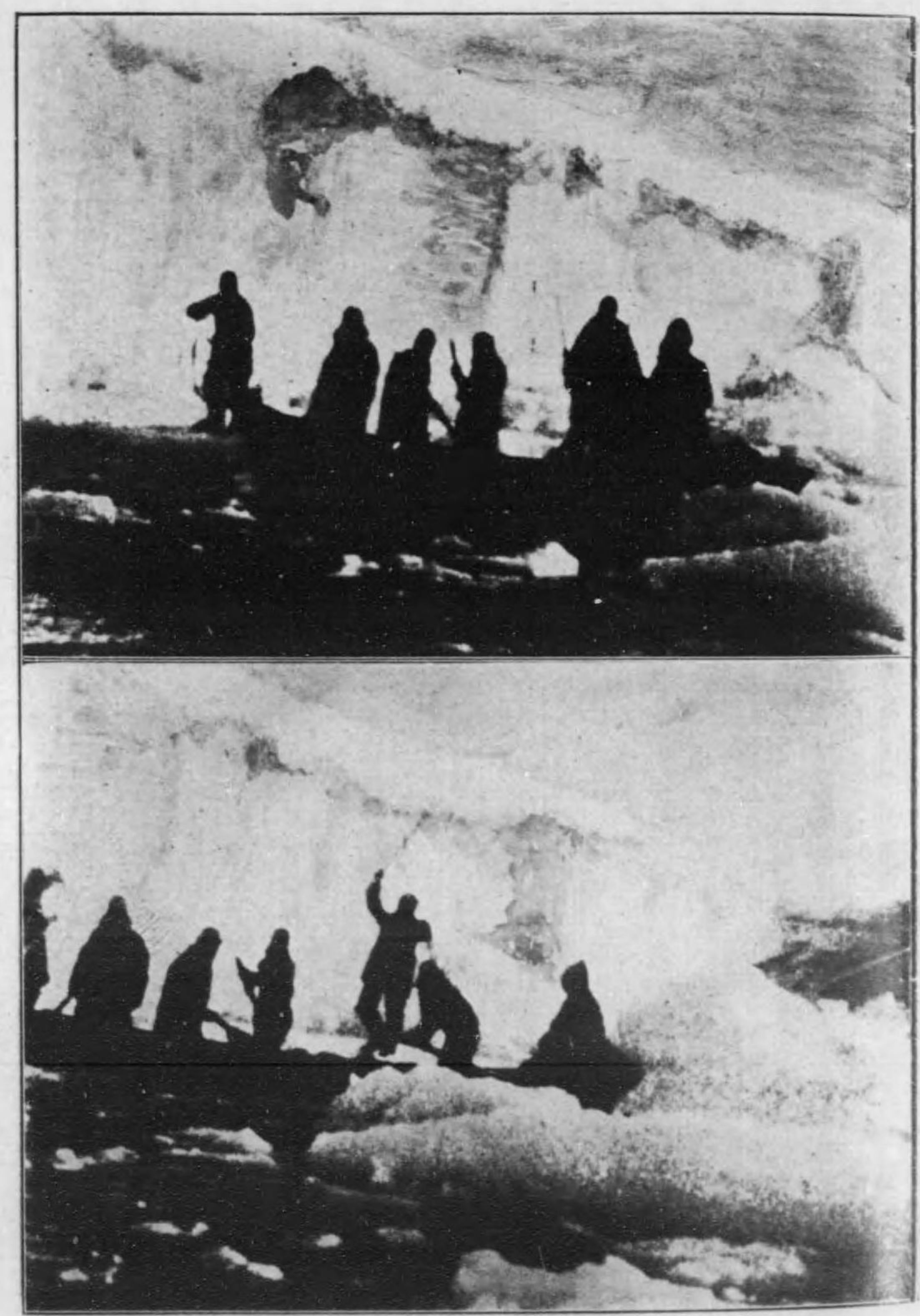
南 極 記

そこで検査官のランチを利用し、白瀬隊長、武田部長、池田學士、西川村松の諸隊員は手別けをなし、或は領事館に赴く者もあり、又は電信局に赴く者もある。それ／＼任務に就いた。三井所部長は山邊、花守兩アイヌを督して船内整理に従ふた。

此朝は一般に上陸を禁ぜられてあつたが、夜に入つて一同上陸を許可された。て隊員は思ひ／＼に市中に出掛けて其夜を過ごした。翌二十四日相變らず市中見物に費したが、其間船には當市の領事館員、新聞記者などが續々と押掛けて來た。

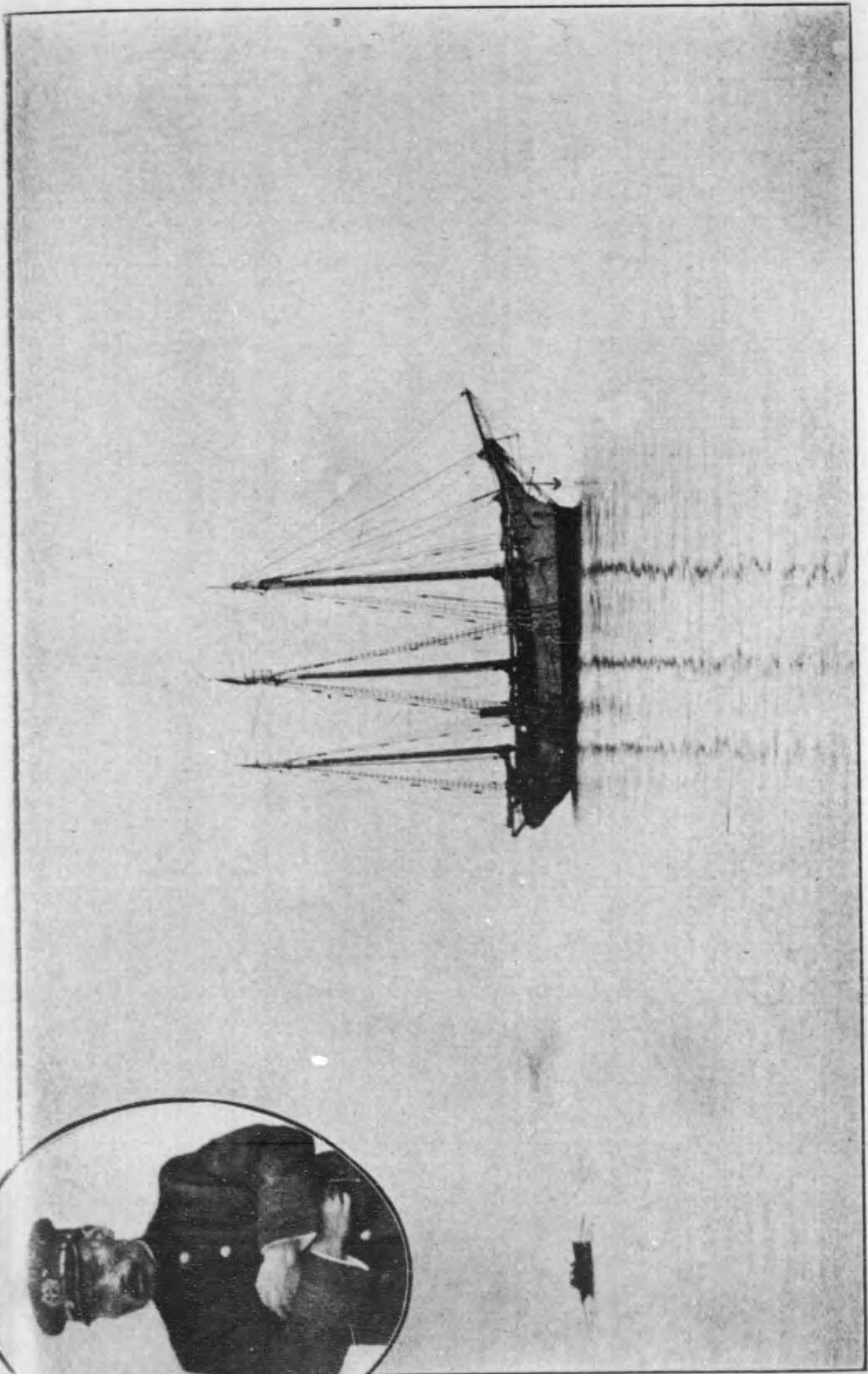
二十五日も同様有志婦人連などの訪問を受けた。二十六日朝來疾風に微雨を伴ひ何となく不穩の天候である。昨今の大洋は兎角荒れ勝にて船より波止場迄の短艇も波高き爲め往還に屢々飛沫を受けた。

二十七日も滞在した。翌二十八日隊長は一先づ此處にて開南丸と杖を分ち郵船にてシドニー經由歸國の途に就く事になつた。其理由



景光揚引灣鯨てに艇備、つけ遊を水流る來ひ襲
(土轉運屋土はる居け掛腰に尾船圖下)

明治四十五年二月四日撮影



南 水 洋 の 再 航

三月二十九日(曇)
三月三十日(曇)

三月三十一日(曇)

四月一日(晴)
四月二日(快晴)帆
走

は能ふべき丈速かに歸國して後援會を援助し船員給料隊員手當等を
作り置かんとするにある。此歸國人員中には武田學術部長池田學士
田泉寫眞技師安田木工等も加はつて居たが前三者は學術報告及活動
映畫調製の必要より後の一人は病氣保養の必要より歸る事と爲つた
のである。汽船の都合にて前記數人の歸國はいよ／＼三十日と決定
した。

翌二十九日は副食物の買入等にて船は多忙を極め其翌三十日は
隊長以下の歸國日として一同其準備に忙殺された。同一行の乗船はユ
ニオン會社のアオレンヂ號であつた。出帆は午後十時三十分に行は
れた。

明れば三十一日。隊長其他不在となりしより寢室の移轉等に終日
を費し又船長以下船員は明早朝出帆の爲め其準備に取掛つた。

所が翌四月一日に至り尙一日滞在する事と爲り二日出帆と變更し
た。聽て二日と爲ると近來稀なる快晴である。灣内殆ど油を流した

長閑な出帆日和
 四月三日(晴)帆走
 直航距離八十三海
 里
 四月四日(晴)帆走
 直航距離四十八海
 里
 四月五日(晴後曇)
 帆走直航距離五十
 一海里
 四月六日(曇後晴)
 帆走直航距離九十
 七海里
 四月七日(半晴)帆
 走直航距離三十三
 海里
 四月八日(晴後曇)
 帆走直航距離五十
 一海里
 四月九日(雨)帆走
 直航距離三十八海
 里

南極記

如く、水禽が愉快さうに遊んで居る。港の内外には快走艇の群が漸々と多くなり、艦で、開南丸の周囲を取圍んで見物して居る。如何にも長閑な出帆日和である。正午に至つて愈々出帆の汽笛を鳴らした。此日は海上極めて穏かであつたが、翌三日に至り北西の風がソヨン吹初めた。けれども幸に強風ともならず、四日も終日極めて長閑であつた。五日午後に至りポツ／＼又不良の天候となつた。然し幸に船の進行を妨ぐる程ではなかつた。久し振りにて船は次第に進航して、早くも四月十四日となつた。今日は傾斜頗る烈しく、折々船側に打上げる波浪は、甲板に躍り上り凄まじき音を發して居る。風は南西位にして、船は北北西を指さし、五海里乃至六海里の速力で駛んで居る。時々刻々船は、三年振の懐しき故郷に近附きつゝあると思へば、今尙三千九百餘海里の南方に漂ふて居る一行も、聊か意を慰むるに足るものがある。

翌十五日。午前十一時頃より南方に大鳥の純白色を呈せる者一羽

四月十日(晴)帆走
 直航距離六海里
 四月十一日(晴後
 雨)帆走直航距離
 九十二海里
 四月十二日(雨)帆
 走直航距離百四
 海里
 四月十三日(曇後
 晴)帆走直航距離
 百十三海里
 四月十四日(晴)帆
 走直航距離八十四
 海里
 今尙三千九百餘海
 里
 四月十五日(風雨)
 帆走直航距離百四
 十六海里
 四月十六日(曇)帆
 走直航距離百二十
 九海里
 鳥賊甲板に飛込む
 四月十七日(曇霧)
 帆走直航距離百七
 十七海里
 四月十八日(曇霧)

南氷洋の再航

を見たが、翌十六日は鳥賊の五寸許の物が甲板に飛込んだので、早速刺身にして食卓に上した。

翌十七日。船は快く帆走して居る。船長は今宵若くは明拂曉は東經百七十度弱南緯二十度十分の地點に在る佛領アネリウ島を見る筈であると言つた。て、船長初め見張りの船員等は、眼を放さず前方を注視して居る。然し今日は朝より霧深く、氣温蒸熱く、湿度は九十度以上に至り、海上は一海里以上を透視する事も出来ぬので、甚遺憾であつた。

翌十八日。午前六時果して船長の言の如く彼の島を認められた。島は右舷一哩の距離にあつたが、依然として霧深き爲め三分の二以上の頂は見えない。然し其形状は鈍鋸齒状をなすのを見ると、疑もなく是は火山岩より成れる島である事が知られた。

十九日午前八時頃より氣壓計は斜角を示したが、十一時四十分、七五三を示し暴風雨は間もなく來襲した。午後二時頃に至り異様な音響が甲板上に響いたので、何物ならんと赴き見れば、帆桁が暴風の爲め

帆走直航距離百八十五海里
 四月十九日(暴風) 帆走直航距離百四十七海里
 暴風の爲め帆桁を折らる
 四月二十日(曇後晴) 帆走直航距離百五海里
 四月二十一日(晴) 帆走直航距離五十四海里
 四月二十二日(晴) 帆走直航距離四十七海里
 四月二十三日(晴) 帆走直航距離三十六海里
 佛領サンタクルー島を見る
 四月二十四日(晴) 帆走直航距離三十六海里
 四月二十五日(曇後晴) 帆走直航距離百三十七海里

南極記

に破砕したので、船員一同應急工事の作業をして居るのであつた。兩三日來の天候を危み夜も帯を解かず、唯海圖室にて、腰掛の儘、假睡中の船長も此物音に夢を覺し、今や必死に應急修理を爲しつゝある。

昨今船室の温度は華氏八十四度二分である。襪衣又は浴衣一枚にても尙蒸熱く覺える。

四月二十一日室内温度華氏八十六度である。一同は昨今室内の餘りに暑さに窮し、甲板に出で來りて涼を取り、睡に就くは、概ね午後十時過ぎであつた。

二十四日船は南東の風を受けて快走して居る。速力四海里乃至五海里である。午後船長は海圖を示して一島嶼を指さし、是は佛領サンタクルー島である。島内には所々に部落あり、酋長ありとの事なるが、住民の性質不明なれば、迂濶に上陸は出来ぬと云ふた。之より以後海上は毎日無事にて、船は只豫定の航路を豫定の速力を以て進航しつゝあるのみである。

四月二十六日(晴後曇) 帆走直航距離百二十海里
 四月二十七日(曇又晴) 帆走直航距離百二十海里
 四月二十八日(晴) 帆走直航距離九十八海里
 四月二十九日(曇後晴) 帆走直航距離十一海里
 四月三十日(晴) 帆走直航距離七十五海里
 南極の垢を洗ふ
 五月一日(晴) 帆走直航距離八十八海里
 五月二日(晴) 帆走直航距離六十一海里
 五月三日(雨) 帆走直航距離二十海里
 五月四日(晴) 帆走直航距離五十五海里

南氷洋の再航

五月一日は來つた。此日猛烈なる驟雨が來たので、隊船員は皆裸體になつて甲板上で水浴を試みて居た。六頭の犬も久しく洗滌しないので積れる南極の垢を洗落して呉れて居た。然るに突然霹靂一聲耳を劈き眼を射る如き雷鳴が起つたので、一同思はず臍を抱へて室内に馳込んだ。尤も船には不完全ながら避雷針の設備もあるが、數回に涉り電光雷鳴の凄じきには少なからず一同喫驚した。

今朝より西南の輕風吹來り、船は遅々として帆走して居る。回顧すれば去年の今日は恰もシドニー、ジャクソン灣入港の記念日であるから多少の感慨なきを得ない。今日は近來にない好い風であつた。翌二日は東の輕風であるのと潮流等の關係で、船は殆ど現位置を保つて居る。帆船の身に取つては近來の如く風力の勢いには困る。日没より南南東の方位に當り、奇怪なる黒雲起り。聽て驟雨の來襲となつたが、二時に至り、雲忽ち散じた。此日午後四時三尺ばかりのレーラ、魚四五尾宛各々群をなして、船側に現れたので、大勢の者は或は銛或

五月五日(晴後曇) 帆走直航距離七十海里
 五月六日(曇後晴) 帆走直航距離八十海里
 五月七日(晴又曇) 帆走直航距離八十八海里
 五月八日(曇) 帆走直航距離六十四海里
 五月九日(曇) 帆走直航距離四十六海里
 五月十日(曇後晴) 帆走直航距離六十三海里
 五月十一日(曇) 帆走直航距離四十八海里
 五月十二日(曇後晴) 帆走直航距離四十二海里
 五月十三日(曇又晴) 帆走直航距離四十二海里

南極記

は釣針などを持出して百性一揆の如く騒立つた。然し何物も獲なかつた。
 廿二日。午後一時十分「船だ」と叫ぶ聲が甲板に聞える。一同何事ならんと出て見ると、遙か北方の水平線上に、何物かが黒烟を吐きつゝ往く。船長は、「あれはマリアナ群島方面に赴く定期船であらう」と言つた。海上で船に遇ふ事は尋常茶飯の事ながら水や空なる渺茫たる海上に何一つ眼を遮るものもなき時にあつては、平凡なる汽船の影も一つの慰みである。
 爾來無事の航海を續けて六月四日となつた。船は北北東の風を受け、東方に向つて汽帆兩走を續け午前十時小笠原群島の母島外二三の島嶼を七哩許り左舷に見て進航して居る。午後に至り母島は益々眼界に近づき來り、西の方に手に取る如く見える。明朝此島に寄るべき由を語りつゝ、船長は船員を獎勵して居る。其中に父島も遙に現れた。

五月十四日(晴又曇) 帆走直航距離五十六海里
 五月十五日(曇又晴) 帆走直航距離九十五海里
 五月十六日(曇又晴) 帆走直航距離七十七海里
 五月十七日(曇又晴) 帆走直航距離百三海里
 五月十八日(晴) 帆走直航距離百五海里
 五月十九日(晴) 帆走直航距離八十八海里
 五月二十日(晴) 帆走直航距離百二十四海里
 五月二十一日(晴) 帆走直航距離九十三海里
 五月二十二日(晴) 帆走直航距離百十五海里
 五月二十三日(晴) 帆走直航距離百十五海里

南洋の再航

母島と父島の間は十八海里である。
 翌五日。午前七時父島と開南丸とは三哩許りの距離となつた。斯くて次第に徐行を續け、遂に午前十一時四十五分二見港内に投錨した。午後一時半検査を終り、第二虎丸に導かれて、それ／＼部署を分け、上陸して、島廳に往く者もあり、買物に往く者もあり、中／＼の多忙であつた。夜半頃より二回驟雨來襲したが、久方振りに上陸して睡眠し、非常な安眠を貪り得た者もあつた。
 翌六日は雨であつたが、小笠原島青年會の代表者並に、同島小學校長職員等來船し、盛に謝辭を述べし上、探検隊の萬歳を三唱して呉れた。此日は雨中ながら上陸を試み、熱帶果實の新鮮なるを味ひ、一同は絶えて久しき野菜の缺乏を補ひ得たので胃腑は大に満足を表した。
 翌七日は船長並に隊員、船員一同、同島の有志者より招かれて扇ヶ浦の小學校に赴き、南極探検の講話を爲せし上、同島有志者主催の歡迎會に出席して各自十二分の歡を盡した。

叫ぶ聲
五月二十三日(晴) 帆走直航距離六十七海里
五月二十四日(晴) 帆走直航距離百十三海里
五月二十五日(曇) 又晴) 帆走直航距離四十八海里
五月二十六日(晴) 帆走直航距離九十二海里
五月二十七日(曇) 又晴) 帆走直航距離百五十八海里
五月二十八日(晴) 後曇) 帆走直航距離六十三海里
五月二十九日(晴) 帆走直航距離三十三海里
五月三十日(晴) 帆走直航距離四十海里
五月三十一日(晴) 帆走直航距離六十海里

南極記

翌八日も又講話若くは港内の見物に費された。
九日の午前十時愈々此島を出帆する事と爲つた。同島の有志は、三艘の船を雇して送つて呉れたが、此日は風位の爲め竟に出帆を翌朝まで延期することゝなつた。
明れば十日午前八時十分。漸く真に出帆し得る事となつた。其時濱邊には小學校の職員生徒、島廳の吏員有志等數百人、旗を押し立てて整列し、一齊に開南丸の萬歳を祝した。開南丸は汽笛を以て之に答禮し、徐々と港口に向つて進んだ。萬歳の聲は尙止まぬ。斯くて船は進んで正午過ぐる頃島を離れたが、夕刻には父島より約四十海里、兄島を東五海里許りに見る地位にまで到達した。
夕刻よりは風が風だのて船が殆ど現位地を離れない。此時は西北の微風であつたが、十一日漸く西西北に轉じ兄弟島の中央二哩附近の處を通つた。此頃より風位の爲め汽走を開始した。
十二日。東南風吹き午後より氣壓計少しく下り始めた。バラ／＼と

五海里
六月一日(晴) 帆走直航距離七十八海里
六月二日(曇) 帆走直航距離八十海里
六月三日(曇) 帆走直航距離七十五海里
六月四日(晴) 直航距離四十八海里
小笠原群島眼界に入る
六月五日(晴) 父島に碇泊す
六月六日(雨) 六月七日(晴) 小學校に於ける探検談
六月八日(晴) 六月九日(曇) 六月十日(晴) 帆走直航距離十二海里
六月十一日(曇) 帆走直航距離三十海里

南洋の再航

微雨降り、纏て風位は正東に轉じ、更に東北に轉じ船は傾斜甚しく、天候頗る危ぶまれた。然し十三日に至り風位變じ拂曉より一天名残りなく晴れて東並に東北の風に送られて駛走して居る。然し全體から云へば船の進航が餘り抄々しくない。
朝七時。七八哩の前方に鳥島を見たが夕刻には東方約四哩許りの地點に之を見た。
翌十四日も依然として船は進まない。漸く鳥島が四五哩許り後方に見える位に進んだに過ぎぬ。
其頃より全體の船員はペンキ塗替其他の裝飾に着手した。
元來鳥島は岩石を以て蔽はれし島にて海岸は頗る險阻なる斷崖である、其斷崖より赤褐色の土質が見えて居る。西側は頂上より海面まで草木なき禿地であるか、是は重に前年噴火の際溶岩を流した痕跡のやうである。
十五日矢張り東の輕風で青ヶ島を望んで進んだが夕刻同島を東一

六月十二日(雨)帆
走直航距離七十四
海里
六月十三日(晴)帆
走直航距離七十四
海里
六月十四日(晴)帆
走直航距離五十八
海里半
六月十五日(曇)帆
走直航距離六十五
海里

南極記

哩の方向に眺めた。熟視するに此島は全島殆ど草木を以て蔽はれ宛然青毛氈を敷詰めたやうである。青ヶ島の名は之から起つたものであらう。唯西方の一部が開拓されなだけで、其他は草木が井然として栽培されて居るやうに見える。人家も其間に点在して居る。夕刻より一天俄に擾曇つた。今迄鮮かに眺められて居た青ヶ島は南方の雲に鎖されて終い。唯左方に八丈島の三原山、西山、小島等が微かに青黛色を呈して、北方の雲上に聳えて居るだけである。十六日は南東の輕風である。昨夕八丈島が八哩許りの東にあつたが、此方位には今や御倉島が恰も盆に載せた餅の如き形をなして見え居る。午後四時半より三宅島を右に、新島を左に各々呼べば應へん許りの距離に見て進んだ。午後六時此處を通過した。前方には雨中の大島が濛朧として見えて居る。今日は午後四時頃より降雨と爲り、夜に入つては盛に降り頻つて居る。

燈臺の光も見えぬ
眞の闇
六月十六日(曇後
雨)帆走直航距離
百三海里

推進機空轉

南氷洋の再航

午後八時十分船は猛雨の爲めに大島沖を通過することが出来ない。一旦船首を同島の東南隅に向け、内海から通過することに定め、而して同九時針路を西南西に轉じた。此夜密雲天を鎖し、細雨肅々として降り、黑白も分かぬ眞の闇である。斯かる時、航海上唯一の頼みは燈臺であるが、其生命とする燈臺の光は更に見えぬ。爲めに船員の苦心は一ト通りではない。明ければ十七日午前六時頃甲板は俄かに騒々しいので、總員は急遽として驅付けた。見ると右舷密雲の隙に現はれ居るのは、正しく沿岸である。併しそれは島嶼であるか陸地であるか、不明である。而して其一方は灣形を示し、其灣邊に二三の黑影、それが人の影の如く見えて居るが、何分遠望であるから何うも判然しない。今海上は、山陰の爲め無風なるのみならず、三角波頗る高く、推進機は、ともすれば空轉する。斯くて船體は、刻一刻波に揉まれ、沿岸の方へと運び込まれやうとする。即ち船體の危険は、次第に急を告げるや

神風とや云はん

南極の記

三年振りに見る富嶽の絶頂

うになつて来た。此時船長は最早避難の策盡きたりと見て取り、火急に投錨の準備を整へしめた。太き錨網は何十尋となく、錨の傍に束ねられてある。開南丸の運命は最早寸秒の間に決せられやうとした時、其刹那！天公未だ我を見棄てず、神風とも云はんか、今までの無風に引變へ、一脈の微風は忽然として吹き起つた。
「ソレ帆だッ」と、船員は急に活氣付き、直ちに帆を張り、同時に之に應じて汽鐘は全速力を出し、こゝに帆力と汽力との有らん限りを盡し、遂に二時間の悪戦苦闘を経て、辛ふじて船體坐礁の危難を免かるゝ事を得た。全く九死に一生を得た次第である。
斯くて、船は沖合に出たが、漂流すると約十時間に亘り、漸く深霧の中に、一髪の陸影を認め得た。之は伊豆の東岸であると認定せられたが、確定が出来ずに半信半疑の處へ宛も午後六時二十分に至り、懐かしき山頂——それは三年振りに見る富嶽の絶頂——を天半に仰いだので、之れて始めて凡ての位置を確然と知ることが出来た。

漸く蘇生の思ひあり

南氷洋の再航

六月十七日(暴風雨)帆走汽走直航 距離四十八海里

後にて船長の發表せる調査報告によると、今朝危険に遭遇したる彼の地點は伊豆の稻取岬であつた。それにより一同は扱ては前夜闇中の航海に於て、潮流の爲めに流されたのであつたかと、今更の如く疎然とした。
船は進航中ではあるが、海霧密にして、船首の位置も判明せず、寒心の至りて、船長殆め船員等は、密かに眉を蹙めて、不安の前進を續けて居るうち、午後三時半に至り「島だッ」と叫ぶ聲に、一同蘇生の思ひ爲した。此れは即ち上記の伊豆東岸であつたのである。
此日氣壓計の最低度は、午前九時半の七百五十三耗て、全十二時頃より少しく恢復の兆を示した。而して午後六時に至り、風のみは和らいた。唯だ波浪は依然として荒れ狂うて居る。
翌十八日に至り、前日來の暴風怒濤は大に平穩に歸し、曇天ながら時折日光は雲間を洩れた。今朝船は大島を東方に近く見相摸の陸影を西方に遠望しつゝ、館山港に向ひ汽帆兩走を以て急航して居る。併し

鷹嶋附近に假泊す

六月十八日(曇)帆
走直航距離廿五海
里

南 極 記

生憎の逆風なので、船は已むなく連針航法を執つて、午後四時十五分漸く館山灣外の鷹島附近に投錨した。

だが何分検査未了の爲め上陸を許されず、唯だ船長と館山出身の藤平機關士との二名のみ、上陸の特許を得た。此時陸上より堀内事務長は後援會代表者として出迎へ、武田部長は隊長代理として出迎へ、其他出迎人は、北條町有志澤安房郡長、加藤北條町長其他であつた。

翌十九日東方の微風は追手であるが、三海里の汽走とて殆ど帆の用を爲さぬ、午前九時船長歸船するや、間もなく抜錨に際し、陸上より訪問者相次いで至り、互に一別來の健康を祝し合ふうち、定刻となつたので、汽笛一聲船は横濱港指して進航したのは、午前九時三十分であつた。

此際全灣碇泊中の第一報効丸より、萬歳は叫び出された。開南丸と此船とは、以前報効義會の姉妹船であつたので、非情の船舶も心あらば感慨を催ふした事であらう。

午前十一時五十二分、港口を出てんとする時、軍艦鞍馬の橋頭に、信號

勇ましき萬歳の聲

南 水 洋 の 再 航

を掲揚した。船より望遠鏡を透して凝視したが、風弱き爲め旗布垂下し、其信號判明せず、斯くと知りたる鞍馬は、態々船に近づいて迂回し、總員登舷して帽子を打振り、勇ましき萬歳の聲を浴びせた。

午後一時十分、觀音岬の燈臺より、汝は運び得るやの信號旗は掲揚せられた。此時逆流頗る強く、進航遅々として居たのである。全燈臺よりは、次いで再び信號旗を掲げた。其文字は、汝の成功を祝すと云ふのであつた。

開南丸の着陸が遅いので、之に先だつ數日前より後援會幹事村上濁浪氏は、横濱の西村旅館に出張して待つて居たが、丁未俱樂部の寺田四郎、栗山博、加藤正人、猪毛利、榮都、築懋、鎮の諸氏も又來つて大に斡旋する所があつた。然るに今や開南丸は無事館山に到着して、本日横濱へ入港と確定したので、午後四時、艇に乗つて迎へに出た。田中舍身、佐々木照山等の後援會幹事も又港務部の汽船に乗つて迎へに出た。午後四時三十分、開南丸の英姿は堂々波を切つて、港内に入り來つた。橋頭高

開南丸横濱港に入

六月十九日(晴)

南 極 記

く探検旗と日章旗とを翻しつゝ入り來つた。萬歳萬歳の聲は海を動かして起る。波止場は皆人を以て埋まり、其人々の口よりも雷の如き萬歳の聲は叫び出された。午後六時、船は港内第一區に投錨し一行悉く西村旅館に入つた。茲には野村夫人、土屋夫人、東京各新聞記者諸氏等も居て絶えて久しき對面に互に無事を祝し合つた。探検勇士の面上には一種言ひ知られぬ喜悅の情が動いて居た。出迎者の顔にも無論満足の念が漲つて居た。

聽て十九日は暮れて、廿日の朝は來た。此日は愈々芝浦埋立地に於て歡迎の式を行ふ日である。午前十時、開南丸は徐ろに碇を捲いて横濱新港を出帆した。日本郵船會社の汽艇は防波堤まで見送り呉れた。此時恰も汽船春日丸は歐洲に向つて同港を抜錨する時であつたが此偉大なる使命を果せし開南丸が同船に近く進みし時、同船の甲板には身に綾羅を纏へる美人が數名現はれて此方に向ひ紅のハンカチを打振り萬歳を唱へて呉れた。斯くて開南丸は南十字星の探検旗を折

懐舊談にて持ち切る

南 水 洋 の 再 航

からの朝風に翻しつゝ、懐しき東京の天を指して進行した。船中には佐々木、田中、村上等の諸幹事及び此事業に最も同情厚き東京其他の新聞記者諸士が乗つて居たが談は知らず、一昨年十一月の出發の際の事に及んで最も痛快に當時の事を談論して居た。聽て甲板の上には南極圏まで往復せしと云ふ米の響應があつて。同上の註釋附の牛肉罐詰、調味噌等の馳走があつた。一同不味いながら舌鼓を打つて食ふた。聽て羽田の沖に達するや、汽艇一隻矢の如く進行し來り、紅白の旗を打振り開南丸の安着を祝すと信號した。之は水上署の快進丸であつた。第三臺場の傍より十二の櫂を有するカツタは勢鋭く此方に向つて漕ぎ寄せた。萬歳の聲は海に響いて、時ならざるに鷗を驚かした。之は是れ商船學校の生徒である。聽て又早稻田大學の歡迎船來り。水難救濟會の歡迎船、攻玉社の歡迎船、其他數十隻の歡迎船が來つて、各々萬歳を絶叫して呉れた。やがて芝浦埋立地なる歡迎式場の前に到れば、ズドンと一發勇ましき音が空に聽へて、美事なる煙

火は一行が無事の到着を祝した。それと同時に船は陸岸を距る五間位の地に碇を卸した。

三井所衛生部長はウエリントンより品川灣まで隊長代理として、開南丸に留まりし關係より幾多の苦闘に色も褪せし探検旗を先頭に、陸上隊員を引率して上陸した。之に續いて野村船長は百折不撓の面貌に喜悅の情は掩はんとして掩ふ能はず、高級部員及船員等を引率して上陸した。雲か霞か人を以て埋みし幾萬の群衆より萬歳の聲は百雷の一時に落つるが如く地を搖かして起つた。南極探検後援會長大隈伯は是等の群衆に擁されつゝ、此處に出迎へ居られたが、一行の無事歸り来るを見て喜悅の情禁ずる能はず、其不自由なる體軀を運んで熱心なる握手を與へた。野村船長三井所衛生部長其他一同歡極まつて覺えず涙を垂れた。其中に又も萬歳／＼の聲は起つた。聽て一同高く設けられたる式場に向へば、同所には肝付中將、頭山滿氏、徳永博士及後援會幹事、三宅雪嶺、押川方義の諸氏も集まり一行を待つて居る。群衆

中特に目を惹きしは早稻田、慶應、明治、日本中央、法政の各大學生、攻玉社、高輪芝錦城等の各中學生、一萬有餘の列であつたが、今一行の場に入るを見るや手に手に南星の小旗を打振り、聲勇ましく探検隊歡迎の歌を謠つた。聲音を帯び其聲は本邦男兒の意氣を表はして、壯烈鬼神を泣かしむるに足るものがあつた。

一同席に着くや大隈伯は立つて群衆に演説した。「國民が久しく憂慮したりし我が探検隊も兎に角大略の目的を遂げて歸國した。此舉たる當初に於ては尠からず世人の嘲笑も買つたが僅々二百四噸の小船を以て海路三萬哩の大航海を遂げ、船として達し得べき最南の地點まで達し、氷海の航海に於て少からざる經驗を得て歸つて來たと云ふことは日本航海史上に特筆大書すべき事であると共に陸上に於ては鯨灣と、エドワード七世州との兩所より上陸し能ふべき丈の探検を遂げ歸つて來たと云ふ事は我國の歴史に於ては嘗て無かつた極地探検なる事を爲し得たもので誠に喜ばなくてはならない事である。殊に

此遠征たる一人の生命をも損せず無事此處に歸着し得たと云ふ事は實に人間の體力と精神力との偉大なるを示すもので、事の茲に到りしについては誠に此事業に同情し呉れし日本全國民に向つて感謝せねばならぬ次第である」と演べ少ならず群衆を感動せしめた。之に續いて三宅雪嶺、田中舍身、村上濁浪、佐々木照山、栗山博諸氏の演説あり、最後に白瀬隊長、野村船長等の答辭があつた。斯くて大隈伯の發聲で天皇陛下の萬歳を三唱し、數萬の群衆は之に和し歡呼聲裡に式を閉ぢた。それより隊長、船長等は隊員、船員一同を率ゐて、二重橋外に至り整列して最敬禮を行ふた。

隊長は此時恭しく奉告文を朗讀した。時正に午後五時半であつたが、此時一方では栗山丁未俱樂部幹事の斡旋で提燈行列が催された。集るものは早稻田大學、中央大學、法政大學、明治大學、早稻田中學、其他の五六校で午後六時より續々日比谷公園に集り、準備せし五千五百個の赤提燈は日比谷公園の空に映じて美しく、其れに従ふものは無慮一萬

餘人探檢隊歓迎の歌を謡つて練り出した。向ふ所は二重橋外の大廣場である、同所に着するや學生群衆は恭しく其所に整列して提燈指揚げ謹んで天皇陛下、皇后陛下の萬歳を三唱し奉つた、其聲雲の上にも達せしにや、今まで點じあらざりし二重橋外の大アーク燈點せられ忽ち秋夜の名月の如く照り輝いた。一同は深く大御心に感涙を流しつゝ、最敬禮の後、順路鍛冶橋、壘町、新道路を経て京橋電車通りを進み行く。折柄降り出せし雨は探檢歌を謡ひつゝ進む此一行を少からず惱ましめたが、それにも屈せず、提燈差揚げ雨を衝いて進行する光景は最も勇しきものがあつた。行列は應て日本橋、今川橋を通り、須田町、廣瀬中佐銅像の前まで來たが此處にて一同勇ましく萬歳を唱へて解散した。

翌廿一日は白瀬隊長、野村船長等、隊員、船員一同と共に大隈邸を訪ふて無事歸朝報告の式を擧げた。三宅田中、村上、佐々木等の諸幹事も參集した。此時伯爵は既往滿二年間に於ける非常なる苦辛は昨日の國民的大歡迎に因つて報ひられたる感がある。國民も此事業によつて、

探檢の眞價を了解するに至りしは喜ばしきことなり、只今後に望む處は更に奮勵努力して有終の美を濟すに努むべきである。と述べ、田中舎身氏は人間は逆境の時は過失少くして順境の際には反つて過夫多し、今日の盛名が持續するや否やは諸君が今後順境に處する心掛の如何によつて決す、深く身を慎みて名を汚す勿れと訓戒した。白瀬隊長は誓つて伯爵閣下と田中幹事等の訓戒に背かざるべき由を述べて答辭とした。此時伯爵夫人は此席に入り來られた。すると隊長等は出發の際賜はりし御守及びチョコッキ等に就きて深謝せしに、夫人も喜びの顔色を以て一同に對せられ、之より各神佛に御禮詣りに往くつもりですと語られた。此席へは樺太アイヌ花守新吉山邊安之助等も列して居たが、花守は大きな手に南極鷹の片羽を新聞紙に包みたるを持ち、これは自分が極地にて得たるものなればとて、恭しく伯爵夫人に贈呈した。夫人は限りなく此無邪氣なる贈物を喜んで受納せられた。廳で庭内に於て記念撮影後伯爵の萬歳を唱へて散會した。

第七章 最初の探檢

抑も南極探檢の事業が普く社會に紹介されたのは、實に明治四十三年七月五日錦輝館に於て發表演說會を開いた時に淵源するのである。其の詳細は卷末に附した南極探檢後援會の經過に述べてあるから茲には略すが兎に角、此前古未有の事業は白瀬中尉が再三の懇請に因り、同事業の爲め錦輝館に於て發表演說會を開き、田中弘之、佐々木安五郎、櫻井熊太郎、押川方義、三宅雄二郎の五氏は後援會幹事に村上俊藏氏は同専任幹事に任じ、大隈伯爵は南極探檢後援會長の位置に就き、白瀬瀧氏探檢隊長に任じ、始められたのである。其より後滿天下幾多新聞社の同情朝日新聞社の募金上に於ける盡力等に依りて急速力を以て發達したのである。最初用船問題に就きて幾多の苦心を嘗むるも得る所なかりしが、竟に郡司大尉より第二報效丸を買入れ、東郷大將之に

開南九と命名す之を用ゆる事と爲り、十一月末を以て出發し得るまでの運びに至つたのである。之より前探検隊の支部を深川區熊井町に設け、白瀬中尉は此處にありて隊員の募集携帶品の買入等に從事して居たが、之が狹隘を感じたので、更に芝區なる芝浦埋立地に移つて盛んに出發準備を急いで居た。用船の修繕工事も済んで愈々出發の期日も決定したが、其決定した出發期日は十一月二十八日である。

十一月二十六日正午より後援會長大隈伯の厚意に因り早稻田の伯邸に於て、南極探検隊員一同の告別式が行はれた。白瀬中尉以下之に赴いた。式場は庭園に面せし日本室の大廣間、玄關前で告別記念の撮影を終ると直に式は開始された。隊長は陸軍中尉の制服であるが他の隊員は新しい制服制帽である。二人のアイヌ人が偉大なる體格だけに一番目立つて立派に見える。一同の席が定まると、大隈伯は令夫人綾子女史を隊員に紹介された。夫人は鬼とも取組み兼ねまじき面

構への連中に向つて温情籠る送別の辭を述べて後豫て用意せし三筒稻荷の守札を縫込みたる真綿のチヨツキを渡された。伯爵は續いて松木男爵より特に依頼し來りし伊勢太神宮の神御衣の守札を一同に手渡された。今度は夫人がスル／＼と各隊員の前に進み朱塗の木杯に満々と酌をされた。流石頑健無類な隊員も、伯爵夫人自らの厚き待遇に感激したが、鐵の如き手に支へ持つ其木杯がブル／＼と震ふた。中にも二人のアイヌ人は生れて始めて祖國の貴婦人に接して而も手づからの酌に驚き恐れて、さらぬだに大きい兩眼をキヨロ／＼させて居たが、感極まつてかハラ／＼と落涙した。此アイヌの感涙を見たる滿堂何れも引き入れられてか、密かにハンケチを取り出す人もあつた。殊に血氣盛りの丁未俱樂部學生諸士は悲壯の光景に胸迫つて顔を背けて居た。斯くて伯爵は一同へ向つて一場の訓示的告別の辭を饒し白瀬隊長答辭を述べ、萬歲聲裡に式を了つた。之より日比谷公園に催さるゝ送別式があるので、一行は名残り惜しくも直に伯爵を辭し去つ

南 極 記

此の目出度日!

同日午後三時日比谷公園音樂堂前式場に於て、熱烈なる國民的送別會は催された。大隈伯爵邸を辭したる一行は、此處へ直行したのだ。見渡す所音樂堂の前には南面して式場が設けられ、青々たる杉葉紅白の幔幕が小春日和の柔らかな日光に輝り榮えて見るからに平和な此の式場も、愈々三時の開會と共に悲壯の凄氣に滿された。隊員は白瀬中尉を前にして廿七名ズラリと式場の正面に腰を下す、待焦れた群集は一時に「萬歳!!!」と動搖めき渡る。後の方からは「ヤー素敵だ、豪いぞッ」と一行の新しい制服制帽姿を祝ふ聲も響く。一同の席が定まると佐々木照山君の巨軀が壇上に現れ、例の聲一番諸君!!! 一行が此度出發せんとする廿八日は恰もマゼランが太平洋を横斷した首途の日である。此目出度い日に吾が白瀬中尉以下の壯舉を送るのは實に幸先きが好いてはないか」と吼ゆるが如き開會の辭を了れば今度は五分間の飛入演説を許した處、忽ち登壇したのは早大の稻田直道日本力行會

最 初 の 探 検

の南波秀雄等の青年諸士は何れも熱烈悲壯の氣を吐いた。之が終ると、次は小川運平田中舍身の二君が萬丈の氣焔を吐いて此行を壯にする。其次に一風變つた人物が現はれたと思ふと、之は魚河岸に今一心太助と謳はるゝ名物男坪野房次郎と云ふ江戸ッ兒である。今一心太助は五つ紋の袖を捲り、小氣味好い江戸ッ兒式の氣焔を吐いて壇を下つた。夫から幾人かの演説あつて後午後四時三宅博士は會長大隈伯の代理として南極に埋没して歸るべき銅箱と極地の天に懸すべき日章旗と探検旗とを白瀬隊長に渡す。銅箱は一尺五寸に八寸位の堅固なもので中には義金者の姓名を記入した物を入れてあるのだ。二旒の大旗が群集に向つてパツと廣げらるゝと萬歳々々とさらぬだに熱狂した人々は喚呼狂奔する。伯爵の告別の辭は櫻井熊太郎氏が讀上げた。白瀬中尉は答辭を讀んだ。隊員も群集も來賓も一種悲壯の感慨に打たれて謹聴した。夕陽の光りは物凄く此光景を斜に射て熱したる人々の顔には送る者にも送らるゝ者にも一種の相關聯したる

二重橋外に奉告文
を捧ぐ

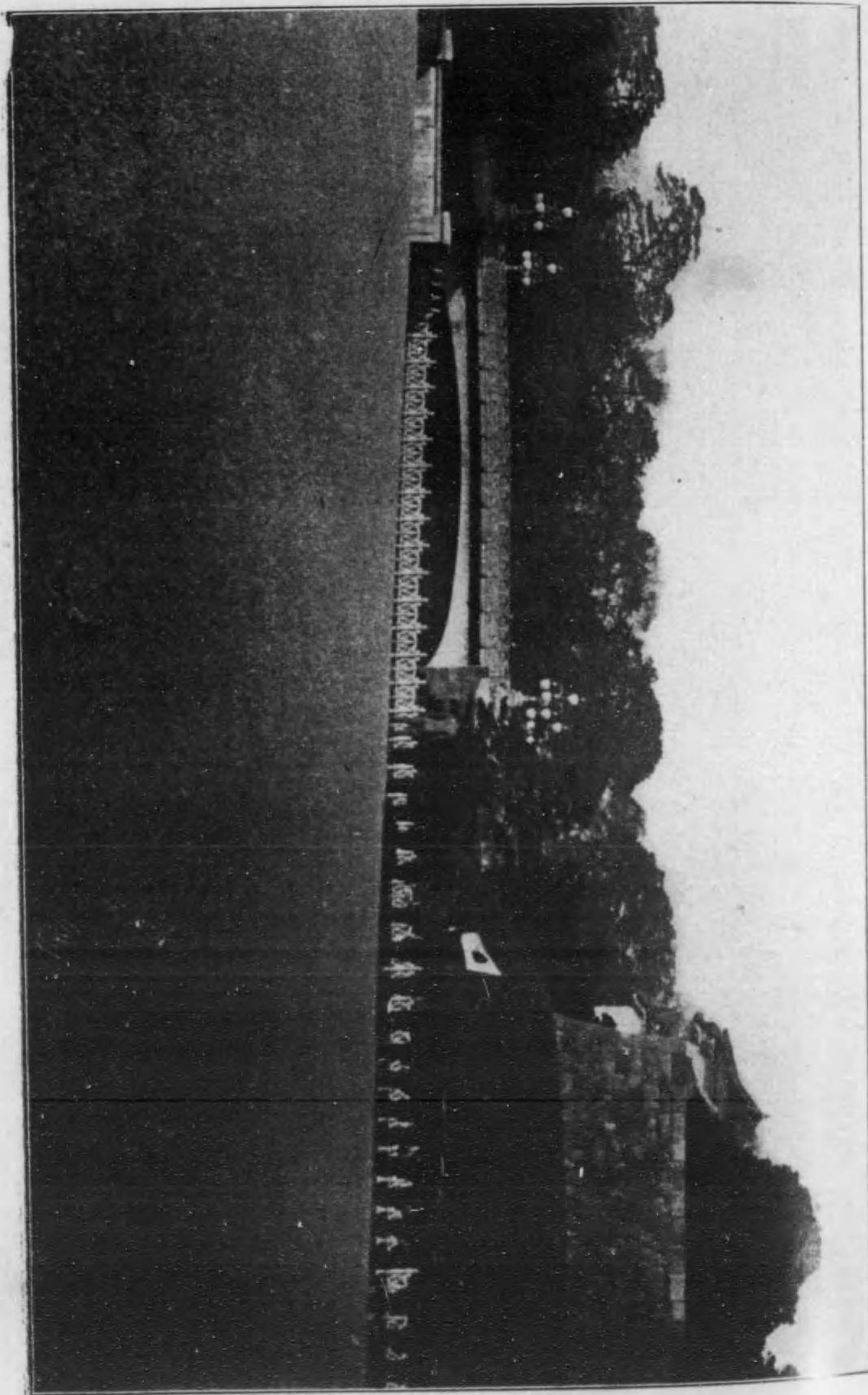
南 極 記

感情が脈々と相通つて居る様に思はれた。越えて二十八日午前七時
隊員一同は凜然として歩武肅々、白瀬隊長に率ゐられて丸の内二重橋
前に伺候した。先づ整列して、恭しく最敬礼を終ると、隊長白瀬中尉は
列を離れて三步を進み奉告文を捧げて朗讀した。

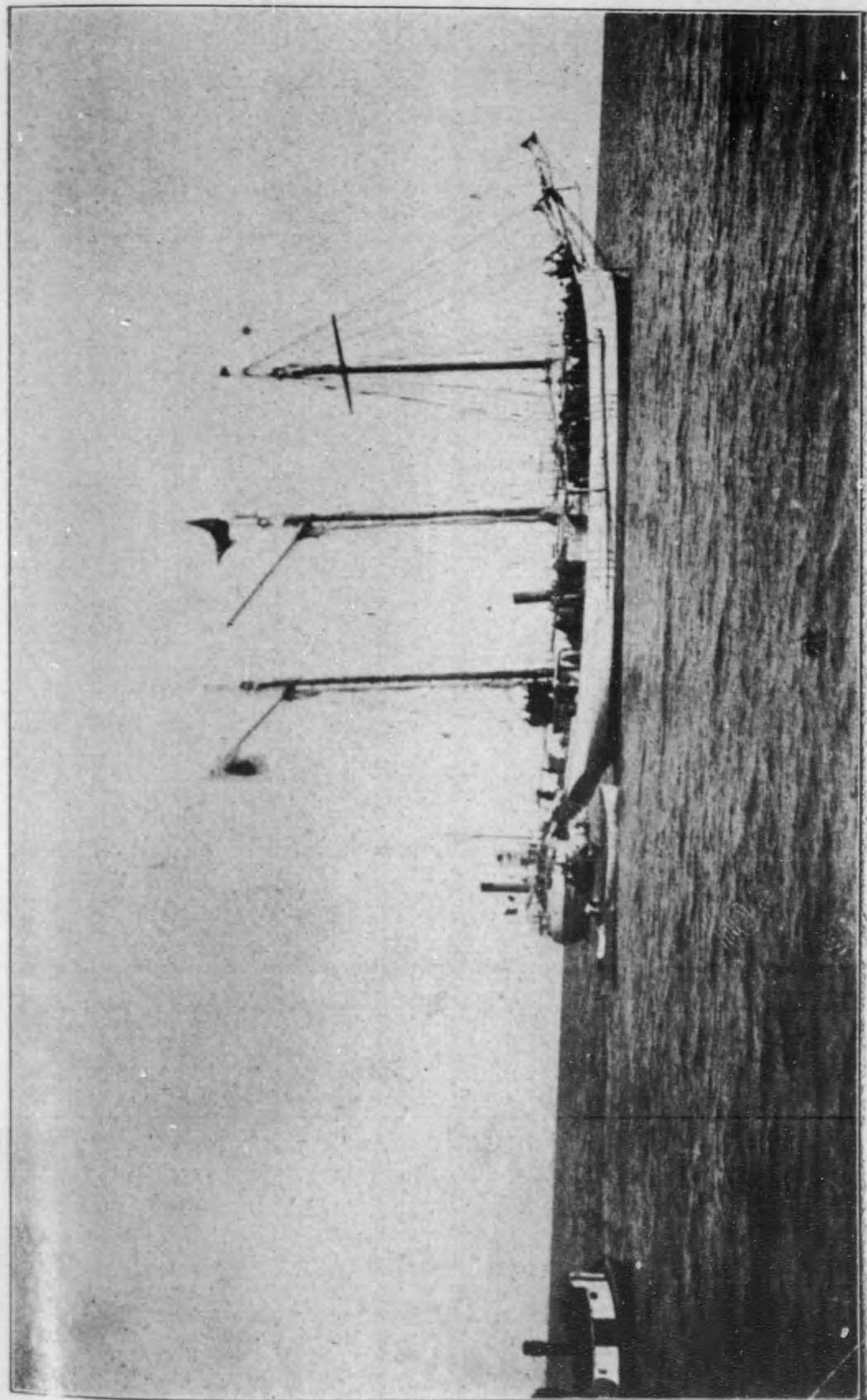
臣白瀬 誠恐誠惶頓首百拜して 今上陛下の闕下に伏奏し奉る 臣
 蓋茲に今日を期し南極探検の途に就かんとし今や一行の部下を率
 ゐて 今上陛下の闕下を辭するに當り一は以て鴻大無邊なる聖恩
 を謹謝し奉り一は以て 臣等 一行の素志を貫徹せん事を誓ひ奉らん
 とす 今上陛下克く 臣等の微衷を嘉納し給はらん事を誠恐誠惶頓
 首百拜して白す

豫備陸軍輜重兵中尉從七位勳六等 白 瀬 蓋

言々句々悲愴を極めた。やがて白瀬中尉が奉告文をすらくと捲
 いて懐に納めた時一同は二度三度宮城を伏拜みて低徊去り難き状態
 氣にも轉た涙を催さしむるものがあつた。



式典奉發田の員船隊るけ於に外橋重二



明治三十四年十一月十九日撮影

空砲より實弾

最初の探検

同日午後一時から後援會其他有志主催の送別式は芝浦理立地に開かれた。式場の入口なる芝橋には紅白の布を以て包める大門を作り、鉤玄蘭幽の額を掲げ兩方の柱には推倒一世之智勇、開拓萬古之心胸と大書し場は大天幕を張つて人を入れ其前に高壇を設けて隊員來賓新聞記者等の席に充て數百旒の萬國々旗は潮風に翻り、沖合遙かに日章旗と探検隊旗とを掲げたる白塗りの開南丸は待遠しさうに浮かんで居る。やがて午後一時半專任幹事村上濁浪氏幹事一同を代表して開會の辭を述べ各新聞社を初め國民の熱誠なる同情を謝し、東京藥學校長は同校出身の三井所氏に送別の辭を呈し、其他早稻田、明治、中央商業の代表者等皆熱心に一行を勵まし、大隈伯は拍手の中に立つて、此有史以來の大遠征は先人未發の秘密を露くものなるが宜しく空砲でなく實弾を發射すべしと快辨を揮ひ、又前南禪寺派管長勝峯大徹和尚は八十三歳の老軀を運んで一行が船中の安全を祈る爲め、大般若經轉讀の守を授け次に白瀬隊長は吾等一行は天神地祇の冥護に依り、四十

五年の六月か七月には間違なく此品川灣に歸帆し得べしと信ずと述べ、後に佐々木照山氏は白瀬中尉一行が血判の誓書を示し、諸君是を見よくと絶叫して悲壯なる一場の演説をした。

其他福本日南嘉悦孝子女史等演壇に立ち終に大隈伯の音頭で陛下の萬歳を三唱し、三宅博士に依つて南極探検隊の萬歳は唱へられ、之れにて閉會となつた。式場には白瀬中尉夫人安子長女文子列席し、尙ほ大木伯伊澤修二頭山滿の諸氏を初め、野村船長の紹介者なる秀島海軍大佐矢島船長等も來會して居た。

送別の式が終ると、隊長白瀬中尉以下二十七名の一行は、大隈伯爵を中央に擁し、後援會幹事諸士に圍まれ、南極星を染出したる小旗を打振る數萬の學生團に取巻かれて乗船場たるロッセッタ棧橋の附近へ來ると、此處には一行を本船へ送るべき大傳馬船を始め、其他二十餘隻の各團體の見送船が居て、國旗彩旗美しく飾り立て、中尉の乗船には福寶堂寄附の樂隊樂手を早めて頻りに行を壯にした。總て一行は岸頭に整

五萬の群衆一聲に萬歳を叫ぶ

列して茲に見送者に對して最後の訣別の挨拶を述べ、傳馬船へと乗移つた。と見た船夫は直ぐに繫綱を解くと、傳馬船はスル／＼と岸を離れた。樂隊の奏樂水上に起れば、天上には數發の烟花打揚げられ、其際に陸岸數萬の見送人が、一齊に旗を振つて、フレ／＼白瀬!!!を絶叫する。捧ぐる帽子、打振る旗、數群集監督の警部は正に五萬人以上だと語つたのに見ても、其盛况以て知るべしであらう。此間白瀬隊長は一齊に唱ふる萬歳の聲する方に脱帽の答禮をなし、最後の挨拶に忙しい。傳馬船は次第に岸から沖へ出やうとする、そこへ競ふて端艇で贈ぎ寄せ來る大學生等は、中尉を圍んで記念の筆蹟を乞ふ、中尉は乞はれて一々書き與へる、其文字は何れも己が決心を示す者ならぬはない。曰く堅忍不拔、曰く百折不撓、曰く千挫不屈、曰く開南萬里、曰く何曰く、何かくて暮色何時しか海上を包んで、四顧暗儼たる光景となつた。

之より前、開南丸は芝浦埋立地を距る數町の沖合に繫がれて居たが、潮の關係上長く留まる事が出事ないので、午後四時半頃、臺場外へ出て

南極探検記

往つて、そこへ碇泊した。一行を乗せた傳馬船は之を目がけて来るのだが、何分荷積の都合も二十八日中には充分運ばなかつたので、已むなく、此日の出發は中止し廿九日に出帆する事とした。

翌くれば十一月二十九日。此日一天晴渡り誰言ふとなく「探検日和」と叫ばれた。白瀬中尉を始め後援會幹事新聞記者其他隊員の近親有志見送人等を乗せた解艇は、午前十一時ロセッタの棧橋側から纜を解いて本船に向つた。岸を離ると萬歳の聲を陸上と船中から送み交はしつゝ、波を蹴つて一哩餘の沖合に假泊せる開南丸の舷側に達し爰ても一頻り萬歳を絶叫しつゝ、本船に乗り少時の程は見送る者も見送らるゝ者も盡きぬ名残を惜んだが一行の意氣は天をも衝かんばかりで、希望の色は其面上に輝き渡つた。斯くて出發の時刻も迫り正午となるや見送人の一部は再び元の解艇に乗り綿々として盡ざる名残の情を包みつ本船を去る。開南丸後部の錨鎖は忽ちにして數人の船員に依てキリ／＼と捲揚げられ、午後零時二十分開南丸は黒烟を揚げ

最初の探検

て徐ろに動き初め解艇と本船とは刻々に遠ざかつた。船名を示せる萬國信號旗エルエフビーエム、南十字星を描出せる探検隊旗及び船籍の儀表たる爛々たる日章旗は開南丸の橋頭高く翻へる。

此時水上署の八重洲丸から貴艦の成功を祈ると別れの信號をして呉れたので、開南丸は好意を謝する信號を返し、斯くて羽田沖に差し蒐るや、第五辰丸に遭遇し、謹んで成功を祈るとの信號を受けたので、之にも好意を謝すと答へつつ船は進んで横濱港外に達した。間もなく同港を出帆したのは午後五時頃であつた。船が横濱港外に出ると、其處に碇泊して居た巨艦がある。それは軍艦津輕である。我が船が其舷側を通過するや、一聲の喇叭は劉亮として響いた。それと共に艦員全部は舷上に整列し、我が船に向つて萬歳を三呼した。我船では隊長白瀬中尉が出て之に答禮し、且つ一同萬歳!!!を絶叫した。夫れから本牧沖を通過すると、横濱英國領事館員は本船の前途を祝せんと小蒸氣を疾走し來つたので、速力を緩めて館員を迎へ、其祝詞を受け、斯くて靜かな

る鏡の如き海を南東を指して進んだが、夕陽正に没せんとする際遙に西の空に當つて神々しき富士の姿が見られた。一同は之を見て喜び富士は是本邦秀麗の氣の化して山と爲りし物我等が前途を祝福するの佳瑞なりと勇み立つた。萬歳!!!の聲は又も海波を揺かして起る。斯くて機關の音滑かに砥の如き海上を進んで往くと數時間の後無事館山灣に到着した。時正に夜十一時三十五分である。此地は遠征勇士と見送人との告別の場所である。眺むれば鏡ヶ浦波静にして星斗の影を宿し風肅々として別離の情切なり、今別れては何れの時にか又相見ん誠に生別死別を兼ねるの思ひがある。「願くは健康にして萬里の遠征を遂げよ」「一意只進んで目的を貫徹せられよ」一語は一語より沈痛である。熱せる手は熱せる手と握り合ひ涙は落ちて兩者の頬を傳ふ。「さらば」とばかり一同は舷を下り去らんとする。外面暗黒咫尺を辨せざるの有様である。隊長は燭を執つて階段の上に立つた。火光はポット赤く照して兩者の頬を染めた。仰ぎ見

て又「さらば!!!」兩者は漸く相別れた。此時何者の奏しけん一聲裂帛悲しき尺八の音は起つた。其音悲壯萬里遠征を送るの人をして腸爲めに寸断せしむるの思ひがある。總て岸邊に達せし時紙片に火を點じて飛ばすものがあつた。其状花火の揚るに似て暗中に一道の光明を示した。船中の者は之を見て萬歳を叫んだ。見送の者又岸にあつて萬歳を連呼した。其聲海に響いて暫くは鳴りも止まなんだが竟に烏羽玉の暗の海に消えて終つた。翌くれば三十日午前五時開南丸は汽笛一聲館山灣を解纜し、同六時灣内大賀村沖に一先づ投錨の上貨物短艇等の整理に着手した。それが終了すると直ちに出發の豫定であつたが、天候頗る險惡の状を呈した。たので遺憾ながらも午後三時十二分再び館山港に引返して投錨した。處が天候は翌一日に至るも依然として不良で北位の強風吹き荒み海上の物凄きこと云はん方なき光景併し一刻を争ふ大切の場合であるから、午前七時二十分に至り野村船長の英断に依り断然出帆と決し、

冒險の征帆を張る

南へ南へ

十二月一日(暴風雨)帆走直航距離九海里
漂泊しつゝ夜を明かす

南 極 記

船首を數千哩を距る新西蘭ウエリントン港の方位に向けて抜錨した。さて出帆後は以前に増したる強風にて激浪數次甲板を洗ふ。普通船ならば斯かる天候には出帆を見合すが當然であるが、我開南丸は遠征當初の腕試しとして先づ冒險の征帆を張つたのである。之に反し、他の船舶は一時航海を中止し、先を争うて館山へ入港避難し、爲めに通航の船舶一隻も其影を認めない。やがて沖合に乗出すと、激浪怒濤の爲め我開南丸の船體は傾斜十五六度を示したが、兎も角満帆に風を孕ませて南へくと航走した。午後六時前後より海風は、一時收まりかけたが、浪は尙ほ高くして豫定の針路を航走することができなかつた。同十一時頃に至り、野島崎燈臺の警火を左舷正横約十海里北東の距離を望みて漂泊しつゝ、夜を明かした。夜來晴雨計は依然として降下しつゝ、あつたが、翌二日午前四時頃に至り、西北の和風が吹き初めたので、目的の針路に向つて南進を初めた。同八時頃には再び降雨を見、船體は高浪の爲めに激しき動搖を起すの

船暈に惱まざる

十二月二日(曇)帆走直航距離八十五海里

十二月三日(半晴半曇)帆走直航距離百二十海里

十二月四日(曇後晴)帆走直航距離八十二海里

最 初 の 探 検

て船員は上甲板に在る燃料石炭及び食糧貨物の取片付に多忙を極めた。同十一時頃に至り、西方遠く伊豆の大島を認めた。隊員は斯かる小帆船にては何分初航海の事とて、大多數船暈に悩み、食事を喫することも出来ぬ様子なので、船員等は多少の懸念の無かつた譯でもないが、既に箭は弦上を離れたやうな今日の場合、一刻一瞬の猶豫も出来ず、氣遣ひ乍らも極力南進を急いだのである。午後六時頃よりは強風全く西位に轉じて吹出した爲め、航海は極めて愉快となつた。翌三日、八丈島を遙かに見て、針路を加減し、全帆に西風を受けて進航した。隊船員の大部分は前日來の船暈猶ほ全く癒えないと見えて、終日食堂は寥々たるものであつた。夜來の海風漸く静まり、四日の空には灰色の曇雲密に打鎖して居たが、風位は北西であつた爲め、航海には最も都合が好かつた。此日の朝餐には船暈者の爲め特に粥を調理したが、その粥さへ二三人が箸を執

船艙の悪臭

十二月五日(晴)帆
走直航距離八十一
海里

奇抜なる驟雨浴を
行ふ

南極記

つたばかりで、多くは猶ほ食を断つて居た。午頃から朝來の密雲漸く薄れ程なく日光は雲間を洩れ全員をして勇氣を恢復せしめた。そこで夕餐の食卓は航海後初めての珍味を以て飾られたが、厨夫の心盡しも豫想ほどに酬むられなかつた。

前日午后に續いて五日の朝は快晴で、加ふるに南進に都合よき風位であつた。氣候も輕暖を覺え、日光も吹く風も人の肌は快く、總員は珍らしくも甲板に集うて閑談を交ふるほどの元氣となつた。併し一利一害は數の免がれざる所で、氣候が溫暖になるに従ひ、艙内から異臭の瓦斯を放散するので、乗組員一同は殊に衛生上に注意を拂ふことになつた。

晚餐の卓上では、漸く隊員の食事の小言が洩れ出して、炊事方を困らせるやうになつた。以て船量者の胃腑の回復されたことが知れる。

翌六日頃より時々驟雨が襲來するやうになつたので、乗組員は甲板上に裸體のまま、飛出し、奇抜なる驟雨浴を試み、又慾の深い連中はシヤ

十二月六日(晴)帆
走直航距離九十七
海里
十二月七日(晴)帆
走直航距離九十海
里

十二月八日(晴)帆
走直航距離百四十
二海里二分の一

最初探検

ッを洗つたり、犢鼻褌を濯つたりして嬉々として驅いだ。

船は箭の如く征南の針路を取つて、七日の海上を駛走した。暑氣は日一日に加はり、乗組員の多くは、甲板宿泊を好んで試みるやうになつた。元來甲板宿泊は直接外氣に觸れるのであるから、非衛生的のものではあるが、暑氣と例の室内の悪臭とを避くる爲め止むを得ず實行することゝなつた。殊に北寒の地に育つた樺太犬と、花守山邊の兩アイヌは暑さの嚴さを他一倍感じたりしい。

折しも八日午後一時頃のこと、鯨の一大群が隊伍を組んで船首に出現した。花守アイヌは習ひ覺えた銛を執つて、大に手腕を示さんものと之が捕獲を試みたが、惜いかな皆水際を離れると同時に銛から墜ちて、一尾も手に入らなかつた。

九日朝來大空雲影を認めぬが、風位南方に轉じたので、針路を東に轉じて航海を續けた。風位は次第に南進の帆走に不適當となるのであるが、征途猶ほ遼遠であるから、今より汽走などと云ふ贅澤は出來ない。

北回歸線を通過す

甲板上に鯨の山
十二月九日(晴)帆
走直航距離七十七
海里

苦熱愈々迫る

南極記

目下航進中の海上は回歸線近傍とて暑熱は極めて甚しく寒暖計は日中八十度を示して居る。船室内生活の苦痛は益々加はり晝夜大部分の時間は甲板上で過す工夫をすべく餘儀なくされた。船内から洩れて来る臭気は魚油と硫黄とより發散する瓦斯の混合したもので眼に多大の害を與へる。

前日船首に現はれた鯨の大群は今日も亦た再現して來たので甲板からは吾れもくと釣を試みた。すると釣は頗る容易で瞬く間に船上は忽ち鯨の山が築かれた。晚餐には久振に鮮魚の馳走に一同舌鼓を打つことが出来た。

翌十日も昨日と同じく快晴であるが風位は極めて不定で且つ輕風である爲めに海上は頗る靜穩だが暑熱は一層烈しさを加へ隊員等は殆ど丸裸で日蔭を追うて甲板上の隅々に坐を移し巡る程であつた。

昨日釣つた鯨の臍腑を釣針に附けて船尾に流して置いたら何者かが來てそれを一瞬に嚙んだものと見え苦しさに蕩擡いて曳く力に絶

二十五貫餘の大鯨
を釣り上げ

十二月十日(晴)帆
走直航距離九十五
海里
十二月十一日(半
晴)帆走汽走直航
距離百十海里四分
ノ三
十二月十二日(晴)
直航距離二十四海
里

最初探検

十二月十三日(晴)
帆走直航距離百二
十七海里

の切れむばかりの様子之を發見した連中は聲を揃えて曳上げて見ると長さ一丈に垂なんとする二十五貫目以上も有らうと思はるゝ大鯨であつた。萬歳々々の歡呼は暫し甲板上に鳴響いた。厨夫は早速執刀した。太平洋の珍味は意外にも此夕一同の腹の蟲を驚かせた。

翌十一日の天候は東北東の輕風吹き海上極めて靜穩涼氣自ら爽快で昨日捕獲した三十二尾の鯨に舌鼓を打つて愉快なる一日の航海をした。

十二日は黎明よりマリアナ群島の東端一孤島附近を通過した。午後二時五十五分視界遙に火山を見る。其狀恰も摺鉢を伏せるが如く山頂噴烟盛也。白瀬隊長を始め隊員連中は甲板上に集まつて左眇右顧しつゝ之が南極の陸影であつたならば：「などと歡語しつゝ頗る元氣であつた。

十三日は天氣好晴東南東の和風吹き浪高く船體は動搖して左右約十一二度の傾斜を示した。隊員中には猶ほ船暈に悩まされて居る者

驟雨の度に火事場の騒ぎ
十二月十四日(晴)
帆走直航距離百海里
十二月十五日(晴)
帆走直航距離八十九海里二分ノ一

商 極 記

もある。中には南洋群島への寄航を希望する者も出たが、豫定の航程を急ぐ爲め船長は之を聞流して一直線に針路を進んだ。赤道も近づいたので、彈藥の爆發や、食糧の腐敗などが起つては大變と、注意に注意を加へた。天氣は極めて麗らかに、時々驟雨の來襲がある。例の天然浴や洗濯などの盛んに行はれたのは云ふまでも無い。館山港出發以來今日で南東への航程正に九百〇六海里半に達した。天氣は今十四日も快晴である。驟雨も日課の如く時々襲來する。驟雨襲來の際は午睡の夢涼しき隊員等は遽かに眼覺めて、大狼狽の滑稽を演出し、又た船員の方も帆の始末に忙殺されて、甲板は何時火事場のやうな混雑を呈した。

十五日の午後、始めて鐘詰果實を開いて總員に分配した。暑熱も餘程加はつたので、各自衛生の注意を怠らぬやうにした。白瀬隊長は常に洋服で居つたが、他の隊員は和服姿で居た。船長は船員に對しては一切和服を許さぬ事に定めた。此日、靴犬一頭病死した。

十二月十六日(晴)
帆走直航距離百四十二海里二分ノ一
十二月十七日(半晴)
帆走直航距離七十一海里
十二月十八日(半晴)
帆走直航距離二百〇六海里
十二月十九日(半晴)
帆走直航距離三十七海里三分ノ一
母國では炬燵船中では裸一貫

最 初 の 探 検

翌十六日より十七日にかけて、天氣は或は晴或は曇風位は逆風にて船の進航は思はしくなかつた。十八日は朝來般々たる遠雷が聞えた。風は不定浪には南東の颯りがあつて、船體は頗る動搖した。船は午前七時汽帆兩走で南東の針路に急駛を開始し、午後より風順位に復した。夕暮から汽走を休止して帆走を續けた。

十九日も例に依つて朝のうちは涼しかつたが日の冲天と共に暑氣加はり、季節冬至に近き今日此頃、母國では炬燵を擁する時季なのに、船中は裸一貫で居ても暑さ焼くが如くである。

二十日の風位は東北東で、風波極めて靜穩である。午前六時船長は汽走の用意を命じた。同七時頃から風力を借りて、汽帆兩走を試みた。此日も隊員の中には南洋群島に寄航せんことを申出た者もあつたが、船長は豫定の航程の遅延して居ることを陳べて、其要求を容れなかつた。乗組員は此夜涼を趁うて甲板上に集り、一輪の皎月を仰ぎつゝ、互に打語らうて居ると、何處の舷端よりか、尺八の低音は濤聲に和して傳は

洋上の月と尺八
十二月廿日(晴)汽
走帆走直航距離八十九海里五分ノ一

十二月二十一日
(晴)帆走汽走直航
距離五十九海里

十二月二十二日
(半晴)帆走汽走直航
距離六十三海里
四分ノ三

十二月二十三日
(快晴)帆走直航距
離百二十海里

十二月二十四日
(晴)汽走帆走直航
距離百三十六海里
五分ノ二

甲板上の蓄音機

南 極 記

り來つた。
二十一日は北東の好風で、稍や強く吹き、船體の傾斜左右七八度に及んだ。午後三時頃、犬一頭病死した。之が二頭目である。直に水葬に附した。今後、犬の健康に就ては大に心配せざるを得なくなつた。
翌二十一日は、午前中より頻りに雷鳴を聞き、驟雨の襲來も時々あつた。之が爲めに船員は必死となつて帆の操縦に忙殺せられた。正午には快晴となり、午後一時十五分よりは汽走を止めて帆走のみに由ることにした。
二十三日は、朝來天氣清明、海上極めて平穩である。風位も亦た北東に定まつて帆走には好都合であつた。
翌二十四日午前五時に至り、海上風全く死したので、帆走を中止し、唯だ汽走するの外はなかつた。此日頃より益々暑氣が加はつて來て、到底汽走室に長時間の就業は困難であつたから、船長は水夫二名を火夫の助手として汽走部に送つた。此頃は毎夜甲板上で餘興として蓄音

十二月二十五日
(晴)汽走帆走直航
距離六十海里

十二月二十六日
(晴)帆走直航距離
百三十三海里

十二月二十七日
(晴)帆走汽走直航
距離九十四海里
二分ノ一

十二月二十八日
(半晴)汽走帆走直航
距離百十五海里

最 初 の 探 検

機を聞いた。
二十五日。天氣は快晴であるが、風位は不順なので、全く帆を撤して汽走した。此日は朝來蒸暑いので、船艙から洩るゝ臭氣殊に烈しく、船室に居ると殆ど眩目昏倒せむばかりであつた。而して船中装具の金物類は總て灰色に變じたのは、全く一驚の外はなかつた。午後四時頃に至つて風位定まつたので、汽走を罷めて帆を張つた。
二十六日は、天候も良く、風位も好いので、船は箭の如く目的の方向に向つて駛ることが出來た。二十七日の午前に至つて風死し、浪に東北から推寄する艇りが出來て、左右各々七八度の動搖を起した。同九時頃から全帆を徹して汽走に代へた。午後九時頃には又多少の風力を見たので、總帆を展開することにした。
二十八日例によつて驟雨が時々來襲するので、其度毎に帆の上下に忙殺せられた。船員の中には此多忙を厭うて、「隊員になればよかつた」と愚痴る者もあつた。之と云ふも隊員中の甲乙は此多忙な操帆の時

赤道が見える

十二月廿九日(半晴) 帆走汽走直航 距離百五十海里

十二月三十日(半晴) 汽走直航 距離百四十五海里

南極記

作業を呑気に寝轉んで見て居たからである。二十九日は天候半晴で、西位の輕風である。海波に前日來の北東の艇りが矢張り高かつた。船は漸く赤道の真下に近づいたのて、乗組員は隊員となく船員となく「赤道は何の邊だ」と云つて騒ぎ出した、そこで一行中の惡戯者は望遠鏡の鏡面に赤の横線を引いて之を此處彼處へ見せ廻つた。此日午前六時二十分東經百五十三度五十八分の子午線より愈よ赤道を通過したのであつた。午後七時頃海鳥が船尾へ來たのて水夫の一人が之を手擒にしたのは一興であつた。今日は母國を出帆して宛ど一箇月目であるといふので、船内は出發當時の回顧談で持切つた。

三十日は、風位風力が極めて不定であつたのて、勢ひ針路も不定ならざるを得なかつた。船長の意志ではソロモン群島のギンゲインザイル嶋と、コイゼウル島との中間を通航する目的であつたのだが、風の都合も思はしくないと、天候險惡の兆が見えた處から針路を東方に向

浴衣一枚の年越し 十二月三十一日 (曇) 帆走汽走直航 距離百十七海里

最初の探検

け横帆とデブと二枚を用ゐて航走した。此日何れの方角から來たものか無數の流木を認めた。

翌日は十二月三十一日。記念深き今年も今日で愈よ終焉を告げることゝなつた。天候の險惡益々甚しきを加へたのて、船は荒天航走の準備を整へた。昨日赤道を通過した計りなので、炎熱猶ほ焼くが如く乗組員一同はシャツ一枚になつて元旦の晴の馳走を用意すべく、例の臭い艙内から品々を取出した。浴衣一枚で大晦日を迎へた一同は、少なからず奇異の感に打たれた。

翌くれば明治四十四年の元旦である。夜來の風雨次第に烈しさを加へ、午前二時前後は迅雷轟き、最も凄慘なる光景を呈し、満船の勇士も聊か荒膽を冷した。船長機關士等は最も針路に注意を拂つて航走を續けた。

午前九時新年を祝福すべく、總員一同は前甲板に集つた。隊長は先づ祝辭を述べ、總員一同遙に母國の空を拜して、天皇陛下の萬歳を三唱

雪の如き米の飯
明治四十四年一月
一日(強雨雷鳴)汽
走航直航距離八
十五海里
一月二日(雨)汽走
航直航距離九十
海里
一月三日(雨)汽走
航直航距離六十
海里
一月四日(半晴)帆
走直航距離百十海
里
雲か山か一髪の青
螺

南極記

した。式終るや否や、制服制帽に窮屈を感じて居た隊船員は、忽ちシャ
ツ一枚の無禮講となつて、葡萄酒の祝盃を擧げた。此日の馳走は乾餅
の雑煮、韶陽魚数の子、鮭鱒、蛤蜊等の雑語を原料としたるものであつ
た。就中最も一同を喜ばしたのは、平素衛生上用ゐる來つた麥飯に引代
へて雪の如き米の飯であつた事である。
二日から三日に亘つては、殆ど間断なき降雨の爲めに、海上には南の
波動を起し、船體は頗る動搖した。其爲めか測程器に故障を起したの
て止むを得ず、手用測程器を用ゐて之に代へた。三日夜十時頃猛烈な
驟雨襲ひ來り、風位は西に轉じた。
四日は朝來の半晴で、目的の南方指して進航を續けることが出来る
やうになつた。
五日午前九時頃に至り、東方水天髣髴の邊に、雲か山か、一髪の青螺を
認め、それは無名の一小島であつたが、實測の結果海圖とは其位置に
少しく相違があつたので、他の方法に由り測量すると、全く時辰儀の日

一月五日(雨)汽走
航直航距離百廿
海里
一月六日(雨)汽走
航直航距離五十
海里
一月七日(曇)帆走
航直航距離八十
七海里
一月八日(半晴)汽
走直航距離八十海
里
一月九日(晴)帆走
航直航距離八十
五海里
一月十日(半晴)帆
走直航距離九十七
海里
一月十一日(半晴)
汽走航直航距離
九十海里
一月十二日(半晴)
帆走直航距離九十
海里
一月十三日(快晴)
帆走直航距離百三
十五海里
一月十四日(快晴)
汽走航直航距離
八十海里

最初探検

差の異なるに因ることを確め得た。其島の位置は、南緯七度二十五分
東經百六十二度四十分である。
此日乗員一同は汁粉に舌鼓を打つた。
六日から八日までは、天候不良であつたが、九日に至つて、連日の密雲
漸く薄れ、風位南東に轉じたので、船體は頗る動搖したけれども、航走に
は頗る都合が好かつた。此邊海上は赤道を離れて早や南緯十五度に
も達して居るが、暑氣は猶ほ却々に烈しく、驟雨も毎日時々來襲した。
十二日の午後に至つて、征襟漸く一掬の涼味を覺ゆるやうになり、又
た此邊の海水の色は、一種異様の薄白色を帯びて居ることを認めた。
而して南東の波動は、高さ十五六呎幅約五間ぐらゐのものがあつたが
十四日に至つて、波動は漸く減少し、随つて船體の動搖も鎮まり、隊員連
は爲めに非常に喜んで居た。併し船長は、風力が不足なので大に溢面
を造つて居た、此日高川水夫は、見張所の中で、ボーションと名づくる一
羽の海鳥を生擒した。尙ほ此日厨房に蔬菜が缺乏を告げたので、以後

一月十五日(晴)帆
走汽走直航距離八
十五海里
一月十六日(快晴)
汽走帆走直航距離
四十海里
一月十七日(快晴)
帆走汽走直航距離
七十五海里
一月十八日(快晴)
汽走帆走直航距離
百十里
一月十九日(半晴)
帆走汽走直航距離
百十五海里

南極記

ライムジュースを代用することにした。
十五日から十八日までには近來稀有の快晴で、森茫たる海洋上も宛ら
青壘を敷いたやうで、絶好の航海日和であつた。併し風力が不足な
で、多くは汽走を以て駛り、時に又た帆走をも試みつゝ、南へくと豫定
の針路を南進した。此頃は乗員一同海上生活に慣れて、晝は船尾の甲
板に集り、蓄音機などを持出して大に興じ、夜は皎々たる月下に打寛い
て得意の隠藝を演じなどして夜の更くるを忘れる程であつた。
十九日には、汽鑪に故障を生じたので、一刻千金の貴き時間ではある
が、止むなく一時航進を中止して、之に修理を施した。一方船體を檢す
るに、連日連夜の暴風怒濤の迫害の爲めに、白帆の一面は灰白色となり、
又た船の外板水平面は、多くの水垢、海藻貝類などの附着物が生じて爲
めに流石の鋼鐵板も、水錆を生じ、殊に留釘の箇所は腐蝕して將に離れ
んとして居るのを發見した。
二十日、二十一日の兩日は風位が不定なので減帆して多くは汽走を

一月二十二日(半
晴)帆走直航距離
九十五海里

好日和のお祝と號
外

恰も彌生の花曇り
一月二十三日(曇)
帆走汽走直航距離
十四海里

最初探検

用ゐた。又た時々遠雷殷々として轟き、驟雨も亦た來襲して大に船員
を忙殺せしめた。
二十二日に至つて、天候は漸く平調に歸し、風位も東方に定まつたの
で、總帆を展開して南方に急駛した。此日は風清く氣朗らかで、坐るに
人の心を樂しませしめるので、船長は一等運轉士に對して、「今日は天氣
も好し、風位も申分のないお祝に、御馳走を奮發しやうぢやないか」と諮
つた。之を洩聞いた隊員の一人は、鬼の首でも捕へたやうに「號外」
と全船に觸廻つたので、食はぬ先から歡呼の聲は其處此處に起つた。
二十三日の天候は恰も母國に於ける彌生の花曇りのやうで、風は東
方より吹いて頗る航海には便利であつた。船長は朝來飲料水や食物
などの檢査をして、一同に衛生上の注意を與へた。連日來、犬が相尋
めて八頭病死した。其原因を調べて見ると、乗組員の殘飯のみを食し
めた爲めではないかと疑つても見たが、後日に至つて其死因は、蠶蟲の
寄生した結果であることが知れた。三井所衛生係も手當の盡し様は

一月二十四日(曇)
帆走直航距離八十海里

今日ば母國の天神祭
一月二十五日(半晴)
帆走直航距離五十八海里

一月二十六日(晴)
汽走直航距離二十五海里
一月二十七日(半晴)
汽走直航距離百二十海里
一月二十八日(半晴)
汽走直航距離百海里

南極記

ないと云つて匙を投げた。夜十時頃船尾遙かの海上に漁火の如き二箇の光を認めた。之は汽船が航海しつゝあつたのであらう。

二十四日から二十五日へかけては内地の五月頃の氣候で頗る心地よく海面上東南の波動の爲めに船體は左右七八度の傾斜を示したが東位の和風甚だ帆走に適し、目的の方向に向つて航進を繼續することが出來た。殊に二十五日は天神の祭日に當るので遙に母國郷里の祭典を思ひ型ばかりの馳走が卓上に並べられた。船長は一刻も早く寄航地たる新西蘭に到着せねば後援會では大に心配するであらうと考へて少なからず急駛の方法を講じた。

二十六日は風位不順の爲め殆ど東方に向つて航走した。船體の動搖は昨日にも増して激しく、船の進程遅々として頗る不愉快であつた。二十七日から二十八日へかけて、風は益々強くなつて、氣温は急に涼しくなつたので、今朝から食卓を甲板から室内食堂に移した。副食物としては奈良漬、鮭、福神漬等が其重なるものである。

一月二十九日(半晴)
汽走直航距離八十八海里

漸く新西蘭を發見す

一月三十日(雨)
汽走直航距離三十海里

一月三十一日(雨)
汽走帆走直航距離八十海里

最初探検

翌二十九日も風位依然として帆走に適せず、汽力を以て東方に航走を續けた。涼氣は益々加はつたので、此日から青天井の甲板を禁じて室内に起臥することゝ定めた。折しも午前十時頃遙か東南方に當つて新西蘭北島の西北端を發見したので、乗員は拍手喝采して歡呼の聲を擧げた。思へば我開南丸が品川灣頭を辭して以來陸影を見ることとて僅かに第三回目である。

三十日早朝白瀬隊長は起出づるや否や、船長に對し新西蘭寄港の豫定を訊ねたが船長が「風位の不良の爲め昨夜半から沖に向つて船を回轉したので、ウエリントン方面に直航することの出來ないのは頗る遺憾である」兎に角此場合風位の順調に向ふを待つより外に良策がないと答へた。

夜來の天候は依然として險惡であるが、三十一日の午後一時頃から風雨が稍や穩かになつたので、針路を南に轉じ滿帆に順風を受けて進んだ。午前十時頃再び陸地が視界に現はれ初めたので、一時は落膽し

二月一日(半時)帆
走汽走直航距離八
十一海里

二月二日(半時)帆
走汽走直航距離百
十三海里
富士山に似たるエ
グモンドの高峯

二月三日(半時)帆
走汽走直航距離百
三十一海里

南極記

た隊長を始め船員は手を拍つて大に喜んだ。併し船長を初め船員等は南方の波動の激しきを氣遣つて居たと云ふのは陸岸附近であるので暗礁などの危険が無いとも限らぬからである。

翌くれば二月一日、昨日に變らず風波高く船體の動搖随つて甚しく隊長初め船員等は「全體船の針路は新西蘭の方向に向つて居るのか」と云つて訝り出した。船長は之に答へた、「風位の不順と夜來屢々來襲した狂風驟雨の危険を避ける爲め、多少進程に加減を加へて逆航したから諸君の訝るのも無理は無い」と云つた。

二日午後二時頃エグモンド山の山頂を認めた。此山形は宛ら我が富士山に髣髴たる死火山である。海拔八千二百六十呎山頂には白雪を戴いて居るのが見える。一同は地平線遙に此山を望見て、遠く母國の懐かしき風景を回想した。船はエグモンド岬附近に向はうとしたが風位不調の爲め、危険を避けて中止するの已むなきに至つた。夜の十時頃に至り、エグモンド岬を左舷に見て進航した。

ウエリントン港指
して針路を取る

一陣の旋風來る

不安の一夜

最初の探検

翌三日午前一時、エグモンド岬の燈臺前を通過して、同三時半の頃から、ウエリントン港指して針路を取つた。隊員の幹部連は味爽から上陸準備に多忙を極めて居たが、船長は晴雨計が次第に降下して刻一刻天候險惡の兆を示すを見大に懸念はしたが兎も角汽力と風力とを能ふ丈け利用し港口を指して急航した。

此日、日没の模様は最も危険なる暴風の前兆を呈したので、船長初め船員一同は大に警戒して居つた。すると果然夜の九時頃に至つて、一陣の旋風來ると思ふ間もあらず波濤怒りて船を弄すること木葉の如く爲めに傾斜二十度に達し、ウエリントンへの入港は、一時絶望に終つた。

加之海上は一面濃霧に鎖され濛々として咫尺を辨ずることすら出來なかつたから成るべく沖合の安全なる海上に漂泊しつゝ、夜の明るを待つた。
圓かなる夢を結び得ざる不安の一夜は明けたが、翌四日も風波は更

二月四日(曇)帆走
汽走直航距離十二
海里

二月五日(半晴)帆
走汽走

二月六日(半晴)汽
走

二月七日(半晴)汽
走帆走直航距離六
十四海里

南極記

に收まらず、加ふるに午後一時半頃非常なる豪雨來り、同六時まで降續いた。
翌五日も昨日に變らぬ強風怒濤で汽罐の全力を使用するも、一切進航の効を奏さなかつた。此邊の海は夕刻海峡から流來る潮流が驚くばかりの迅速であつた。そこで六日から七日へかけて船は同海峡内を斜走して目的地に接近する方法を講じたが、遂に無効に歸した。
八日も亦た前日來の斜走を續行して辛ふじて目的地に近づくことが出來た。午前八時頃ペンカロー燈臺に並航して、サムス島燈臺を指して進入した。サムス島附近水路誌に據れば同島には檢疫所がある」と誌されてあるが、正午頃同島に近づくも、更に檢疫の摸様が無いので直路ウエリントン港内さして進航した。午後二時頃に至り、檢疫の小蒸汽艇が我開南丸を目蒐けて近づいて來たので、直ちに錨を投じ各員は檢疫を受けた。幸にして船員中一名の故障者もなく、同二時三十分終了したので、再び錨を抜いて港内に向つた。此際檢疫船に白瀬隊長

ウエリントン港に
投錨す

政廳の多大なる好
意

二月八日(晴)汽走
帆走
二月九日(晴)

最初の探検

武田學術部長三井所衛生部長島事務長外一名便乗して先きに上陸した。開南丸は同三時四十分頃港内西南部英國商船棧橋の附近に碇泊した。
此邊の風景は洵に美で、久しく海上に怒濤とのみ闘つて居た總員の眼には言ふべからざる快感を與へた。海濱近き陸上には、教會堂らしき大建築物があつて、多數の青年男女の運動嬉戲するさまは宛も人形のやうに見えた。電車も海岸まで通じて居る。
乗組員は甲板上に集つて喜び勇んで陸上を指願しつゝ、語合つて居ると、同四時三十分頃港務員が來船して、碇泊地を移すべく請求した。そうして其指定された碇泊地は英國軍艦コンビオン號の艦尾近き箇所であつて、此處に投錨を許されたのは、ウエリントン政廳の多大なる好意であつたことを後に知つた。
此夕英艦乗組員や新聞記者や港務官吏等の來訪が續々あつた。
翌九日午前八時港務官來船し間もなく税關吏も來り、他に四名の來

客もあつた。今日政廳と領事官との命令によつて、開南丸を棧橋へ横付けにせよと云ふ事であつたが、種々都合もあることとして其命令に従うことを辭した。同九時三十分頃船長は税關領事館港務部等への用事と、船用の買物とを兼ねて上陸した。各乗組員も半数づゝ交互に上陸を許されることゝなつた。

上陸後船長は石炭三十二噸飲料水三十六噸其他重要な船具購入の約束を了つて歸船した。此日は石炭飲料水などの積入で船では非常に多忙を極めた上更に領事館員や新聞記者等の來訪者が多數で、一々之に面會せねばならぬので幹部達は品川出帆當時の多忙よりも更に多忙であると云つて愚痴つた位である。

翌くれば十日は、一天拭ふが如き好晴である。彌よ明十一日には氷海指して出發する豫定なので、今日は十二分の休養をとるべく總員に交代の上陸を許した。領事館よりの通知によるに前日白瀬隊長との打合せの通り幹部一同上陸せよとの事であるので短艇を雇して海岸

に到着すると我名譽領事ヤング氏は自動車を用意して一行を待受けて居た。一行は得意然として打乗るとヤング氏は自らハンドルを把つて市内各所の案内をしてくれた。領事館公園公會堂の三箇所には數多の貴婦人打集うて、一行に手篤さ響應をして呉れた。又た會衆中の花の如き令嬢は、一行に勸めて庭球の競技を強いなどして款待してくれた。花の如き是等の美人と赤道直下の炎熱に眞黒々に焼付けられた荒くれ男とが、一つコートに相對球したのは、一種の奇觀であつた。凡て客を待遇することに就ては外國婦人は實に優れた手腕を有つて居る。到底我日本婦人などの遠く及ぶ所ではない。之が爲めに我一行は連日の辛苦を一掃し去つて、新に南征の勇氣を保つことが出來た。歸途寫眞材料などを買つて市民の好意による特別無賃の電車に搭乘して夕刻歸船した。此夜多數の學生が來船した。彼等は日中は日課の嚴なる爲め止むを得ず夜間の休暇を利用し來訪したのであると語つて居た。シドニー日本人會と新西蘭北島に居る唯一の本邦人三

二月十日(好晴)

紀元節を以て愈々極地向ふ

瞬時も早く南極に達せん

見送りの快走艇花に集まる蝴蝶の如し

南極記

宅幸彦氏とから、我壯舉の成功と、一行の健康とを祈るとの祝電があつた。

二月十一日の紀元節此好箇の記念日を以て、我開南丸は愈々其目的とする極地向つて、ウエリントン港を抜錨する事に決した。母國の後援會から送金があつたので、午前八時三十分白瀬隊長は四五名の隊員と共に之を領收の爲め上陸した。同九時船は全く出帆の準備が整つた。此時領事から書面があつて、出發期を翌日に延期することは出来ぬか出發の際は盛大なる送別式が催したいから、能ふべくば明日の日曜にしては如何との事であつたけれど、一行は瞬時も早く南極に達せんことを急務として居たから遺憾ながら其申込を謝絶する旨を答へた。すると第二回の申込に出帆は午後まで延期してくれよとあつたので、之は謝絶も出来ないのて承諾の旨を答へた。

正午から見送りの快走艇は陸續として春の野の蝴蝶の群が、花を目蒐けて集ふが如く開南丸を取圍んだ。中には四百噸にも餘らむばかり

二月十一日(晴後曇)

二月十二日(曇)汽走

二月十三日(曇)汽走直航距離二十四海里

山成す波濤の襲來
二月十四日(半晴)
汽走直航距離七十五海里

最初の探検

異様な四階造りの汽船もあつて欄干には綺羅を飾つた男女が歡呼しつゝ見送つて居た。総員は手巾を振り又は帽を振つて之に應へ、船は徐ろに錨を上げて出發した。やがて碇泊中の英艦の傍を過ぐるや艦内より「貴隊の無事成功を祈る」との信號があつたので、開南丸よりは「貴艦の同情を感謝す」との信號を返した。船が灣口を過ぐる頃から、天候は見る／＼不良の兆を現はし、浪高く、風強く豫定の進航が困難になつた。

明けて十二日も、天は曇り、風位も不定で、船は南へ直航することが出来ないのて斜走した。殊に不愉快なのは潮流の迅いことである。十三日に至つて風力が餘程減じたので、専ら機關を使用して進航した。十四日は、山成すばかりの波濤が殆ど間斷なく襲來して、船長をして多年の経験中此くの如く大波濤を見たる事が無いと絶叫せしめた程で船體の動搖は甚だしきものであつた。

十五日に及んで、波濤の大波動は餘程減じたが、朝來非常なる濃霧が

二月十五日(半晴)
汽走直航距離百〇
三海里二分ノ一

二月十六日(曇)
帆走汽走直航距離九
十三海里

南太平洋の濃霧

海歌に似たる水禽

南 極 記

立置めたので航海昨日に優るの困難を感じつゝ汽走を續けた。新西蘭碇泊中元と一商船の船長を永年勤めて居たといふ某英國人から此沿岸の天候の概略を聞いたが、其人の話に據ると、西海岸の冬期には變化が多いが東海岸の方は何時も天候が良好であるとの事であつた。併し事實は之に反して居ることを経験した。

十六日は空は曇つて南東の高大なる波動があつたが乗員はウエリントンで買込んだ新鮮なる食品に舌鼓を打つた。風は餘程輕減したが漸く順風となつたので目的地に向つて航走するに好都合であつた。翌十七日の午前二時頃から非常なる濃霧立置めて打見る海上は白濛々たる世界と化した。船長は此状を見て、南太平洋の霧の豫想以上に深きことを新に経験した。此頃に至つて天候の然らしむる所か乗組員の中に頭痛に悩む者續出した。同八時三十分頃海歌類に似たる水禽が船側を目蒐けて遊泳して來た。三井所氏は長竿の尖端に袋を着けて之を取押へた。熟々視ると、新西蘭の博物館で見たことのある



翁天信の翔飛中雲

二月十七日(曇)汽
走直航距離八十七
海里

二月十八日(半晴)
汽走直航距離九十
三海里

二月十九日(曇)汽
走直航距離八十八
海里
二月二十日(曇)汽
走直航距離百
三十五海里
二月二十一日(曇)
汽走直航距離百二
十三海里
恐るべき三角波

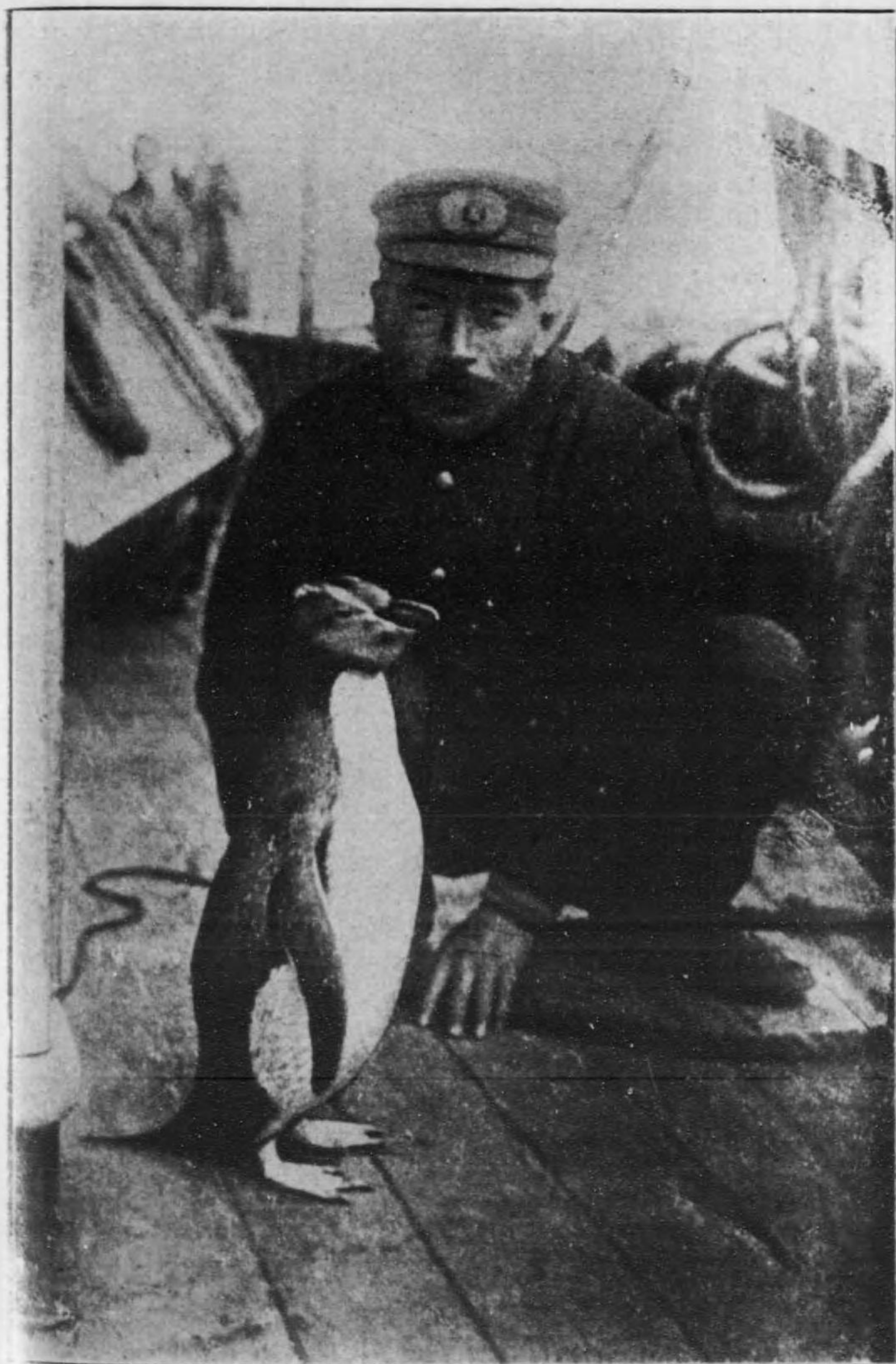
寒氣漸く強烈

最 初 の 探 検

ペンギン鳥に相違なきことを確かめた。此鳥の姿は宛も人間が外套を着て立つて歩く如き風采で歩むのであつた。仍て直ちに船工に命じて鳥箱を作らしめ、之に食物を與へたが、一向に食はないので、麵粉を粉末になし、之を丸めて、口中に入れ與へた。

十八日は幸にも前日來の濃霧霽れて、半晴の澄める天氣となつた。海上東南の波動は相變らず、船體を動搖せしめた。此邊から寒氣が漸く強烈になつて來た。上陸隊員は此寒氣で往々、身體を鍛へて往けば極地向つた際に困難を感ずることが少なくなるであらうなぞと云ひ合つた。

十九日は天候不定で、波動の高きと前日の如くであつた。二十日は荒れ模様で、時々驟雨が來襲した。風位は北西で頗る強い、二十一日に至り、夜來の荒模様愈々甚しくなり、波濤は益々狂怒し、船體は木の葉の如く採まれた。午後には恐るべき三角波が來襲したので、船では急遽漂蕩法を施した。



(明治四十四年二月十七日) 清水機長とペンギン、アドレード

二月二十二日(曇)
汽走直航距離六十
五海里
二月二十三日(曇)
汽走直航距離四十
二海里

二月二十四日(曇)
汽走直航距離七十
八海里

線状を爲せる奇雲

南極探検記

二十二日も前日に引續き漂蕩法を施しつゝ進航した。猛烈なる驟雨は此日も朝來時々襲來した。風位が突然變化するので航海の困難は到底筆紙に盡すことの出来ぬものがあつた。而して二十三日に至り天候は益々險惡となつたので船員は極力避航安全法を講じたが午後六時頃から俄然天候恢復の兆が見えたので展帆して快進した。隊員中には檣柱の周圍を飛廻つて居る無數の信天翁を捕へんと工夫した者もあつたがすべて徒勞に終つた。

二十四日激浪は相變らず高く船體の動搖も亦た相變らず甚大であつた。正午近く晴雨計は急に降下した。而して午後に至つて天候は再び險惡となり船は揉まれに揉まれつゝ翌二十五日を迎へると朝來風雨激しく船の傾斜は左右二十度を示すに至つた。午後及びも天候は更に恢復の兆が無かつたが時々飛雲があつて半晴の狀を呈することもあつた。此夜十一時半頃中天の雲間に細き線状を爲せる赤色又は白色の奇雲が現はれ一消一現して美觀云ふべからざるものがあつた。

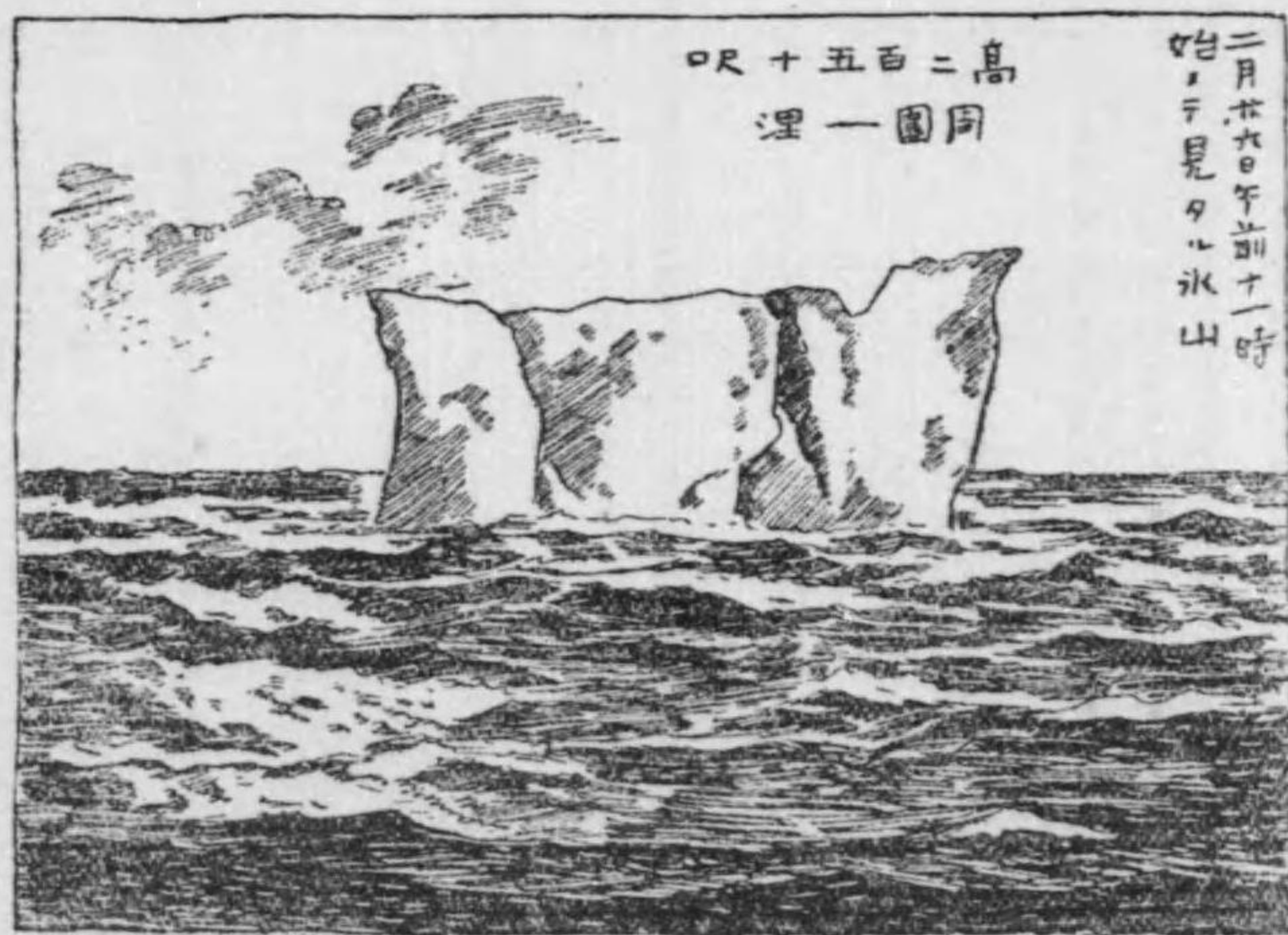
燦然たる南十字星
と三光星

二月二十五日(雨
後半晴)汽走直航
距離百六十九海里

激浪の爲め主帆を
損ず

二月廿六日(半晴)
汽走帆走直航距離
四十海里

最新探検

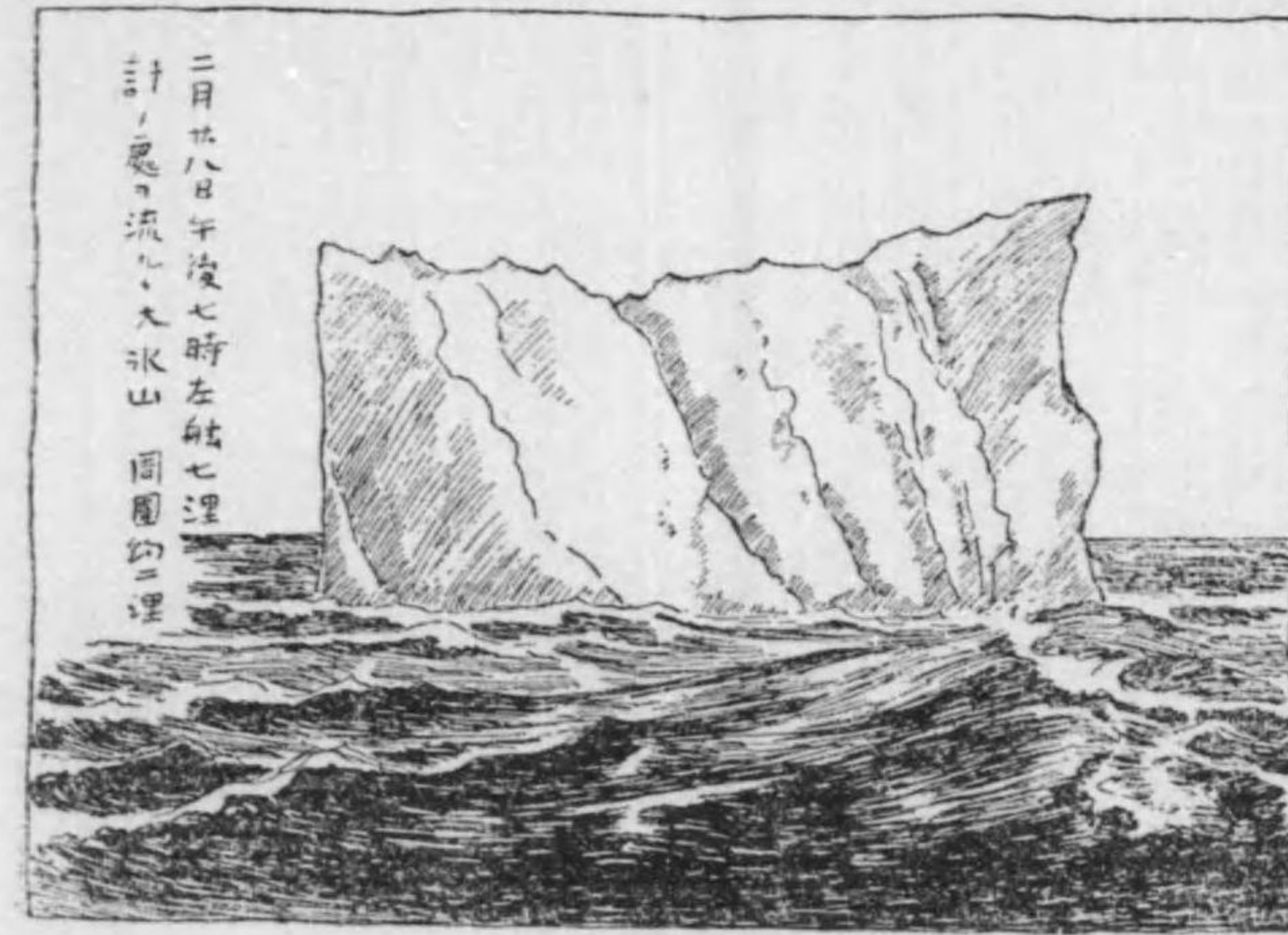


つた。之と同時に我南極探検旗に現はしてある南十字星が南八十度の高さに其燦然たる光を放つて居る。又た三光星を北五十度位の高さに仰いだ。

昨日に引續き二十六日も晴曇相半してはつきりせぬ空模様である。風は餘程穩になつたが暴風後の事として激浪は未だ全く収まらず船體の動搖甚しく帆面への反動が激烈であつた。それが爲めに主帆及びガフに故障を生じて之が修理に手間取つた。夕刻の六時頃始めて降雪に遭遇し

二月二十七日(雪)
汽走直航距離百二十海里

南極記

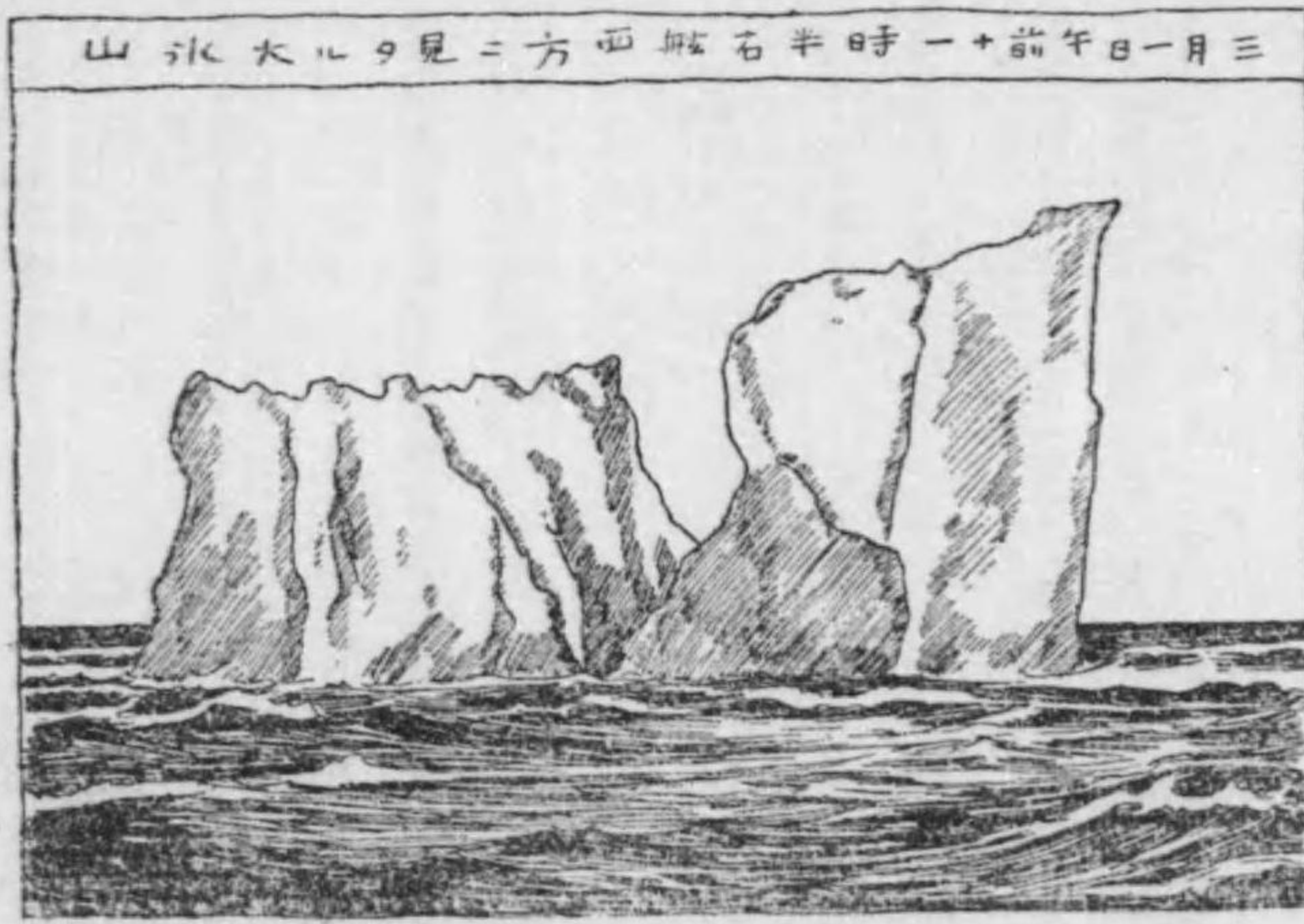


二月十八日午後七時左舷七哩計ノ急流、大冰山、同圍約二哩

た。
二十七日も亦た降雪で、海上の激浪も昨日に異ならぬ。正午から一層天候不良になつて霧雨を催ふし、寒威が一時に加はつて来た。船員等は何時流氷に逢ふかも知れぬと、各々深き注意を海上に拂つて居た。
二十八日の天候は夜來の霧雨で加ふるに北西の風強く、險惡な日和であつた。船の動搖も昨日の如く烈しく、船尾から逆巻き來る怒濤の爲めに、備附の寒暖計一箇を破壊流失せられた。帆は半

初めて流水を見る

最初探検



三月一日午前十一時半石城方面ニ見ル大冰山

ば以上減じて、多くは汽走によつて南進した。進むに従つて寒氣は益々加はるので、常に流水に注意を怠らず拂つて居た。折しも左舷甲板側に當つて、前方の航路に白色の島嶼とも思はるゝ物を發見した。次第に近づき進むと波濤の爲めに破壊されたる二三の小流氷に出遇つた。之が我開南丸が流氷に出遇つた抑々の初めであつて、時に午前十一時四十分であつた。此時海水温は非常に降つて來たので、前方に見ゆる島嶼状の物は、慥かに冰山である